
眠らないきみへ。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠らないきみへ。

【Nコード】

N7702M

【作者名】

津森太吉。

【あらすじ】

帰るところも行くところも、生きるところも、名前さえもなかった小さな子どもは、ある雨の日、不思議な青年に拾われた。彼は子どもと同じ、左右で色の違う瞳を持っていたが、一般からちょっとどころか途方もなくかけ離れたいつも笑っている青年で、そしてとんでもない貴族だった。

00 : なまえ。(前書き)

この物語は、ふいっくしよん！ です(古っ)。
造語だらけですのでお気をつけください。

00 : なまえ。

冷たい雨が降っていた。

とても、とても冷たい、凍えるような冷たさの雨が、ずっと降っていた。

そんな雨の中で一際目立っていたその男は、しのぶ、と呼ばれていた。だから、しのぶ、と呼ばかけたら、その男は誰もが見惚れるような美しい笑顔を浮かべた。

「なんだい？」

「どうして、おれを、たすける」

「助ける？ それは違うよ。僕はきみを拾っただけ」

男は、地べたに転がっていたせいで泥だらけの服を、その綺麗な手のひらでポンポンと払ってくれた。髪まで泥だらけだったが、男はそんなことなど気にする様子もなく、汚れきった頭もくしゃくしゃに撫で回してきた。

「このところずっとここにいていいけれど、寝床がないから、ここにいたんだろ？ だったら、僕のところにおいで」

「……どう、して」

笑みを深めた男は、さも当然のように、それを口にした。

「生きるためだよ」

あまりにもふつつ過ぎる言葉で、けれども泥だらけの怪我だらけの人間が必死に足掻いて手にしようとしているものでもあって、とても惹かれる言葉だった。

「名前は？」

「……ない」

「そう。じゃあ、僕が名前をあげる。僕はきみもさつき呼んだように、しのぶ、だ。綺堂紫武だよ」

「きどつ、しのぶ？」

「シノブ・キドウと言ったほうが、わかり易いかな？」

「しのぶ、が、名前？」

「そう」

にこりと微笑む男に、頬を優しく撫でられる。とても暖かくて、とても心地よくて、うっとりとするほどだった。

「しのぶ」

「うん」

呼ぶと、返事をしてくれた男は、今まで見てきたどんな人間よりも、美しかった。

「きみは……そうだね。今日から、小日向だ」

「こひなた？」

「そう、小日向。おいで、小日向」

伸ばされた手のひらを、拒絶できるほどの力はなくて、むしろ強過ぎるほどに魅了された。

「帰ったら沐浴しようね、小日向」

「いいの？」

「なにが？」

「おれ、みたいなの、きみわるいって、おとなはいう」

「それ言ったら、僕も同じだよ。小日向と同じ目だからね」

そういえば、男と自分は同じ瞳の色だ。それは初め見る自分と同じ色だ。

ただ、男の瞳は片方が黒に近い濃紺だった。

自分はいえ、片方は男と同じでも、もう片方は薄い茶色をしている。

互いに、左右で色の違う瞳。

「しのぶは、おれと、おなじ？」

「そう、同じ。小日向は僕が気持ち悪い？」

「ううん。きれい」

「なら、同じ。小日向も綺麗だよ」

だからだいじょうぶ、と男の手に引かれた。

「帰るよ、小日向」

男が、どうして自分のような小汚ない子どもを助けてくれているのか、それはよくわからなかったけれども、暖かく優しい手のひらを知ってしまったのは、振り払うこともできなかった。

「しのぶ」

男に手を引かれながら、その身長差に驚きつつも、頑張って顔を

上げる。

「ん？」

「ありがとう、しのぶ」

「……どういたしまして」

一瞬だけ驚いたような顔をして、けれどもすぐにまたにっこりと笑って、男は握った手のひらを強く引いてくれた。

そうして、薄汚ただの子どもは、小日向になった。

* * *

とんでもないところに来た、と思ったのは初めのうちだけで、数日はそれまでの疲れのせいか高熱にうなされ、それどころではなかった。そのせいか、いつのまにかそのとんでもなさに慣れてしまっただけらしい自分に、小日向は驚いた。
自分の順応の早さには、呆れる。

ついでに、もう一つ呆れた。

「あれ……男の子じゃないの？」

「ちがうけど」

自分を拾ってきた男は、小日向が男の子だと思っていたらしい。歳のわりに背が低く、成長が遅れているのもそう勘違いさせる要因

の一つではあったらしいが、あとから聞いた話だと、彼は小日向に沐浴させたあとからはずつと、男の子なのかとその言葉遣いから勝手に判断していたらしい。

「だめ？」

「いやべつに」

一瞬だけ、男の子じゃないなら捨てられるのだろうか、そう不安に思ったのだが、紫武はきょとんとした顔でそれを一蹴した。どうやら性別に拘りはなく、どうでもいいらしい。

「そっかあ、女の子かあ」

「なに？」

「うん、間違えた」

なにを、と問おうとして、紫武がそのときずっと手に持っていたものを、改めて目にした。

「僕のお古じゃ悪いと思って、買ってきたんだよね」

そう言った紫武が持っていたのは、男の子が着るような服だった。

「それ、おれに？」

「うん。でも間違えたから、買い直してくるよ」

「いいよ。きる。しのぶが、くれるから」

自分のために買ってきてくれたのなら、と小日向は嬉しくなって両腕を広げ、紫武からそれを受け取るうとした。

「これでもいいの？」

紫武も小日向にそれを渡そうとしてくれたが、阻んだ者がいた。

「紫武さま。小日向さまは、女の子です」

そう言ったのは、小日向がここに来るときも、来てからも、小日向の身の回りを世話してくれている、あまみやとせ雨宮都記という男だった。

「でも、いって言うてくれたよ?」

「小日向さまがよくとも、常識的に、小日向さまは女の子です。買い直してきてください」

「……そう」

紫武がしゅんと肩を落としたので、小日向は慌てて紫武にしがみついた。

「しのぶが、くれるもの」

「こひな……」

「ありがとう、しのぶ」

「……小日向はいい子だね。どういたしまして、ありがとう、小日向」

よしよし、と頭を撫でられると、もうそれだけで胸がいつぱいになる。都記は不服そうな顔をしているが、紫武が笑っているのだ。小日向にはそれで充分である。

だから、小日向はその、真っ白で質素な白い服を着た。今まで着ていた服よりも柔らかく、心地いい肌触りに、身体が軽くなったように思った。

けれども、やはり都記が納得しなくて、結局その服小日向の寝巻になった。寝巻ならこういった形のほうが子どもには合うのだとい

う、都記の小日向への説得による力だ。

しかしながら、けつきよくそれから男の子が着る服が増えた。どうやら紫武の感覚は一般から途方もなくずれているようで、買ってくるものすべてが男の子が着るようなものばかりだったのだ。

そのときになって、漸く小日向は紫武が随分な金持ちであることを知り、だからこんなとんでもない邸に住んでいるのかと理解した次第だ。

「あまみやさん」

「都記でかまいませんよ」

「ときさん」

「はい」

「しのぶ、きぞくさま？」

「ええ、そうですね」

大凡それらしくなく感じるところがあるのは、きつと、とんでもない邸に住まうくせに、召使のような人がいないからだ。

小日向は、紫武と都記以外の人を、邸では見えない。

「しのぶは、ひとり？」

「……小日向さま」

「はい」

「勉強しましょうか」

「べんきょう？」

「会話が少し、不便ですので」

紫武の話をしていたのに、都記がいきなりそんな発言をしたものだから、小日向はそれから勉強なるものを、生まれて初めて行うこととなった。

しかし、そうやって唐突に始まった勉強は、小日向に学をつけることはなかったが、都記が「会話が少し不便」と言って始めたのにも関わらず、小日向の喋り方が激変することはなかった。せいぜい、紫武と都記の名を、発音どおりに喋られるようになった程度だ。

「喋れること自体が奇跡、みたいだったものね」

「うん」

「誰とも会話したことなかったの？」

「あんまり……」

「そっか。じゃあ、仕方ないよね」

やはりこのときも、紫武はとくに拘りもせず、気にした様子もなかった。

「紫武」

「ん？」

小日向が、紫武の名をきちんと発音できるようになってからも、紫武の態度は変わらない。

「ありがとう」

「……どういたしまして」

にっこりと笑うその顔も、変わらない。

そうして、このときになって、気づいたことがあった。

「紫武さま、時間ですよ」

高熱から脱して、紫武が貴族であるらしいと知って、勉強を始め、紫武と都記の名をきちんとと言えるようになってから、約一カ月

が経過していたが、紫武はある時間になると定期的に邸から出て行く。都記が「時間」だと知らせて、そうしてふらっとひとりで、消えるのだ。それから帰ってくるのは一時間後であったり、真夜中であつたり、翌日だったりする。

「どこに行くの？」

訊ねてみた。

「散歩」

としか、紫武は答えない。

帰ってくる時間がまちまちなので、嘘か本当かもわからない答えだ。

「おれも、行く」

そう言ったことがある。

けれども、紫武は連れて行ってくれなかった。

「もう少し、小日向が元気になってからね」

にっこり笑って、流されてしまうのだ。

散歩なら、平気なのに。

そう言えればよかったのだが、言つ前に紫武には逃げられた。

「……都記さん」

「はい」

「紫武は、どこ行ったの？」

「散歩です」

都記までグルになっているから、手に負えない。

「外に出たいですか？」

今日も紫武に逃げられたあと、都記に訊かれた。

べつに、軟禁されているわけでもないし、外に出るなど言われているわけでもない。出たいと思えば、外には簡単に出られる。けれども、小日向はそれができない。

「紫武と一緒にじゃない。だから、いい」

「そうですか」

暖かくて優しい手のひらを知ってしまった。だから、ここから離れたくない。紫武と一緒にならば外に出る気にもなるが、そうでないならその気にはならないのだ。

「でも……」

庭には、出てみたいかもしれない。綺麗な草花や、美味しそうな果物が庭にはたくさん生えているのだ。

窓から外を、下を眺めると、紫武が外套を着た姿で出て行くところだった。

小日向は窓を開けた。

「紫武！」

上から呼ぶと、気づいてくれた紫武が顔を向けてくれた。

「行ってくるね、小日向」

ばいばい、と紫武は手を振って、ひらりと姿を消した。
本当にひらりと、まるで魔法遣いのように。

「……都記さん」

「はい」

「紫武、魔法遣いみたい」

「……そうですね」

都記は、小日向の感想に微笑むだけだった。

それからしばらくして、やはり紫武の出かける先は不明のままだったが、自由に邸内を自分の足で歩けるようになるほど体調も整い、今までくすんでいた髪に艶が戻ってくると、必然的に肌も本来の色を取り戻した。もちろん、荒れて傷だらけでガサガサしていた手のひらも、滑りがよくなった。

「小日向さま、怪我をしませんように」

「うん」

元気になった、と断言できるくらいになると、小日向は都記の後ろについて回って、手伝いをするようになった。

そんな小日向を、紫武がときどきつまらなそうな顔をして見ていることがある。

「こひな、どうして僕じゃないの？」

その頃になると、紫武は小日向を「こひな」とか「こた」とか、なんだか適当に呼ぶようになっていた。そのたび、小日向は紫武に

つけてもらった「小日向」という名を強調するが、一向に変える気がないのでこの頃は諦めている。

「紫武、なにもしない」

「だって家主だもの」

「都記さん、ひとりで大変」

「こひなが役に立っているとも思えないけれど」

グサツと心に痛いことを言われたが、仕方ない、身体が小さいのだ。それでも、ただ世話になるのはいやだから、小日向は都記の仕事を手伝う。それに、都記はひとりでこの邸を回しているので、手が回らないことがけっこうある。小さくとも小日向の手のひらが役立つことは、たまにあるのだ。

なにより、都記はさまざまなことを、そのちょっとした手伝いの中で教えてくれるので、それだけでも勉強になる。

「ねえ、こひな」

「小日向」

「魔法の勉強なんて、いつから始めたの？」

名を強調したのにさらにと無視さえたうえ、なんのことを言っているのかわからない紫武に、小日向は眉をひそめて首を傾げた。

「その陣、こひなの魔法陣だよ。いつのまに完成させたの」

「先頃、完成致しました」

首を傾げてばかりの小日向の代わりに、都記が答える。というかなぜ都記が答えられているのかも、小日向には不明だった。

「あなたと同じ力を持っているだけに、やはり能力値が高いようで

す。呑み込みも早いので、陣の錬成にはそれほど時間がかかりませんでしたよ」

「おやまあ、予想外」

「……見越しておられたのではないのですか」

「まさか。僕はただ拾っただけだもの」

「……、そうでしたか。では、教えないほうがよかったですか？」

「いや、いいんじゃない？ こひなの生きる道に、可能性が一つ増えたわけだから」

頭の上で飛び交う紫武と都記の会話に、小日向はまったくついて行けず、ますます首を傾げた。

クスツと、紫武が笑う。

「なんか、こひなが首傾げているのが、不思議なんだけれど」

「ああ、それは小日向さまが魔法遣いという言葉を知っておられたので、先入観は邪魔だと……説明しませんでしたからね」

「あらあら……やられちゃったね、こひな」

なにが、と思っても、やはり意味がわからない。

「ねえ、こひな」

「……なに？」

「魔法師になる？」

「え？」

紫武が、妖しく微笑む。少し不気味で、けれども綺麗で、不思議な人だなと小日向は思う。

「今、こひなの裡にあるその陣、魔法陣なのね」

「まほうじん？」

裡、と紫武は小日向の胸を指差したが、なんのことかわからないそんなものは、身体はどこにもないし、それ以外のどこにも見当たらない。

「説明は面倒だから、あとに回すよ。とにかくその陣、作れる人つてなかないのね。こひな、作れたみたいだから、魔法師になれるの」

「まほうし、ってなに？」

「まあ、こひなの言葉で言うなら、魔法遣いかな」

「え……」

魔法遣いになれるのか、というのは理解して、驚いた。

「あ、びっくりした？」

おどけるように紫武は言い、おまけに顔が笑っているので、さっき言ったことが嘘か本当かがわからない。

「おれ、魔法遣いに、なれるの？」

「陣を作れたから、なれるよ」

さらりと肯定された。

「こひな、魔法師になる？」

そうして小日向は、魔法師になった。

00 : なまえ。(後書き)

誤字脱字、怪文書など、ありましたらお知らせください。
その折には優しく、お願い致します。

身長が伸びた。

碌な栄養も取れなかった分だけ小さかった身体は、やはりどれだけ食べても代わり映えしなかったが、それでも身長は伸びた。なかなか筋肉がついてくれないことは悔しいところだが、昔に比べれば、格段の差がある。そこらの暴漢や盗賊に襲われたところで、投げ飛ばせるくらいには力がついた。

「最近のこたは可愛くない」

今日は小日向を「こた」と呼ぶ気分らしい紫武が、やはり家主だからといってなにもせず、広い居間でぐうたらしながら、都記に就いて魔法学に勤しむ小日向を見て退屈そうに言った。

「暇なら、紫武もやったら？」

「えー……」

言っただけで、いやそうな顔をされた。

紫武にそんな顔をされても動じなくなったのは、魔法学の基礎を理解し始めた頃のことだ。そのときは今よりもっと身長も低かった言葉も上手く理解できなかった。きちんと喋ることさえできなかった。

それが今は嘘のように、すべてが上手くできるようになっている。

「魔法薬学なんて、楽しい？」

「楽しいとか、そういう問題じゃない。役に立つものだ」

「……昔、役に立つとは思えないって言ったこと、根に持っているね」

「憶えてるの？」

「生憎と僕は無駄に記憶力がよくてね。なんだ、やっぱりそうか」

不貞腐れるさまは、紫武のほうが子どもっぽい。

そう思って、ふと気づいた。

「ねえ、紫武」

「んー？」

寝椅子の上で器用に身体を反転させた紫武が、ぐだぐだとしながら肘掛に頭を寄せ、顔を逆さまにした状態で小日向を見る。

なんとというか、紫武はいつも、なにに対してもやる気がない姿が印象的だ。ちゃらんぽらんとか言ったか。

「歳、いくつなの？」

「え、今さら？」

びっくり、と紫武は顔で表現する。

「訊いたことないから」

紫武は、小日向を拾ってくれたときから、どこも変わらない。顔も、その性格も、態度も、なにかも変わらない。だから歳を訊けずにいたというわけでもないが、実は小日向も実年齢は教えたことがない。

「きみはいくつなの、こた」

「今年で……十七かな？」

「ここにきて？」

「六年とちよつと、かな」

季節を数えていたから、間違いがなければ小日向の年齢はたぶんそれくらいだ。

「はあ……大きくなったねえ、こた」

「紫武の歳は？」

「今年で還暦」

「……都記さん、かんれき、ってなに？」

「ちよつとちよつと、どうしてそこで都記に訊くかなあ？ 還暦っ

ていうのは、まあ僕らの世界の専門用語みたいなもので、つまりはお祝いする歳だよ」

紫武が後ろでなにか言っていたが、小日向はそれを無視して都記に再度問うた。

紫武の誤魔化したような言葉の遣い回しには慣れてきたので、その中で、紫武の言葉が百パーセントのうち八十パーセントくらいが信用ならないことは学習済みだ。

しかしながら、還暦というものについては、嘘はないらしい。

「生まれた年の暦に還ることから、還暦と言つのですよ」

「いくつで還るの？」

「六十年です」

訂正だ。

紫武は嘘を言っている。二十代中頃の顔をしておいて、六十歳だというのは胡散臭過ぎる。

「なにその目」

「わたし、もう子どもじゃない」

「そう言っているうちは子どもだよ」

「おとなはみんなそう言う」

「そんなこと言っちゃうから子どもだって言われるんだよ？」

揚げ足を取られた。

ムカついたから、近くにあった分厚い魔法学の本を、力いっぱい紫武に投げつけてやった。

「ほーら、子どもだ」

あっさりと避けられた。

余計ムカついた。

さらにムカつくと疲れるので、深々とため息をつくとき紫武を無視することにした。

「都記さんは、歳いくつ？」

「無視しないでよ、こたあ」

「紫武より、歳上？」

「こたあ」

煩い。

かまうとさらに煩くなるから、無視だ。

「紫武さまとそう変わりませんよ。一つか二つ……歳上ですかね」

「都記さん、昔と変わらない。紫武も」

「そうですか？」

そつだ。都記も、紫武のように、どこも変わらない。相変わらず小日向のことを「小日向さま」と呼ぶし、それがたまに「こひなさま」とか「ひなたさま」になることもあるが、それくらいで敬語も変わらない。

変わったのは、小日向だけだ。

身長が伸びで、学がついて、ぼさぼさだった髪は綺麗に整えられて、身なりも綺麗になった。

そのすべてが、紫武のおかげである。変わらないところといえば、言葉遣いだけだろうか。

紫武がもし拾ってくれなければ、小日向は今、ここにはいない。こつして生きていることもない。

「ああ、そつだ。こたに訊こつと思つたことがあつた。ねえ、こた、学校に通わない?」

「通わない」

「え、即答? しかもそこだけ無視しないでくれたのに、即答で拒否?」

学校、という言葉の単語は無視できなかったもので、小日向は紫武に振り向く。寝椅子から起きてこちらを見ていた。

視線が絡む。

左右で色の違う瞳が、小日向の左右で違う色の瞳を見つめている。

「学校なんて行かない」

「……どうして?」

「都記さんが全部、教えてくれる」

「都記だけでは教え切れないことだつて、あるよ。学校でしか学べないこともある」

それでも、小日向は行かない。首を左右に振って、否定した。

「行かない」

「理由を教えて、小日向」

ぎっくん、と身体が強張る。

昔はあれほど名を呼んでもらいたくて強調したのに、今はその名をきちんと呼ばれると緊張する。紫武の声色が変わり、真剣味を帯びるから、なんとなく怖いのだ。

「小日向」

また呼ばれて、小日向は視線を外して俯いた。

「……外に、出たくない」

「ずっと引き籠もっているつもり？ 都記に訊いたけれど、このところは部屋からも出なかつたそうだね？ 逆れば、この一カ月、裏庭の薬草摘みに外へ出るくらいで、あとはずっと家に籠っていたそうじゃない」

「それは……研究、してたから」

「勉強熱心なのは、いいことだよ。小日向の作る薬はよく効くって、この辺りでは好評のようだし、その努力は認めるよ。けれど、僕ら以外の人たちとは逢わないっていうのは、駄目だよ」

どうしてそんなことまで知っているのだ、と思って、すべて筒抜けなのは都記がいるからか、と思に至る。

小日向は深く息を吐き出した。

未だ鮮明に残る記憶が、脳裏を掠める。

「気持ち悪いって……」

「なにが？」

「目が、左右で、色……違うから」

髪の色は、周りの人たちと変わらない。薄い茶色だ。左の瞳だつて、薄茶色をしていて周りの人たちと変わらない。

けれども右の瞳は、同じ色は紫武しかない、金色だ。

小日向の姿を見た人は、みんな、気味悪そうな顔をする。その顔はとても嫌いだつた。紫武に拾われる前までのことを、鮮明に思い出して体調を崩すほどに、嫌いだ。

「小日向」

呼ばれて、けれども顔を上げられなかった。

「小日向、僕を見なさい」

強く言われて、仕方なく、恐る恐る顔を上げる。

紫武の、金と濃紺の双眸が、穏やかな光りを携えて、小日向を捉えていた。

「僕が気味悪い？」

紫武は綺麗だ。この辺りでは黒に近い濃紺色の髪は珍しく、同じ色の瞳も珍しい。都記もそうだから、珍しい色を持っている。

そんなふたりを、小日向は綺麗だと思う。

「世の中には、確かに僕らみたいな人のことを、気味悪いって思う人もいる。けれどね、僕らも人だ。その心を大切にして、小日向」
「……うん」

わかっている。

世の中すべての人が、小日向を気味悪いと思っているわけではない。

それでも、嫌いなものは、変えられない。
怖い。

「ん……もう時間か」

時計を見上げた紫武が、寝椅子から立ち上がる。

定期的に出かけているその時間になっていたようだ。どこに行くの、と訊いては「散歩」と答えられ、都記を連れて行くことはあっても、小日向を連れて行くことはなかったところへ、今日も紫武は行くらしい。

「今日は行くの、やめようかな」

「え……？」

小日向がしょぼんと肩を落としたのかわかったのか、紫武は小日向に背を向けて軽くそう言った。

「自ら進んで行きたい場所でもないしねえ……むしろなんとなく
いつか、無理やりというか、気分だったし……うん、今日は行かない」

「え、紫武……いいの？」

「だって行きたくないもの」

それだけの理由で行くのをやめる紫武も紫武だが、今日はずっと一緒にいられるのかと嬉しくなってしまう小日向も小日向だ。

「こひな、今から僕と出かけようか」

小日向を「こひな」と呼ぶ気分になっただけならいいが、紫武に、小日向はきよとんと目を丸くする。

「え？」

「僕が出かけるのと、こひなが外に出ないのと、話は別だからね」
「げ……」

嬉しいと思つた気持ちが、一変する。

「よし、さっそく出かけよう。都記、なにか買い物ある？」

「ちよ、紫武」

のんびり家で過ごしてもいいじゃないか、と小日向は言おうと思つたのだが、小日向が外へ出ること協力的な都記は、紫武の提案に即座に賛同して、買い物ものを紫武に頼んでしまふ。

「香料が切れかけていますので、その補充と……菓子用に果物をいくつか、紫武さまのお好みでお願いします」

「香料はいいけど、果物？ ふむ……菓子用なら、林檎がいいかな」
「？」

「紫武さまのお好みで」

「まあ、料理するのは都記だからね。都記ならなんでも作れるし……と、こひな？ ほら、行くよ」

行くよ、と声をかけられても、行く気になれない。

「……行かない」

一歩後退して、行く気満々な紫武と、行かせる気満々な都記との距離を稼ぐ。

「行くの」

につこり笑った紫武の手が伸び、むんずと手首を掴まれた。無駄な足掻きだとわかっていても、小日向は掴まれた腕を自らに引く張った。

「行かない、ってば！」

「駄々子だなあ、こひなは。都記」

しまった。

敵は紫武だけではなかった。

「行きますよ、こひなさま」

小日向の背後に回った都記に、弱点のわき腹を掴まれた。

「にぎやあ……っ」

くすぐったさに力が抜けた。そのせいで紫武に引く張られ、都記に背を押され、玄関まで易々と運ばれてしまう。

「さあ行くっ！」

元気な紫武にうんざりしながら、仕方なく諦めることにして、小日向は引く張られながらしぶしぶ邸を出た。

邸の周りは、歩いて十分くらいは周りに家も人もない自然の中で、

そこを抜けると住宅街に入る。

右には貴族たちの邸が並び、大きな道を挟んで左には庶民が住まう街だ。貴族と庶民に間に、紫武の邸があると考えればわかり易い。

「あ！」

歩き始めて三十分、浮かれているかのように脚が軽かった紫武が、だんだんと人が多くなり始めた街の入り口で唐突に立ち止った。

「どうしたの」

「……大変だ」

「なにが」

「お金忘れちゃった」

語尾が楽しそうだったのは気のせいではない。小日向に振り向いた紫武は満面笑顔だ。

「帰る」

家に帰れる、と小日向は即座に方向転換したのだが、「まあまあ」と言いながら小日向の腕を掴んだ紫武に動いた力を利用され、さらに反転し元の位置に戻った。

顔が引き攣った。

「遊んでるの？」

「……少し」

悪びれもなく言った紫武に、拳を握る。しかし、紫武はまたにっこり笑って、小日向を引つ張りながら街へ歩き始めた。

「お金はないけれど、だいじょうぶだよ」

「なにが、だいじょうぶだ」

「果物くらいなら、調達できる」

「はあ？」

お金もないのにどうするのだ。

そう思ったが、紫武は躊躇うことなく街に入る。

小日向は俯き、伸ばしていた前髪で瞳が隠れるようにした。

「前を見て歩かないと、転ぶよ？」

紫武は堂々としたもので、左右で色の違う瞳を隠そうともしない。濃紺色の髪だつて、茶や赤の髪が多い街では目立ち、今もわざわざ振り向いている人やもの珍しげにしている人たちが見ているのに、気にする様子もない。

なんて神経だ。

「紫武、目立ってる」

「そう？」

「目立ってる」

ただでさえ紫武の恰好は、貴族のそれっぽい。紫武が貴族かどうかはさておき、そんな人が従者もつけず、小日向のような子どもを引き連れていれば、どうしたって目立つものだ。

「ルー・ティエナ公！」

そんな中、誰かが紫武をそう呼んだ。

「ん？ ああ、ガーンムさん」

紫武は呼びかけに応じ、小日向が戸惑っているのにも関わらず、声をかけられたほうへと足を進めた。

「お久しぶりですな、ルー・テイエナ公」

「お久しぶり。元気そうだね」

「あたしはいつも元気ですよ。しかし珍しいですなあ、公がこちらをお通りになるとは。なにかお求めで？」

「香料と果物を。あとは、散歩。この子が出不精だね」

「ほう……この子が、あの？」

「そうだよ」

なにやら自分を知っているらしい声の主に、小日向は俯かせていた顔をそろそろと上げる。

どん、と目の前に顔があって驚いた。

「うわ……っ」

思わず身体を引くと、目の前にあった妙齡の美しい顔がにっかりと笑った。

「ガーナム・ウェルトだよ。おまえさんが噂の薬師どのか」

「う、うわさ？」

なんのことだ、と小日向は困惑しながらさらに身を引き、笑っている紫武に目で助けを求める。

「小日向だよ、ガーナムさん」

「そうそう、ノフィアラだ。魔法薬師ノフィアラ」

小日向だ、と言ったのに、ガーナムという異様に背の高い美しい女性は「ノフィアラ」と小日向を呼んだ。

「おまえさんが作る薬は、ここいらじゃあちつと有名になってんだ。よく効くつてんで、お貴族さまも求めにわざわざ足を運ぶくらいに。しかし一番は、あたしらみたいな庶民に安価で薬を卸してくれるところですね。そこによく効くとなりゃあ、有名にもなるもんだ」

話はよく呑み込めないが、小日向が作る薬は都記が街に売りに出してくれているので、そのことを言われているのだというのは理解できた。

「こひな、ガーナムさんがこひなの作った薬を街で売ってくれているんだよ」

「え、そう……なの？」

この人が、とガーナムをまじまじと見てしまう。

「ちようどいい。なあ公、専属契約しちゃ駄目ですかな？」

「僕じゃなくて、こひなに訊いてよ」

「ああ、そうか。なあノフィアラどの、あたしと専属契約しちゃうれませんかね」

いきなりのことに、眉が中央に寄る。そのときになって、ガーナムは小日向の左右で色の違う瞳に気がついた。

「ほほ。公と同じ金の目ですな」

「あ……っ」

小日向は慌てて俯くが、ガーナムの気配が目の前から消えることはなかった。

「いろいろと苦勞なさってるようだな」

ふっと笑ったようなその気配に、幼い頃感じたおとなたちのものとは違うものを感じて、強張りかけていた身体の緊張が解ける。

「ノフィアラどの。それで、返事はどうです？」

「……返事、って」

「専属契約ですよ。あたしは医者なんで、薬師と専属契約できれば、薬の調達が楽だ。まあ、ずっとあたしが専売してるもんで、今とあんまり変わらないんですがね」

医者だったのか、と小日向はガーナムを再び見上げる。その顔は穏やかに笑っていて、小日向のことを気味悪がったおとなたちとは、まったく違っていた。

「あ、の……でも、わたし、まだ魔法師に、なってなくて」

「そうなんですか？ え、公？」

魔法師として認められてはいない。そのことが申し訳なくなるくらいには、ガーナムのことは信頼できそうだった。

「だいじょうぶ。こひなは魔法師だよ。この前、その証をちゃんと渡したからね」

「あかし？ そんなの……」

もらってない。

と思ったが、そういえばこの前、黒い外套を作ってもらった。背

中に白い大鳥が描かれた、紋章の入った黒い外套だ。

「そう、あれが魔法師の証。あれを背負えるのは魔法師だけなんだよ、こひな」

「……そうなんだ」

魔法師は紋章を背負う。己れが作った陣になぞらえた紋章で、魔法師ひとりひとりでその紋が違うものだ。

「わたしを認めてくれたから、作ってくれたの？」

「ずっと前から認めていたけれどね。こひなの陣をなにになぞらえようかと考え過ぎて、遅くなっちゃっただけだよ」

肩を竦めて笑う紫武に、自然と小日向は微笑んだ。素直に、魔法師と認めてもらったことが、嬉しかった。

「じゃあ、問題ありませんな。ノフィアラどの、返事はどうですかな？」

ガーナムに再度申し込まれて、小日向は少し照れを感じながら、小さく頷いた。

「わたしみたいな魔法師で、よければ」

「決まりですな。これからもよろしく頼みます、ノフィアラどの」

にっこり笑ったガーナムに、小日向も嬉しくて笑う。

魔法師としての第一歩を、進めた気がした。

今週分の薬代金を渡していなかったからついでに、とガーナムに言われ、どうせだからこっちで買ひものの使いを出しますよ、という厚意に甘えて、小日向は紫武とガーナムの家、診療所と一緒にいるところへお邪魔させてもらった。

「果物は林檎にしてくれる？ あと……柘榴があったら、柘榴もお願い」

「はい、わかりました」

診療所で働く少年に買ひものをしてもらうことにして、それは厚かましいとは思ったが、ガーナムの勢いに負けてしまったので、紫武が少年にそれを頼んでしまった。

「お茶でも飲んで、ゆっくりしてください。公とは久しぶりですし、薬師どのとも話したいですからな」

ガーナムがお茶の用意をしに、通された部屋から出て行くと、小日向は暢気に笑っている紫武を視界に捉えた。

「紫武」

「ん、なあに？」

「なんで、ガーナムさんは紫武のこと、ルー・ティエナ公って呼ぶの？」

気になっていたことを問うと、紫武は誤魔化すわけでもなく、ほんなりと笑った。

「それが僕の家名だからだね」

「家名って……綺堂じゃないの？」

「発音できないんだよ。綺堂って」

「え……でもわたし、昔は発音よくなかったけど、ふつうに言えたよ？」

「それはこひなに魔法師の素質があつたから。ふつうはね、僕の名も家名も、発音できるものじゃないんだよ」

そうなのか、と小日向は首を傾げる。

だから小日向の名も、ノフィアラと変換されたのだろうか。

「じゃあ、公ってというのは？ 紫武が貴族だっていうのはわかるけど」

「まあ貴族といえはそうかもしれないけれど、僕はそんなつもりないんだよね。ふつうの人間、ガーナムさんたちと一緒に」

「でも、公って呼ばれてる。ルー・ティエナ公って」

「それはまあ……うーん。ガーナムさん、そこまでしか譲歩してくれないんだよね」

「そこまで？」

どこまであるのだ、と疑問が浮かぶ。

「たまあに、リアレトって呼んでくれるけれど……むしろそっちでいいんだけど、譲歩してくれないんだよねえ」

「リアレト？」

「まあ、呼び名は気にしないで。こひなだって、これからはずっと

ノフィアラって呼ばれちゃうわけだしね」

「……よく、わからないけど……どうして？」

「発音できないから」

それだけ、と紫武は笑う。

本当にそれだけか疑わしいところだ。帰ったら都記に訊いてみた
ほうがいいだろう。

話題が一段落したところで、ガーンナムがお茶を運んできてくれた。

「東の珍しい茶葉が手に入りましてな」

白いカップに入れられた暖かいお茶は、見たことのない緑色のお
茶だった。

「熱いうちにどうぞ。冷めちまうと色が茶になって、不味くなるん
ですよ」

「お茶はどれも、熱いうちが一番美味しいよ。いただきます」

「冷たいお茶も美味しいもんですよ。夏になったら御馳走しましょう」

少し警戒しながら、小日向は警戒心なく口にする紫武を真似て、
そろそろと緑色のお茶をいただく。少し苦かったが、薬の苦みとは
違って、美味しかった。

「懐かしい味だ……」

「おや、公は飲んだことがおありで？」

「ん、まあね。母の郷里が東にあるから、その関係で」

「ほう、そうでしたか」

ガーンナムが少し驚いたように頷いた。

それは小日向にとっても驚きのことと、初めて紫武が東部出身らしいと知った。

「そういえば東は、黒っぽい髪が多いと聞きます。公はそちらの出身でしたか」

「母がね。僕はこっち。東には生まれてから一度も行ったことがない。これからも行くつもりはない」

「公にもいろいろと事情がありますなあ」
「そうでもないよ？」

ははは、と笑う紫武には、嘘が見えなかった。けれども、そこに陰りがあつたのを、小日向は見逃さなかった。

それから少年が使いから戻るまでの間、小日向はガーンナムとこれからの打ち合わせを、紫武はそれを聞きながら助言したり、他愛もない話をしたり、それぞれ会話を楽しみながら過ごした。

こんなにたくさん、紫武と都記以外に会話するのは初めてのことで、小日向は少し頬が熱かった。

「お使い、ありがとうね、アクセル」

「いいえ、テイエナさま。お役に立てて光栄です。これでよろしかったですか？」

「うん。アクセルは買いものが上手だね。どれも新鮮で美味しそうだ」

「ありがとうございます！」

「いい子なアクセルに、これをお小遣いにあげよう」

「え……そんな、いいですよ。おれ、買いものに行ってきただけだし」

「ガーンナムさんに、アクセルの美味しい料理を食べさせてあげて」

「……、はい！」

さすがは紫武、子どもの扱いが上手い。

使いに出してもらった少年、アクセルの頭を撫でるその姿は、幼い頃自分もそうされたことを思い出させられた。

「じゃあ、またね」

「また来てくださいね、ティエナさま。ノフィアラさまも、これからよろしく願います」

律儀で活発で、優しいアクセルに手を振られながら、手を振り返して、ガーナムの「また逢いましょう」という言葉を背に聞きながら、小日向と紫武は岐路についた。

いつのまにか、夕日が傾く時刻になっていた。

「アクセルはね」

買ってきてもらった果物を見つめながら、紫武がそつ口を開いた。

「赤ん坊の頃に、あの辺りだったかな、捨てられていた子なんだよ」
「え……」

紫武が「あの辺り」と指差したところは、小日向たち紫武の邸がある場所へ続く道の入り口だった。

「ガーナムさんと知り合ったのも、ちょうどそのときだ。僕がアクセルを見つけて、ガーナムさんもそれを見つけて、なんでか僕が怒鳴られて」

「……紫武が、あの子を捨てたと？」

「そう。僕、奥さんも子どももないんだけれどね。違っつて説明して、ここで見つけてどうしようか考えていたんだって言ったら、じゃあ自分には夫も子どももないから自分が引き取るっつて」
「……親切な人だね」

医師だから、という理由だけで、ガーナムが孤児を捨つとは考え難い。きつとお人好しなのだ。

「紫武は、あの子を引き取る気、なかったの？」
「なかったね」

あっさりと紫武は答えた。それはちょっと、驚くことだった。

「じゃあ、なんでわたしのこと、拾ってくれたの」

赤子だったアクセルより、もっとひどい状態というか、薄汚れた近づきたくもない子どもだっただろうに、疑問だった。

「アクセルは生きること必死で、泣いていた。けれどこひなは、ぼんやりしていたから」

「ぼんやりって……」

「生きる気力が感じられなかった。今もまだ、ちょっとそんな感じだね。だから、捨つことにした」

あの頃は、紫武に拾われた頃は、自分が生きているのか死んでいるのか、不明瞭だった。そもそもそれらがどういふことかも、よくわかっていなかったと思う。

「要らない命なら、僕がもらおうと思っつてね」

「……あの子にも言えることだ」

「言えないよ。だってアクセルは命を投げ捨てていなかったもの」
「まだ赤ん坊だった」
「けれど、生きるために泣いていた」

小日向は泣いていなかった。ただぼんやりとしていた。

「ああ、そうだ。言い忘れていたけれど」

につこりと笑った紫武が立ち止って、後ろを歩いていた小日向を振り向く。夕日を浴びた紫武は、なんだか言葉に表現できないほど、綺麗だった。

「こひなの命は、僕のものだからね」

「は……？」

いきなりなんの話だ、と小日向は目を丸くした。

「こひなを拾ったのは僕だから、当然だよ」

「いったいなんの権利なのか、真剣に考えてしまった。けれども、真剣に考えたところで、小日向にその権利を否定する気は起きない。」

「まあ……わたしを拾ってくれたのは、紫武だからね」

自分の命は、紫武に左右される。それは当然だと、小日向は思うのだ。それには疑問すら浮かばない。

「ん。こひなは僕のもの」

小日向の答えに勝手に満足したらしい紫武は、正面に向き直って

歩を再開する。

なぜいきなりそんな話を始めたのかは疑問であったが、まあ言い
たかったのだらうと片づけて、小日向も後ろを追い駆けて歩き出し
た。

紫武が定期的に出かけていた時刻に、出かけなくなった。いや、たまに行っているようだが、行かない日が多くなったように思う。行ってもすぐに帰ってきているような気がする。

そう感じたのは、小日向がガーナムのところへ出入りするようになってからだった。

「公が、ですか？」

どうしたのだろう、と首を傾げていたところで、ちょうどアクセルが通りかかってどうしたのかと訊かれたので、小日向は紫武の行動をアクセルに聞かせた。

「いつも、毎日、同じ時間に出かけてただけだ」

「このところ暑さが目立ってきましたし、公は夏が苦手だとおっしゃってましたから、そのせいじゃないですか？」

アクセルは、見た目はまだ一二、三の歳頃だが、実際は一五歳で日頃からガーナムの手伝いをしているからか、口調がわりと丁寧で学識も高い。小日向の左右で色の違う瞳のことも、とくに気にした様子もなかった。

『それはあなたの個性でしょう？』

と言って、なぜ気にするのかと首を傾げたくらいだ。

「まあ、夏は確かに、ぐうたらな度がひどいけど」

「あとは、フィアさまが外へ出られる機会が多くなったから、そう感じられるのだと思いますよ」

「わたしの行動範囲が、広がったから？」

ガーナムの診療所に入りやすくなった、一月が経つ。

ノフィアラさまとか薬師さまと呼ばれていたのは初めのうちだけで、自然と愛称がつけられ、今ではガーナムに「フィアラ」と呼ばれ、アクセルには「フィアさま」と呼ばれるようになっていた。

「フィアさま、だいぶ引き籠もりだったんでしょう？　今まで気づかなかつただけだと思いますよ」

「そう……かなあ」

アクセルに「フィアさま」と呼ばれるのはくすぐったく、また照れくさい。友だちというのは、こういう感じなのだろうかと思った。

「おれ、公からフィアさまの話だけは聞いていたので、聞く限りじやあそんな感じに思えます」

「え、紫武ってわたしのこと、ここで話してたの？」

「ええ、たまにいらした折に少し。まあ、まさか噂の薬師さまだとは思いませんでしたけど」

「……噂って？」

「ガーナムさんに聞いたでしょう。そういう噂です」

よく効く薬を、安価で提供してくれる変わり者の薬師。

それがガーナムから聞いた自分の噂、街での評価だ。

「ついでに言えば、まさか魔法薬師さまだとも、思いませんでしたけどね」

「ガーンナムさんは、魔法薬師だってわかってたみたいだけど」
「おれは、ですよ。ガーンナムさんはちょっとだけ魔法がわかるんです。けど、おれは魔法がまったく駄目なので、わからないんです。ガーンナムさんだから、魔法薬師さまだってわかったんですよ」

魔法は、遣える者にしか、遣えない力だ。おいそれと、魔法がわかる、とは、遣えない者には言えない。

こうして考えてみると、小日向は自分が考えていた以上に、魔法というものが稀少だったのだとわかる。街には魔法師がおらず、いても簡単に声はかけられない。その背に背負った紋を見て、街の人は畏怖の念で見るだけだ。

「宮廷就きじゃない魔法師さまも珍しいですよ。稀少な方々ですから、ほとんど宮廷就きになるものですし」

「わたしは……まあ、国のために魔法師になろうと思ったわけではないから」

「公に、魔法師になるかと訊ねられて、なったのでしょ？」

「そう。それも紫武から？」

「聞かされました。ちよつと嬉しそつでしたけれど、同じくらい悲しそつに見えましたね」

「え……？」

なぜ、と思う。

魔法師になるか、訊いたのは紫武だ。なれるものならと答えてからは、都記が次々と魔法を教えてくれた。紫武はそれを、ずっと微笑んで見ていたのだ。魔法師の証も、小日向の陣をなにになぞらえるかと考え過ぎたくらい、そして贈ってくれたときは満面笑顔の嬉しそつな顔をしていた。

「公は、ファイアさまが魔法師さまになるのが、ちよつといやだった

みたいですね」

「……なんで？」

「わかりませんよ。おれとしては、今こうしてフィアさまが魔法薬師さままでいてくれて、感謝してるんですから」

薬の調合は難しい。医師でも、薬に関しては専門家を欲する。だから医師と薬師にわけられているのだ。医療に携わる者としての、ガーナムやアクセルの気持ちはわかる。

つまり、問題はそこではない。

薬師は薬師でも、そこに魔法師の名が入るか否か。というところだろう。

「おーい、フィアラはまだいるかー？」

と、ガーナムの大きな声が、診療所のほうから聞こえてくる。

「いますよー。じゃあフィアさま、もうちょっとお付き合いください。ここで調合できる薬はできるだけ多めに、あとはおれが邸に伺いますから」

「わかった」

たかたかと小走りでアクセルは診療所に戻っていく。

小日向がいる場所は診療所の奥、薬を保管している部屋なので、診療所のらしくない威勢のいい人たちの声がよく聞こえる。たまにガーナムの怒鳴り声が聞こえたり、それに伴った笑い声が聞こえたり、ここはいい声がよく響いていた。

「……仕事しよ」

ふわりと窓から入ってきた心地いい風を頬に受け、小日向は微笑

んで今日の残りの仕事に取りかかった。

薬の調合は難しい。

けれども、組み合わせ方と量によって効力が変化するのは、小日向には難しくもない作業だった。むしろその留まりのない範囲には興味がありますます惹かれ、作業にはいつも没頭してしまう。部屋に籠りがちになるのもそのせいだ。

薬を調合したあとは、都記の策略でいつのまにか完成していた小日向の陣、魔法陣を用いて、効力の持続であったり強化であったり、調合だけではどうにもできないそれらを付加する。たまに魔法で薬草を栽培することもあるが、それはこの地方では栽培が難しいものに限る。夏が短いこの地方は、しかし春と秋が長いので、夏と冬にしか生息しない薬草を摘むのは無理があるのだ。それを魔法で補うのである。

「うん……今日は、この辺かな」

一般的に注文が多い風邪薬や痛み止めを多く調合すると、空は茜色に近づきつつあった。

夏が近づいているせいか、この頃の陽は沈むのも遅い。そろそろ夕食どきだという外の匂いが、小日向に帰宅の時刻を知らせた。

「ファイアさま、お帰りですか？」

「うん。また来るよ、アクセル。ガーナムさんよろしく」

「お送りします。ちょっと待ってください」

「そんなのいいよ」

「ああ、ファイアさま！」

待ってください、とアクセルが慌てているのを無視して、小日向はさっさと診療所を出た。

自分より幼いアクセルに送られるのはなんだか情けないというか、紫武だってひとりでふらふら歩いているのだから、それくらいはひとりですら平気だと思っただけ。街は陽が沈めばそれなりに危険はあるが、明るいうちはその危険も少ない。

ひとり歩きができないほど幼くもないので、小日向は家路を急ぎつつ街の匂いに心を躍らせた。

「おい」

邸へ続く道へ入ったとたん、後ろから声が飛んできた。それが自分のことを呼んでいるものだとは思わなくて、小日向は声には反応せず道を進む。

「そなたのことだ、魔法薬師」

「……わたし？」

なんだ、自分を呼んでいたのか。魔法薬師なんて呼ばれ慣れていないから、わからなかった。

そう思って振り向いたら、いきなり口許に布を当てられて、それが薬品を浸みこませてあるものと気づいたときには、もう遅かった。

「おまえがノフィアラだな」

「だ、れ……だ」

視界がぼんやりする。意識が遠のく。

まずい、そう思っても身体が言うことを聞かなかった。

「余の顔も知らぬか……まあ、そうであるつな」

薄く笑った顔がぼやけて見える。それでも、その顔が誰かに似ていると感じた。

立っていられなくなって傾いだ身体は、小日向を襲撃したその人物の腕に支えられ、そうして小日向は混乱する前に意識を手放した。

目を覚ますとそこは寝椅子の上で。

これは神経を麻痺させる薬ですから、と都記に一番初めに教えられた薬の後遺症を、頭に感じた。

「あたま、いたい……」

せつかく後遺症のない薬を開発できたのに、どうして改良前の薬品に負けなければならぬのだと思った。頭痛は一時間程度で治まるが、ひどく身体が重く感じ、思考もまともに働かない。

ここはどこだろう、と思い始めたのは、視力が戻り始めた頃だった。

「起きたか、薬師」

その声に、小日向は視線を巡らせる。衣擦れの音がすると、扉が閉まる音も続き、誰かが向かいの寝椅子に腰かけた。

「……だれだ」

薬の後遺症がまだ抜けない。そのせいで身体も自由にならなくて、本当に厄介な薬を使われたものだとして舌打ちする。

自分の今の状況はよくわからないが、薬で神経を麻痺させられ拉

致されたらしいというのは、意識を手放すまでのことを憶えていた
のでわかる。しかし、目の前の男は、憶えていない。というより、
知らない男だ。

「余はアレム。オリアレム・ルー・アナクラム」

「アナクラム……？」

その家名には、憶えがある。

「そなたは、ノフィアラ・ルー・ティエナ……いや、綺堂小日向、
であったか」

なぜ名を呼べるのだ、と小日向は瞠目し、そうしてやっと霞みが
取れた目で、その男を見た。

「しのぶ……？」

紫武と同じ顔だ。

いや、髪や瞳の色はまったく違って、男は白金の髪に紺色の瞳だ。
ただ、顔の造りが紫武にそっくりで、しかしそこから溢れる雰囲気
は紫武とは真逆だった。

「余はあれと似ておるゆえ、見間違われることもあるが、あれとは
似ても似つかぬ色だ」

見てわかるう、と男は苦笑する。

顔だけが紫武に似ているらしい男は、笑い方も紫武とは違ってい
た。

紫武は、終始笑顔絶やさない。

けれども、なぜか苦笑はこぼさないおかしな男だ。困ったときは困った顔をするし、苦しいときも苦しい顔をする。滅多にそんな顔を見ないのは、終始笑っているせいだ。

しかし目の前の男は、オリアレムと名乗った男は、言ってしまうが紫武よりも表情が豊かだ。

「あなたは……」

「無理に動くな。そなたが作る薬が手に入ればよかったのだが、無理であったゆえ、こちらで用意したものを使ったのだ。しばらくは動かぬほうがよい」

拉致したくせに異様な優しさを見せるオリアレムに、小日向は眉をひそめる。なにがしたくて小日向を拉致したのか、よくわからない。

「あの、どうして、わたしを……？」

とりあえず危害を加えられることはなさそうだと、小日向は起き上ろうとしていた身体を再び横たえさせ、紫武に似た顔のオリアレムを見つめる。

「あれが、来ぬようになってな」

「あれ？」

「日に一度は顔を見ぬと、心配でならぬ。いつも言うておるのだが、最近は来ぬのだ。ならば、あれが子にしたそなたがここへ来られるようにすれば、あれも来るようになるかと思うたのだ」

あれとは、まさか、紫武のことだろうか。日に一度、という単位だけで小日向はそれを直感する。

案の定だった。

「あのねえ、アレム。それ、招待しただけだって言ったら、僕はあなたを殴りますよ?」

その声は、窓からの侵入者から発せられていた。

「やっと来たか、紫武」

オリアレムの声がパアツと明るくなったのは、紫武の登場によるものだ。

「しのぶ?」

「ああ、こひな。ごめんね、来るのが遅れちゃって」

そう言いながら、紫武は小日向が横たわっている寝椅子に駆け寄ってくる。そつと起こされて、まだふらふらするほど痛む頭に顔をしかめると、紫武を包む空気に剣呑さが交じった。

「よくも僕のこひなにひどいことしてくれたね」

「なにを言う、紫武。余は招待しただけだ」

「これのどこが招待だ、と思ったのは小日向だけでなく。」

「それは拉致ですよ、オリアレムさま」

紫武と一緒に来たらしい都記が、窓から侵入しながら呆れたように言った。

「おお、今日は都記も一緒か。久しぶりだな、都記」

「お久しゅうございます。しかしながら、挨拶よりも己が身をご案じくださいませ」

「うん？」

オリアレムが首を傾げたとき、それはすでに発動直前となっていた。

「僕は言いましたよね、アレム。僕を怒らせるようなことをすれば、いくら温厚な僕でも容赦はしないと」

にっこり悩殺級の美しい笑顔で、紫武はオリアレムの首周りに陣を巡らせていた。

それは初めて見る、紫武の魔法陣だった。

「……それほど、その者は大切か」

「大切かどうかの問題じゃありませんよ。こひなは、僕のものです」

「そなたがもつとも嫌悪する魔法を遣わせるほどの者ではないか」

「それくらい怒っているということですよ、アレム。まあ、今日のところは許しましょう。僕は争いに来たわけでも、ましてアレムを殺しに来たわけでもありませんからね。ただ、二度めはないと思っ
てください」

発動直前であった魔法が、陣が消えると同時に消失する。

直前で魔法を消失させるなど高度な技で、そこで小日向は紫武の実力を知った気がした。

「しのぶ……」

「こめんね、こひな。ばか兄のせいで、こんなめに遭わされて……」

今度、きつちりお仕置きしておくからね」

「……兄？」

「母親違いだけれどね」

驚くべきことを聞いた気がするのだが、紫武があまりにもあっさりしているというか、むしろ適当な言い方をするので、あまり驚けなかった。

紫武は動けない小日向をひょいと腕に抱き上げた。

「都記、帰ろう。アレムにかけていた魔法は取っちゃって」

「御意」

頷いた都記に慌てたのはもちろんオリアレムだが、その声はとくに焦っていなかった。

「もう行ってしまうのか、紫武よ」

「殺されなかっただけマシだと思ってください、兄上」

「余は招待しただけだと申したであろう」

「訂正します。近いうちにその首もらいに来ますね」

にこやかに恐ろしいことを言っている。

本気の目で、冗談抜きで、恐ろしいことを言っている。

ちよつとゾツとしたが、紫武の本気を流して聞くオリアレムも相当だと思った。

「待て、紫武。余はそなたを心配して……」

「いい加減にしるよ、くそ兄貴」

ぎょつとした。

紫武の口からそんな乱暴な言葉が出てくるとは、顔と笑みが最強

なだけに違和感が強過ぎる。

「これ、口が悪いぞ」

「てめえが言わせてんだ、くそ兄貴。殺されねえだけマシだと思え。おれのこと棚に上げてこひなに手え出しやがったら、マジで殺すからな」

「そなたの子も連れて参ればよからう。余は寛大だ」

「都記、そのくそ兄貴殺せ」

「これ、紫武。余はそなたの兄ぞ」

「とりあえず逝つとけ？」

綺麗な笑顔で乱暴な言葉がぼんぼん出てくる。それはちよつとどころか怖くて、小日向は顔を引き攣らせながら紫武の胸元を引っ張った。

「し、しのぶ……」

「ん。だいじょうぶだよ、こひな。そのくそ兄貴は都記が始末してくれるからね。安心して帰ろうね」

安心なぞできるか、と叫びたい。

物騒なことをぼんぼん口にしておいて、それはないだろう。

「しのぶ、帰ろう。うん、今すぐ帰ろう。わたし、おなかすいた。

あたまもいたい」

「ああ、それは大変。都記、兄上のことは放っておけ。あとで殺す楽しみがある」

それも違うだろう、と叫びたいが、とりあえずこの場で惨劇が起らないことにホツとし、小日向は紫武の胸に顔を埋める。ただでさえ頭痛がひどいのに、さらにひどくなった気がした。

このふたりは本当に兄弟なのだろうか。

「しのぶの、あの口調、なに」

「街で憶えてしまわれて」

来たときと同じように、紫武と都記は窓から再び失礼した。紫武に抱えられた小日向も、三階ほどの高さからの落下には肝が冷えたが、都記の魔法で着地の衝撃はいなされ、また空間移動魔法も併用させたようので、着地したそこは紫武の邸前だった。

「憶えたからって……ていうか、本当に兄弟なの？」

「ええ、異母兄弟ですよ」

眩暈がした。

いや、眩暈がひどくなった。

淡々と質問に答えてくれる都記の神経がわからない。

「あれが兄だなんて思いたくもないね」

「同じ顔だった」

「あんなのと一緒にしないでよ。あああ、マジで殺したくなってきた」

「いやいやいやいや」

「まあ、あとでちゃんと殺しに行くけれど」

「紫武！」

ああ、駄目だ。眩暈がいつそうひどい。痛みが増して意識が飛びそうだ。

「わお、大変。都記、中和薬ある？ 早く吞ませてあげないと」

急にぐったりとなった小日向に紫武は慌てて邸に駆け込むが、頭痛の原因は確かに薬ではあっても悪化させたのは紫武だ。

「こひな、吞んで」

自室に運び込まれてから、小日向は紫武に中和薬を吞ませてもらうて、寝台に深く沈むと長くため息をついた。

「で、わたし、なんで紫武のお兄さんに、拉致されたの」

「僕が行かなかったからだろうね」

「お兄さんのところに？ いつ行ってたの」

「散歩のついでに」

あの定期的にいなくなっていた時間か、と思い至る。それなら、小日向の直感どおりだ。

「わたし、紫武にお兄さんがいたなんて、知らなかったけど」

「黙っていたもの」

「なんで」

「隠しようもない事実だから」

「……なにが？」

「あれが兄だということ」

意味がわからない。

顔を歪めて紫武に視線を向ければ、紫武は不貞腐れたような顔をしていた。

「嫌いななの？」

「まあ、殺したいくらいには」

ひく、と頬が引き攣る。

「本気で？ 冗談抜きで？」

「いつか殺してやるつとは思っているよ」

「……うわ」

それなのに定期的に逢いに行っていたとは、もしかや暗殺するために行っていたのだろうか。

「……恨んでるの？」

「いや？」

「じゃあ、なんで」

殺したいだなんて、なぜそんな簡単に言ってしまうのだろうか。

「とりあえず死んだほうがいい人間っているだろう？ 兄上はそれに該当するんだよ」

「いや、それ紫武理論だから」

「僕理論じゃないよ。だって、都記だって兄上を殺したいと思っているもの」

「ええ？ 都記さんまで？」

巻き込んだのか。紫武はそこまで都記を巻き込むのか。と都記を不憫に思ったが、都記は笑顔で頷いた。

「とりあえず死んでおいたほうがいい人間はいますでしょう？」

この人、世界が紫武で回っている。

「都記さんまで……なんで」

「オリアレムさまが死ぬべきお人だからです」

「意味がわからないよ。なんの恨みだよ、それ」

「そうですね。わたしのこれは、確かに怨恨でしょう。紫武さまとはそこだけ意見が違います」

「……え？」

にこにここと笑って言うことではないのは先ほどから変わらないが、これほど表情と言葉に一致が見られないのはおかしい。

中和薬が効力を発揮し始めて治まりかけた頭痛を、それでも持て余しながら、小日向は不貞腐れた紫武と笑顔の都記を交互に見つめた。

そうして、不意に思い出した。

「……紫武、魔法が嫌いななの？」

「うん？」

「魔法。嫌いななの？」

紫武はオリアレムに、嫌悪する魔法を遣わせるほどの、と言われている。

嫌いなものを遣わなければやっていられないほど、小日向を大事に思ってくれていることは嬉しい。いや、小日向は紫武のものなので、奪われていい気はしないのは当然だ。

しかしながら、紫武が嫌いなものは、魔法だという。

「嫌いだよ、魔法」

「……なんで？」

紫武の陣を初めて見た。

とても綺麗で、繊細な陣だった。

小日向の陣も完璧を誇るものではあるが、それよりもっと精密で美しい陣だった。

陣がものを囲むように変形するとは知らなかったが、あんな遣い方もあるのだろう。きっと紫武は、右に出るものがないほど能力の高い魔法師だ。

「魔法はいいことを運んできてくれるけれど、例えばこひなとかね。それよりもっと多くのよくないことを運んでくる。だから嫌い」

「よくないことが、いっぱいあったの？」

「むしろよくないことだらけだよ」

肩を竦めて嘆息した紫武は、小日向の寝台の端に腰かけ、脚を組んだ。

「こひなが魔法師になったのはべつにいいの。それはこひなが選んだ道だし、そういう素質を活かすのは当然だもの。けれどね、僕はその魔法のせいでこひなを奪われた気分を味わったよ」

「なに、それ」

「こひなが僕にかまってくれなくなった」

「違うだろ、それ、確実に、関係ないだろ」

話を挿げ替えるなど咄嗟に突っ込みを入れるが、なぜか紫武は真剣だった。

「大いに関係あるよ。こひなは僕のものなのに、魔法のものにされちゃって。悔しいあまり、とりあえず兄上殺そうかって、毎日様子伺いに行っていたし」

「やっぱりそうなのか！」

とりあえずで兄を殺しに行こうと考える神経が不明だ。

ちらつとしか会話しなかったが、オリアレムは紫武を心配している様子であつたし、顔を見なければ安心できないというようなことを言っていた。傍から見ればそれは立派な兄、ちよつと過保護のよ
うな気もするが、それでも十分な優しさを持った兄だ。

「そこにお兄さんも関係ないだろ」

「あるよ。それくらいの殺気、兄上に向けないとやってられない」

「……矛先おかしいよね、それ」

「ああああ……こんな話しなきゃいけないなんて、やっぱり兄上殺
してくればよかったなあ」

「あのねえ……」

どうしても兄を殺したいらしい紫武に、もう呆れたため息しか出
ない。

とにかく紫武は兄が嫌い、殺してしまわなければ気が済まない
のだろう。たとえそれが恨みではなくとも、それくらいには想いが
強いということだ。

「都記い、やっぱり兄上は殺すべきだったよう」

ばたん、と身体を寝台に倒した紫武が、駄々子のように唇を歪ま
せる。都記の笑顔は崩れない。

「今からでも殺しに行きましょうか」

「都記さん待って！」

この人は紫武で世界が回っているから要注意だ。

「こひなが外に出るようになったから、最近はまあいいかって、兄上殺しに行く気も起きなかったのだけれど……そもそもあの顔見たくもないし」

「……同じ顔だから？」

「一緒にしないでよ」

「色が違うだけで同じ顔じゃないか」

「都記、兄上殺してきて」

「都記さん待って！」

オルレアムのごときは禁句だ、と痛いほど理解できた。都記が素直に紫武の言うことを聞いてしまう。

「もう……お兄さんが嫌いなのはわかったよ」

「違う違う。殺したいの」

「いやもうわかったから」

紫武から物騒な言葉は聞きたくない。というか似合わない。ちらんぼらんな印象が強いだけに、切れたら怖そうだなとは思っていたが、こういう切れ方は身体に悪いだけだ。

「ねえ、紫武」

「なあに？」

「わたしが帰ってこなくて、びっくりした？」

唐突に問うと、紫武は一瞬きよんとした顔をして、それから顔に翳りを見せた。

「肝が冷えた」

そう言って、身体を起こして小日向に背中を向ける。声に抑揚はなく、どんな顔をしているのかもわからなくなった。

小日向は苦笑する。

「魔法薬師だから戦闘力は低いけど、それでもわたしは魔法師だ。そんなに冷や冷やするほどのことでもないだろ」

「それでも」

「……心配性だね」

「こひなは僕のものだから」

「……そうだったね」

ばふ、と再び倒れた紫武は、今度は横に倒れたので、小日向の腕にその頭が預けられた。陽光を受けないと黒く見える髪はさらさらとしていて、硬質そうな印象なのに柔らかかった。

「こひな」

「なに」

「僕の心臓で遊ばないようにしてね」

「は？ なにそれ」

「僕の心臓は弱いから」

「だから、意味わかんないって」

なぜ心臓の話になるのだ。相変わらず紫武の言っていることは意味不明なことばかりで困る。

「こひな……こひな、こひなは僕のものだよ」

心臓の話が理解できたのは、このあとしばらく経ってからのことだった。

だからって、どうしてこんなことになっているのだろう。

小日向はいくつもの疑問符と、いくつもの呆れを持ちながら、目の前の光景を見ていた。

「漸く来たか。余はそなたの薬を所望する」

「はあ……」

「余はこれでも忙しい身でな。多忙ゆえ、休息もままならぬのだ」

「そうですか」

「よって、そなたに滋養の薬を所望する」

「べつにそれはかまわないですけどね。あなた、ここに来るなんて命知らずですよね」

「余に命知らずと？ なにを言う。余は命を大事にしておるぞ」

「いやいや、ちゃんと周り見てくださいよ」

この凄惨を極めた庭をちゃんと見る。と小日向はため息をつく。

せつかくの美しい草花は根こそぎ掘り返され、美味しい果物を実らせる木々は雑ぎ倒され、あまつさえ庭に面した広間の窓はすべて割れている。

この惨事、すべて唐突に来訪したオリアレムの責任である。

そして、紫武に命を狙われながらも生き延びた理由が、ここにあった。

「ああああ……僕の庭、アレムのせいでごちゃぐちゃだよ」
「いやいや、一旦は紫武のせいだからね」

唐突に来訪したオリアレムを、紫武が毛嫌いしているはずの魔法で、これもまたいきなり攻撃した。庭は、そのとき紫武の魔法攻撃をのりくらりとオリアレムがかわしたせいで、この凄惨を極めたのである。火や水を遣った攻撃ではなく風の攻撃ゆえ、これだけで済んだとも言えるかもしれないが、それにしても庭にとっては大迷惑だ。

魔法攻撃の気配を感じてから小日向が外に出てみれば、とにかくいやそうな顔をした紫武と表情一つ変えずに空気だけ楽しそうにしたオリアレムがいて、庭の端で都記がお茶を飲んでいた。

状況はすぐに理解できた。紫武の魔法を見られなかったのは残念だったが、見なくてよかったとも思った。

そうして、オリアレムの先の言葉である。

「今日はそなたに用事があるのではない。そちらの薬師に用事があるのだ」

「兄上、僕の話きちんと聞いていませんよね。こひなに手を出したら、マジで殺しますよ?」

「すでに殺す気ではないか」

「当たり前ですよ。いつだって殺したいんですから」

「まあよい。とにかく今日は薬師に用事があるのだ」

殺されるかもしれないというのに、オリアレムは飄々としている。どこ吹く風だ。

「薬師よ。余に滋養の薬を処方致せ」

「都記、とりあえず兄上殺すから、こひなを邸に戻してくれる？」

「いやいやいや、と小日向はとりあえず焦って紫武に駆け寄った。

「落ち着いてよ、紫武。これ以上暴れたら、庭どころか邸が半壊するから」

一方的な兄弟喧嘩で住家を失いたくはない。

「薬師よ、聞いておるのか？」

「聞いてます。だからちよつと黙ってください」

どこまでも人の話を聞かないオリアレムに一瞥をくれて、小日向は深々とため息をつく。ため息をつき過ぎて幸せが逃げてしまったではないか。

「いきなり喧嘩しないでよ、紫武。庭だけじゃなく、家まで壊す気？」

「兄上が悪い」

「いやそうだけどね。命知らずなお兄さんが悪いけどね」

「あんなの言うことなんか聞かなくていいからね、こひな。もし言うこと聞くなら、毒薬に変えるからね」

マジな目をして言う紫武に、この兄弟は本当に兄弟だろうかとまたも疑問に思う。

と、そのときだった。

「へええええいかあああ！」

という、とても大きな声が庭に響いた。声のした方向を見れば、邸に繋がる道から複数の人影が近づいてくるところで、また「へええええいかあああ！」という声が、その人影の先頭から聞こえた。

「あー………煩いのが増えた」

「……あの、紫武？」

「なあに」

「今、へいか、って聞こえたけど」

「うん」

「へいか、って、陛下？」

「そうだよ」

「誰のこと？」

あれ、と紫武が指差したのは、面白くなさそうにしたオリアレムだった。

そこで、はたと小日向は気づく。

オリアレム・ルー・アナクラム。

「国王陛下かよ！」

「ん？ 余がどうかしたか？」

どこかで聞いたことのある名だと思っていたが、それもそのはずだ。

この国、ディアル・アナクラム王国の国主の名は、オリアレム・ルー・アナクラムである。

国名が長いのでディアル国と呼ばれることが多く、アナクラムのほうは忘れがちになるため、気づかなかった。

「陛下、陛下、陛下あ！」

ものすごい勢いで走ってきたその人物は、その身を銀の鎧に包ませた大柄な騎士で、そのあとを数人の騎士が追ってきた。さらのその後ろには馬車が続いており、身分を隠すためか童旗は掲げられておらず、しかし貴族が乗るものだという雰囲気があった。

「いきなりいなくならないでくださいよう、陛下あ！ 宰相閣下に殺されるのはわたしなんですからあ！」

「ユギか。遅かったな」

「遅かったな、じゃねえ！」

「口が悪いぞ、ユギ」

「庶民出のわたしを近衛にしたのはあなただ！」

「そうであった。よし、今度その口で話したら騎士位を返上したまえ」

「そりやないですよ、陛下あ！」

「煩い。」

「ひたすら煩い騎士だ。怒ってみたり縋ってみたり、感情があつちこつち飛んで忙しない。」

「あ……なんていうか、こごどこ？」

「僕の邸だね」

「だよ。なのに、なんで陛下がいるのかな。あと騎士も」

「兄上が勝手をするからだ。なにも騎士まで引き連れて僕に殺されに来なくていいのに」

「いやいや、殺されに来たわけじゃないからね」

「ああ煩い、と紫武は顔をしかめ、そばに来た都記も煩わしげな顔

をしていた。小日向も同様である。

煩い騎士はオリアレムに突進すると、その足にしがみついて泣いていた。

「うう、見つからなかったらどうしようかと……しかも閣下には、見つからなかったら殺すとまで言われて……もうわたしを置いていなくならないでくださいよう、陛下あ」

「すまぬな、ユギ」

「反省してください！」

涙の再会ですか。ほかでやってくださいよ。

と小日向は肩を落とし、とりあえず凄惨を極めた庭を戻すため、彼らに背を向けた。

「なんか、驚くのもあほらしい」

オリアレムが国王と聞いて、多少は驚くが、人の話も聞かず命知らずな暢気な男だとわかっているだけに、それすらもあほらしく感じってしまう。

「……、ん？ お兄さんが国王陛下なら……紫武って」

「王弟殿下あ！」

煩い騎士に邪魔されたが、それは小日向が思い至った言葉でもあった。

「僕をそう呼ぶな、ユーギナレス」

「あだっ！」

煩い騎士の頭に、紫武が庭の敷石を一つ投げ、命中させた。ふつうなら大怪我ものだが、煩い騎士は瘤を作っただけだった。

「そ、そうでした、ルー・テイエナ大公閣下」

「ユーギナレスにそう呼ばれると腹立つ」

「あだあ！」

二つめの敷石が命中した。なんというか、紫武がどんどん乱暴者になっていく気がする。

「わ、わたしを、殺す気ですか、大公」

「まさか。僕が殺したいのはアテムだよ」

「わたしを巻き込まないでください」

「ユーギナレスも、顔を見ていると殺したくなるんだよね」

「やめてください！」

会話の方向がおかしいと思うのは、ここでは小日向だけだろうか。

「……もう、どうでもいいや」

この異様な空間で、自分だけ振り回されるのはなんだか癪だ。こっぴどく無視である。

「こっぴどく？」

「ほっといて」

小日向は庭の、可哀想な場所になっているところの中心に立つと、足許に己れの陣を敷いた。

「今、治してやるから」

勝手な奴らに荒らされて、ごめん。その謝罪を込めて、目を閉じる。

魔法は想像だ。

ああしたい、こうしたい、そういう思いが魔法となる。魔力はその付加要素で、魔法を遣ううえで発現させる力のことをいう。魔法が遣える者と遣えない者と分かれるのは、その魔力があるかどうかという差だ。魔力があれば発動できる力があるということ、そのための陣を錬成できる。なければ発動できないということ、陣も錬成できない。

小日向は光り出した陣に想いを乗せ、限りなく美しい状態だった頃の庭を想像した。

「ああ……よい状態になりましたね、こひなさま」

「そう思う？」

「ええ。前よりも立派になりましたよ」

あまり褒めない都記にそう言われると、喜びよりもホッと安堵する部分のほうが強い。

よかった、と胸を撫で下ろすと、騒ぎで放り出してしまった研究に戻るため、くるりと踵を返した。

「薬師よ」

ああ、忘れていたかったのに。

「……はあ、まだいたの」

この国はわりと平和だ。いや、今のところは平和が続いている。だから国王が自由に動いているのは、まあいいだろう。しかしだからといって暇でもあるまいに、この国王は本当に暇なのだろうか。

「滋養の薬を余に……、ほっ！」

言い終わる前に、紫武の魔法攻撃がオリアレムに飛び、そして軽やかに避けられていた。

「ちっ……さっさ死ねばいいのに」

油断を誘っても紫武の攻撃はオリアレムに当たらないらしい。

やはりこのときも、紫武の魔法を小日向は見る事ができなかった。

諦めたら、と言おうと思ったが、紫武の尋常ではない殺気には通用しない言葉だと思い直し、深々とため息をつく。

「紫武。これ以上ここ荒らさないでよね」

「だって兄上が殺されてくれないんだもの」

「それふつうだと思うけどね」

殺されに来ているわけではないのは明白なのだが、紫武が本気なのも明白だ。
仕方ない。

「紫武のお兄さん」

「む、なんだ、薬師よ」

「あげる」

小日向は懐から出した小さな布袋を、オリアレムに向かって弧を描くように投げた。

「なんだ、これは？」

「万能薬もどき」

「もどき？」

「使えばわかる」

オリアレムに渡った小さな布袋には、指先ほどの大きさの丸薬がいくつか入っている。本当はガーナムのところへ持っていく予定のものだったが、これ以上紫武に暴れられるのは正直迷惑でしかなく、またオリアレムの存在も迷惑にしかならないので、薬で帰ってくれるなら貴重な薬でもあげてしまったほうがいい。

「それ、街の相場だと三年分の生活費らしいから、大事にしてくださいね」

「……、一袋が？」

「一粒が、です」

滅多に流通しない薬だと言えば、さすがのオリアレムも顔を引き攣らせていた。

少し大人しくなったオリアレムを見て、紫武もそうなって欲しいがため、小日向は紫武の腕を掴むと引っ張って邸へと歩を進めた。オリアレムは放置である。

「こた、あんな高価な薬、兄上にやることなかったのに」

今度は小日向を「こた」と呼ぶ気分になったらしく、邸に入るとすぐ、紫武が文句を言ってきた。

「もどきって言ったでしょ。高くないよ、あれ」

「ええ？」

「相場のこと、らしい、って言ったでしょ。本物だったらともかく、あれはもどきだからね」

「……騙したの？」

失敬な、と小日向は眉をひそめる。

「わたしは一度も断定的なこと言ってない」

「そうだけれど……さすがは、こた？」

「材料をちよつと変えたら作れた、偶然の産物だよ」

意図して作った薬ではなく、偶然的に作れた薬だ。それでも貴重であることには変わりないが、もどきだということを忘れてはならない。

「こたはすごいねえ」

感心する紫武に、小日向はそうでもないと言った。首を左右に振っておい

「オリアレムさまがお帰りになりましたよ」

居間に入って長椅子で一段落したと落ち着くと、都記がそう言いながら室内に戻ってきた。

「やっと帰ったか」

「ええ。まあ、ユーギナレスの説得による部分もありますが」
「二度と兄上が入れないよう、結界でも張ろうか」
「それが一番ですね」

そうしてくれ、と小日向も思う。

また庭を壊滅させられたら、たまったものじゃない。

「にしても……お兄さん、逃げるの上手いね」

「都記、兄上が褒められたから、呪い殺してくれる？」

「紫武！」

どうしてそう話を飛ばしてしまえるのか。

とにかく紫武の前でオリアレムのこと禁句のようだ。

あんな国主でも、いや紫武に殺意を持たれている国主でも、この国の頂点に立ち象徴となっている国王陛下であるから、実弟たる紫武にその罪を背負わせるわけにはいかないだろう。

しかし気になる。

それでも気になる。

「わたし、部屋に戻るよ」

「ん、そう？　じゃあ僕はちょっと外に行ってくるけれど」

「お兄さん殺すなよ」

「わざわざそんな無駄なことしないよ」

先刻まで全力で殺そうとしていたくせに、無駄と言うのはどういう気分落差なのか。

「必要なものとかあったら、買ってくるよ。なにか欲しいのある？」

「とくには……あ、街に行く？」

「行くかもしれないし、行かないかもしれないね。なに？ ガーナムさんのところ？」

「そう。寄る暇があるなら、これ、渡して欲しい」

懐から、オリアレムに渡したものと同じ小さな布袋を出し、紫武の手のひらに乗せた。

「これも、もどき？」

「そう。一つでごめんなさいって、伝えて」

「やっぱり兄上殺して」

「いいから。また作ればいいだけのことだから」

この支離滅裂な思考回路をどうにかして欲しい。

「……仕方ない。頼まれるよ」

「そうして。じゃあね」

渋々兄上暗殺を諦めた様子で、紫武は唇を歪めていた。

小日向は、居間を出る間際、ちらりと都記を見た。視線に気づいた都記がにこりと微笑んだのを確認すると、自室へと戻ったのだった。

手加減しておられるわけではないのですよ、と都記は言った。だからといって、本気でもないと言う。

小日向は紫武がひとりで出かけたあと、自室に来てくれた都記にオリアレム来訪時のことを訊き、気になったことを問うていた。

「本当のところ、紫武さまの魔法やわたしの魔法は、オリアレムさまには有効ではないのです」

「え、そうなの？」

「ええ。国主であらせられますゆえ、有効なものが少ないのですよ」

国王陛下、という地位が、魔法を無効化させるのだと、都記は言う。

「そつえば昔、本で読んだ気が……久遠の王と古き魔法師の誓約、だったかな」

「はい。かつて、久遠の王は古き魔法師と、絶対不可侵の誓約をなさいました。久遠の王は古き魔法師の領分には手を出さず、古き魔法師は久遠の王の領分には手を出さないと。それが絶対不可侵の誓約であり、今も生きている誓約です」

「魔法師は国主の命令には従うけど、従わないこともある。逆に国主は、魔法師に命令することはできても、それに従わない場合はそれを諾としなければならぬ。だよな？」

「簡単に言えば、国主と魔法師はほぼ同格の存在です。国主と魔法

師の間に身分などありません」

改めてそれらを確認すると、魔法師は最強だなあと思わなくもない。

「ですから、国主であるがゆえに、魔法師の力は無効化されてしまうことが多いのです」

「魔法が王には効かないってことか」

「場合にもよりますがね。国主は魔法師を殺すことができません。魔法師も国主を殺すことができません。そういう絶対不可侵です」

「んー……ややこしいな」

「簡単に考えてください。オリアレムさまの逃げ足は速いわけではなく、そういった誓約に護られているだけです、紫武さまは手加減しておられるのではなく、そういった誓約に縛られているだけなのです」

「……なんか、面倒な兄弟喧嘩だね」

果てがないではないか、と顔を渋めると、都記は苦笑した。

「ねえ、訊きたかったことがあるんだけど……どうして紫武はお兄さんとあんなことに？ 都記さんもそうだけど」

「それは……」

曖昧なことは言わない都記にしては珍しく、言葉を濁した。口にするのがほど阻まれることのようにだ。

「紫武さまにお訊きになられたほうがよいでしょう。わたしからは、なんとも申せません」

「訊いても流されるよ」

「そうですね」

曖昧なことは言わないが、都記も流すことはする。今もそうだ。さらりと流すとは、少々腹立たしくもある。

しかし、この男は紫武が世界の中心だ。紫武を中心にものを考えるから、紫武のことを訊くために相手にするのは厄介である。

「ねえ、都記さん」

「はい」

「紫武って、王弟殿下？」

「そうですね」

「魔法師？」

「ええ」

「王弟殿下で、魔法師なのに、なんでここにいるの？ 王城にいるものじゃないの？」

「紫武さまは王城がお嫌いですので」

「なんで」

「腹の腐れたジジイどもの巣窟だから、とおっしゃいましたね」

あながち嘘でもなさそうな返答に、やはり都記は難攻不落の鉄壁だと思つた。

「偉い人に囲まれるのも疲れるだろうし、紫武のあの正確じゃあ王城になんかいられないか」

「小日向さまがここにおられることもございません」

「それもそうだ。紫武が王城にいなかったから、わたしは捨つてもらえたわけだしね」

くす、と笑つと、都記もふつつの笑みを浮かべた。

「ほかになにか訊きたいことはございますか？」

「今のところはないかな……仕方ないから、紫武に地道に訊くことにする」

「それが一番です。では、わたしは失礼しますね」

「面倒なこと訊いてごめんなさい」

「いえ、かまいませんよ」

そう言って部屋を出て行こうとした都記に、小日向は「あ」と思いついて呼び止める。

「紫武はどこに行ったの？」

小日向のその問いに、なぜか都記はにっこりと今までになく優しく微笑んだ。いや、不気味なほど綺麗な笑みを浮かべた。

「下準備に出かけられたかと」

「下準備？」

まさか兄を殺すためにか、と思ったが、どうやら違う。

「すぐにわかりますよ」

それだけ言って部屋を出て行った都記の言葉が理解できたのは、それほど時間をかけずして紫武が帰ってきたときのことだ。

「遊びにいくよ！」

帰ってくるなり紫武は大声でそう言って、小日向の部屋に入ってきた。

「……なに言ってるの、紫武？」
「遊びに行くんだよ、こひな」

ほら行くよ、とどやされても、いきなりすることに頭が働かない。

「都記、こひなを連れて来て。荷造りは適当でいいから」

「わかりました」

「僕は最後の微調整をしてくるよ。間違えると変なところに飛ばされちゃうし」

「はい」

という紫武の言葉と都記の行動に呆気に取られているうちに、気づけば玄関の前まで移動していた。

「え、ちょ、なに？ どういうこと？」

足許には小日向と都記の荷物、目の前は玄関の扉、扉になにか書いている紫武、その足許にはやはり荷物。

遊びに行くと言っていたが、これは旅行の間違いではないだろうか。

「紫武、どこに行く気？」

扉になにか書いていたが、それを終えたらしい紫武は笑顔で振り向く。

「サリエのとり」

誰だそれは、と思いつつも、首を傾げているうちに扉が仄かに光

り始める。紫武が書いていたものは、どうやら魔法陣のようで、それが光り出していたのだ。

「さあ行くう！ サリエがいるところに！」

ぐん、と腕を強く引っばられる。

「わたし、行くなって言っていないんだけど！」

「今言った」

「それすごい理不尽だね！ ていうかサリエって誰！」

「ほら行くよー」

「ちよっ……っ」

それは一瞬のできごとだ。紫武が玄関の扉を無造作に開けたとき、その魔法は発動する。空間転移の、難しい魔法だと思いつたのはそのときだった。

「久しぶりー、サアリエ」

と、紫武がその空間に足を踏み入れたとき、小日向はそこに神々しい姿の青年を見た。

07 : 海の向こう大陸。 1 (前書き)

* 『 』内の言葉はヴァリアス帝国の公用語です。
それ以外は小日向や紫武の常用語です。

「は……、しの？」
「久しぶりだねえ、サリエ」

おそらく満面笑顔であるう紫武と、それを受けて微妙に顔を引き
攣らせた神々しい青年。

小日向は目を擦り、神々しく見えた青年が、単に白い衣装をまと
っていることによる視覚効果であることと、銀色に見えなくもない
淡い金髪が眩しかったただだと知った。しかし、それでも随分と整
った容姿をしている人でもある。

「……あんた、ここがどこかわかっているのか？」

「サリエの居室」

「国境を越えた挙句に人の家の部屋まで来ておいて、それが」

「車で旅なんて面倒」

「……帰れ」

「うわひどい。遊びに来たのに」

「いいから、帰れ。今すぐ帰れ」

来たばかりだというのに、青年は紫武に渋い顔をし、座っていた
椅子から立つと「帰れ」と繰り返す。確かになんの連絡もせず来た
紫武の行為は失礼に値するので、言われても仕方ないことではある。

「そんなに拒絶しなくたっていいじゃないの」

「違う。あなたはディアルの人間だ。もしツアインに見つかったら……」

と、そのときだ。

小日向たちから見て真横の扉がこんこんと叩かれて、渋い顔をしていた青年がビクツと肩を震わせる。

室内の応答など無視して開かれた扉から、誰かがひょっこり顔を出した。

『サリヴァンさま、お茶の用意が……』

顔を出したのは、小柄な少年だった。さらりと流れる淡い金髪と、薄紫の双眸が印象的な、可愛らしい少年である。

しかし、小日向はその愛らしさに見惚れつつも、少年の発した言語の理解には時間を要した。

「リアス語の公用語？」

小日向が住まう国、ディアル・アナグラム国で遣われている言語ではなく、海を隔てた向こう側にある大陸の公用語だ。

『ツエイか……だいじょうぶだ、彼らは敵じゃない。不法侵入者ではあるが』

ほっとした様子の青年が、小日向たちを見て驚いて警戒した少年に、笑みを浮かべながら大陸の公用語で話しかける。

そういえば青年は、紫武が国境を越えたとかなんとか、言っていたような気がする。

「紫武、こころい」

「ん？ どこって、サリエの家」

「そうじゃなくて、ここディアル国内じゃないの？」

「違うよ。ヴァリアス帝国」

そんなあっさり言わないで欲しい。

「ヴァリアスって……向こう大陸の聖国？」

「あ、よく聖国だってわかったね」

「それくらい勉強してるよっ」

国境を越え、海の間にある大陸まで来ることの、どこが遊びに行く程度のものなのか。

やはり紫武の感覚はおかしいと、小日向は頂垂れた。

ちなみに、ディアル・アナクラム国は、島国である。世界三大国の一つであるヴァリアス帝国とは雲泥の差がある小国で、海を間に置いてはいるが属国でもある。

だから大陸の、ヴァリアス帝国の公用語を小日向は理解できるが、言語の習得は不得意ゆえに、流暢には喋れなかった。

「しの、帰ったほうが身のためではあるが、少しならいいぞ」

少年を宥め終えたらしい青年が、ため息をつきつつも紫武に向き直った。

「しばらく逗留したいんだけど。小日向に勉強させたいし」「勉強？」

ふと青年が、小日向を見る。

随分と透明感の強い碧色の双眸が、祖国では珍しいゆえに、少し

驚いてしまった。いや、青年の髪色も、少年の瞳や髪色も、祖国にはない色なので、珍しさに魅入ってしまう。

「綺堂小日向。僕の小日向だよ。都記はわかるよね」

「ルイはわかるが……その子、あんたの？」

「そう。可愛いでしょ」

言いながら紫武は小日向の隣に並び、その両肩を掴んで前に押し出す。

「え、ちょ、紫武っ」

「ほら、ご挨拶」

「えっ」

「ずい、と青年の前に押し出されてしまう。小首を傾げた青年は、しかし次にはにこりと微笑んでくれた。

「サリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラだ。サリヴァンと呼ばれている」

「そう呼んでくれ、と握手を求められては、小日向も拒否できない。

「き、綺堂小日向、です。あの、ノフィアラと」

祖国では発音できないらしい「小日向」という名なので、「ノフィアラ」というのも名乗ってみたが、青年はただにっこりと笑みを深めただけだった。

「交わした握手が離れると、サリヴァンと名乗った青年は、隣に呼んだ少年に公用語でなにか囁く。小日向よりも華奢な少年は、それ

を聞くとすぐ、その薄紫色の双眸を小日向にまっすぐと向けてきた。

「ツェイル」

と、言つて、手を差し伸べられる。

え、と思つたが、とりあえず握手を交わすと、少年は紫武にも都記にも同様の仕草をした。

「すまない、喋れないんだ。これで許してくれ」

と、サリヴァンは言つ。つまり少年、おそらく名はツェイルといふのだからその子は、ディアル語がわからないのだ。

「そんなに難しくない言語だけれどなあ。公用語がちょっと訛つたような言葉だし……あ、僕は紫武だよ。綺堂紫武。またはリアルト・ルー・ティエナ。紫武でもリアルトでも、サリエみたいにしても、好きなように呼んで」

「わたしは兩宮都記と申します。都記、と。或いはルイでもかまいません」

紫武はリアルト、都記はルイと、祖国では変換されているらしい。小日向はこんなところでそれを知つた。

「しの、とき？」

「あ、そっち喋れるんだ？　じゃあ、小日向、は？」

ツェイルの視線が、またもじつと、小日向を捉える。紫武や都記、サリヴァンのように表情があればいいのだが、ツェイルはずっと無表情なので、小日向はちょっとだけ気持ちが詰まってしまう。

しかし、愛らしい姿には心惹かれる。

「こひな？」

気持ちがますます詰まった。

「う……可愛い」

呼ばれたのは自分の名なのに、それすらも可愛いかもしれないと思えるほど、ツェイルは可愛らしかった。

「留学が希望なら兄上に学館を紹介してもらおうが……それでいいのか？」

「ああいや、留学じゃなくて」

「うん？」

「ここにいるいろ勉強させてくれないかな」

「ここで……？」

ハッと、われに戻る。

ツェイルに気を取られて聞き逃していたが、そういえば紫武が勝手なことを言っていたのをふたりの会話で思い出し、慌てて小日向は身体を反転させた。

「勉強ってどういうこと？」

「そのままの意味だけ？」

「いや、説明になってないからね？」

「んー……どこから話そうかなあ」

そんなに長い説明を求めているわけではないのだが。

「そこからもう勉強が始まってないか？」

と、サリヴァンが突っ込みをくれた。紫武はポンと両手を叩く。

「そうだね。じゃあサリエ、誰か教師つけてくれない？」

「ルイがそうだろう」

「都記もつけるけど、そっちでも」

「その前に、おれは承諾してないぞ」

「こひな、遊びながら勉強しようねっ」

「人の話を聞け、こら」

どこでも紫武の態度は変わらないのか、と思う瞬間だった。

この人、本当に王弟殿下で、魔法師なのだろうか。

けっきょく紫武は、サリヴァンがなにを言おうが聞く耳を持たず、勝手に滞在を決めてしまったのだった。

08 : 海の向こう大陸。2 (前書き)

紫武視点です。

つたない言葉で話されるといふのは、なんだか随分と、可愛いものだ。昔を思い出して、懐かしさが込み上げる。

「ま、ほう、し?。」

「そう、魔法師。わたしはね、魔法薬師、なの。」

「まほ、やあく、しゅ?。」

「魔法薬師」

「まほう、やくし?。」

「そうそう」

「ろおろお?。」

ディアルがまったく話せないというツェイルに、小日向がゆっくりと、状況や環境に少し戸惑いながら、言葉を教えている。

まるで昔の自分と小日向のようだ、と思いつつながら、紫武はにこにここと微笑んで眺めた。

「随分と変わったな、しの」

そうやってきたのは、向かいの椅子に座ったサリヴァンだった。

「急な発言だね。なんのこと?。」

「あんたのそんな顔は初めて見る」

「僕はいつも笑っているじゃない」

にこ、といつものように笑って見せると、サリヴァンは笑いもつかない顔をした。

「あんたはツアインとも違う。ラクとも違う。あんたのそれは……絶望を知っている笑みだ」

唐突な言葉だった。まるで逢わずにいた数年を吹き飛ばす、強い風のようにだった。

だから紫武は、唇を歪めて笑う。

「そうか……僕がこの国で問題を起こしたのは、こひなを捨つ前のことだものね」

「捨つたのか、あの子」

「そうだよ。六年くらい前、だね……生きていながら死んでいるよ
うなあの子を、捨つたんだ」

「……よく殺さなかったな」

それは褒めているのか貶されているのか、どちらにせよサリヴァンにそう思わせる振る舞いをしていたのは事実だ。

「僕と同じだったから、なら僕が育てたらどうなるのかなと思って
「あんたには似ていない」

「うん。似せたくなかったのだろうね。このところのあの子を見て
いると、僕自身もそう思うよ」「どうする気だ？」

「どうもこうも……僕があの子を連れきた時点で、わかることだろ
う」

「あんたな……」

げんなりとしたサリヴァンに、紫武はいつもの笑みを浮かべる。そうするとサリヴァンに手でそれを払われてしまったので、肩を竦めてから座っていた椅子を離れた。露台の窓に向かうと、サリヴァンがその意を汲んで追いかけて来てくれる。

「匿ってくれないかな、サリエ」

「いやだと言つても、聞かないだろう」

「そうだね。また拒絶されたら……僕はきみの大切な人を、人質に取るよ」

「妻と息子に手を出せば、いくらあんでも、生かしはしないぞ」

「おや……いつのまに妻子が？」

「あんたがヴァリアスで問題を起こしたとき、妻は巻き込まれた。あんたのせいで命すら狙われた。あのとき妻は、胎に息子を宿していたんだ」

紫武がこれまでで最も大きく問題を起こしたのは、この国、ヴァリアス帝国を巻き込んだの国家間のものだ。とはいえ、それは表沙汰にされることはなかった。今隣りにいる友、サリヴァンの尽力があつてのことだ。

「僕がここに来たのは拙かったかな」

「まあ……ツアインがいないことに感謝するんだな。あれは、あんたを殺そうとするぞ」

「ものすごい恨みを買ったみたいだね、僕は……で、それは誰？」

「ツエイの……妻の兄だ」

「……その、ツエイって、まさかあの子？」

ああ、と頷かれて、思わずちらりと振り返ってしまう。

まるで少年のようなツエイルが女の子であることには気づいていた紫武であるが、おそらく小日向は少年だろうと思っっているあの小

さく華奢な子が、サリヴァンの妻であり一児の母であることは、本人から教えられたことでも信じ難いことだ。

「どうしてあるとき、教えてくれなかったのかな」

「あるとき？」

「僕がこの国で問題を起こしたとき」

視線をサリヴァンに戻すと、サリヴァンは困ったように眉間に皺を寄せていた。

「……余裕がなかった」

「冷静な判断をしていたじゃない、きみは」

「正直あんたがどうなるかと知ったことではないと、そう思っていたということだ」

「あら、それはひどいね」

「あの頃はツイエを護るために必死だったんだ。今でこそ落ち着いてきてはいるが……それでも、今度は息子だ。次から次へと問題は湧き起こる……忌々しい」

吐き捨てるサリヴァンに、そういえば彼のそばに必ず控える侍従がいないのは抱えている問題ゆえのことだろうかと、紫武も腕を組んで首を傾げる。

「きみの息子に、僕は逢ってもいいかな」

「かまわないが、今ヴァリアスにいない。シエリアン公国に避難させている」

「……もしかして僕、とんでもない時期にお邪魔しちゃった？」

「もしかしなくても、そうだ。だから帰れと言ったんだ。シエリアンに避難させているとはいえ、そう長く預かってもらうわけにもいかない。名目上は遊学だからな」

同行させているツアインという、紫武に並々ならぬ憎悪を抱いた兄が帰ってくるのも、そのときだとサリヴァンは言う。

しばし考えて、紫武はにこりと笑うと頷いた。

「うん、わかった」

「……そうか」

「きみを手伝おう」

「なら帰……、なに？」

「きみには恩がある」

どうしてもサリヴァンが協力してくれないなら、脅してまでも協力を得ようと思っていた紫武だが、考えが変わった。もともとサリヴァンには恩があるのだ。返せるだけのものは差し出せない恩だ。だから、この際だから上乘せしてどこまでも迷惑をかけてやろうと諦めていたが、サリヴァンが抱えているものに干渉することですれらをしなくていいのなら、そうしたほうがいいに決まっている。

「僕はね、ヴァリアスで問題を起こして、帰ったその足で、あの子を拾ったんだ。そうして今日、あの子をきみのところに連れてくることができた……きみが言ったように、僕は随分と変わったようだよ」

もらった恩は返せるものではないと、思っていた。それだけの大きな恩なのだ。見合うものなど紫武にはない。けれども、利用できるもの多くある。それらをサリヴァンが必要としてくれるなら、恩に報いられるかはわからないが、差し出せるものだ。

まっすぐとサリヴァンを見つめると、サリヴァンも同じように見

返してくる。

「あんたを利用する気はない」

「僕がそうしたいと言っている。きみは甘んじるだけでいい」

「無理だ」

できない、と目を細めたサリヴァンは、その強い意思を紫武に伝えてくる。

ああ、相変わらず彼はお人好しなのだなぁと、紫武は笑った。

「サリエ、僕はもう、得難いものを手に入れた。それを護り続けたと思う。きみが昔、僕にそれを見せてくれたようにね」

「ヴァリアスの、それもおれ個人の問題に、あんたは関係ない」

「あるよ。昔、救われた者のひとりだ」

「そんな憶えはない」

「こうしてきみが、僕と対等に話してくれることが、救いだっただよ」

わからないだろうな、と思ったことは、案の定サリヴァンは理解しておらず、怪訝そうに首を傾げる。べつにわかってもらおうとは思わないので、小さく笑って肩を竦めた。

「僕を頼りなよ、サリエ。古き魔法師の記憶を持つ、この僕を」

「その記憶のせいで、あんたは苦勞しただろう」

「昔は、ね。だからヴァリアスで問題を起こしたわけだけれど……」

今の僕は、きみと同じ想いを胸に持つ、ただの男だよ」

視線を再び小日向に向けると、ツェイルを相手に苦戦を強いられている小日向の可愛らしい姿がある。いつまでも眺めていたい光景、得難いこの至福を与えてくれる光景、出逢う前までは想像もで

きなかつたそれらに、紫武は目を細めた。

「僕はあの子に、心の臓をあげた。あの子と命を繋げた」

「……しの、あんた」

「あの子が生きていられる世界に、僕も生きたい。そのためにはサリエ、きみという友が必要なんだよ。僕は、ふつうの人間では、ないからね」

言ってしまうばサリエヴァンもふつうの人間ではないから、かわるよね。そう口にはしなくても、サリエヴァンは空気を読んでくれる。

「どうしておれの周りにはこういう奴しかいないんだ……」

という、諦めの境地に至ったようなサリエヴァンのため息には、仕方ないよ、と言っしかなかった。

「僕は異形だから」

きみの優しさがあつたから、こういう優しい気持ちを得ることができた。この優しい気持ちで、出逢えたものがあつた。

「あんたは異形じゃない」

「……優しいね、サリエ」

昔と変わらない。このお人好しな友は、いつだってどんなときだって、すべてを受け入れてしまえる寛容な心を持っている。裏を返せば、紫武よりも遥かに超えた諦めを持っている。

「おれのどこか優しいのだから……それで、匿えとはどういう意味だ」

ほら、優しい。

ほくそ笑み、紫武は閉ざされていた露台の窓を開けると、庭先にサリヴァンを促した。

09 : 海の向こう大陸。3 (前書き)

*「」はディアル語、「」は大陸の公用語です。

なにをどうしたらいいのだ、とすべてのことに戸惑い混乱しながら、小日向はツェイルと向かい合わせに座っている。それも椅子ではなく床に、ディアル語の絵本を間に広げて、それを覗き込みながら座っている。

なんでわたしは言葉を教えているのだらうと、疑問も甚だしい。しかし頼むと言われては断れない小日向だ。

「星、だよ」

「ろす？」

「ほ、し」

「ほ、しゅ？」

「おいしい。星」

「ほし」

「そう。これは月。つき」

「る、り」

「つき」

「るき」

「んー……つき、だよ」

「つき」

「そうそう。耳はいいね、ツェイル」

ディアル語をまったく理解できない、というわけでもないらしいツェイルは、絵本の中のを指差して発音してみせれば、数回で

発音ができるようになった。次々吸収してもらえると、教えるのも案外楽しいかもしれない。

紫武や都記も、自分に言葉を教えてくれたときはこんな感じだったのだらうか。

ふと顔を上げて紫武の姿を捜せば、露台を前にした窓のところに、サリヴァンと並んでなにか話をしていた。都記はそんなふたりを見守るように控えている。

「友だち、なのかな……」

「とおあし、まあおり？」

おっと、ツイイルに口真似されてしまった。

「友だち」

「とおかし？」

「ともだち」

「とお、た、ち」

「と、も、だ、ち」

「とも、だ、ち？」

そうだ、と頷いて、どこかそんな雰囲気の話はないかと絵本をめくる。手をつないだふたりの少女が星を眺めている絵があったので、指でそれをなぞって、窓辺にいるふたりに視線を移す。

「サリヴァンさま、しの？」

「うん。友だち？」

訊ねると、ツイイルはどうだろうとばかりに首を傾げた。どうやらツイイルにも与り知らぬことらしい。

いや、もしかしたら意味が通じていなくて、わからないという意

味かもしれないが。

『なあってディアル語なんか使ってるんですう?』

といういきなりの声に、小日向は吃驚して振り向いた。

誰だ、と思うまもなくツェイルが立ち上がって、その声のほうへと駆けて行く。

『ラク』

『はい。ただいま帰りましたよー』

ツェイルに飛びつかれん勢いで出迎えを受けた声の人は、淡い金髪に碧い瞳という、これもまた小日向には馴染みのない色を持った男で、紫武ほどに背が高い。

『オリヴァは? オリヴァはだいじょうぶか?』

『おれの天恵は確実です。だいじょうぶですよ、姫』

『本当に?』

『はい。無事に送り届けましたよ』

『そ……そうか』

『ところで姫、なんでディアル語を? そもそも、そちらのお嬢さまはどちらさまです?』

随分と人好きしそうな顔をした彼は、公用語を聞き取るうとしていた小日向を見て、きよとんとする。慌てて姿勢を正したのは、彼から伝わってくる仄かな警戒心が促したものだ。

『あ、あの……わたし』

「ディアル語でかまいませんよ。教養の一つで憶えていますから」

男の口から流暢に流れ出たディアル語に、ホッと息をつく。とりあえず言葉が通じるなら、不審人物扱いされずに済むだろう。

『ラク、こひなだ。しのが連れてきた』

『はい？』

『サリヴァンさまの知り合い』

ツェイルが公用語で、身の証を立ててくれる。しかし彼は、小難しい顔をした。小日向を飛び越えた窓辺にその姿を見つけると、ますます怪訝そうに眉をひそめた。

『大公が……なんで今時期ここに』

呟いた彼の視線が、再び小日向に戻ってくる。

「大公の奥方さまですか？」

「いえ違います」

いきなりだったが全力で否定できた。自分でも吃驚な反応速度だ。

「そうですか。お名前を伺ってもよろしいですか？ おれはラクウイル・ダンガードと申します。あそこのサリヴァンと、この姫の侍従をしております」

「ご丁寧にどうも……あの、わたしは綺堂小日向と申します。あ、ノフィアラ・ルー・ティエナともいうらしいです」

ラクウイル、というらしい彼が深々と頭を下げ、名乗ってくれたので、つい小日向も反射的に深く頭を下げ、名乗る。

顔を上げると、不思議そうな顔をしたラクウイルに見つめられていた。

「本当に大公の奥方さまではないんですか？」
「大公って、紫武のことですよ？ それなら違います。わたし、拾われた養い子でして……それに独身です」

紫武を大公と呼ぶということは、ラクウィルは紫武がディアル国の王弟であると知っているということだ。そうになると、サリヴァンの侍従だとラクウィルは言っていたから、サリヴァンも紫武がそうであることを知っているのだろう。

ふむ、国と国で繋がった知り合いか。

そこまで考えて、ふと、疑問が浮かんだ。

「姫？」

サリヴァンとこの姫の侍従、とラクウィルは言っていた気がするのだが、どこに姫がいるのだろう。

「ああ、すみません。姫というのは渾名みたいなもので、ツェイルさまのことです」

「……ツェイル、さま？」

なぜ敬っているのだ、と思ったところで、そういえばサリヴァンの態度はツェイルをとて大切に扱っていたな、と思いつく。

「姫はサリヴァンの奥方さまですからね」

「……、え？」

「え、って……ええ？ ああ、もしかして姫のこと、男の子だと思っていました？」

考えること数秒、である。

「女の子なのっ?」

男の子だと思っていた。いや、男の子にしては華奢で可愛過ぎると思っていたが、衣装が男の子だ。髪もそれほど長くなく、結えるのが難しそうである。

小日向に驚かれたツェイルは、小首を傾げて「どうした?」と言わんばかりだ。

「う……可愛い」

「ええ、姫は可愛いですよ。これで一児の母とは思えないでしょう」
「……、母っ?」

いやちよつと待て、頭が混乱してきた。ツェイルは少年ではなく少女で、しかも母だというのだ。失礼なことだが見た目少年なツェイルが、である。

外見詐欺は紫武と都記だけにしてくれ、と切に願いたい。

「あのお歳は……?」

「姫のですか? いくつでしたかねえ……オリヴァンが今年で五つになるので……二十一歳かな?」

思わずがつくりと頂垂れた。歳下だろうと思っていたのに、四つも歳上だった。

「詐欺だ……」

紫武と都記のような人間がまだいるとは思わなかった。悲しい現

実に涙が出そうである。

「まあ、姫の場合は成長が止まっているだけなので、詐欺かどうかは不明ですが」

「……成長が、止まっている？」
「ええ」

まさか、と否定したい。成長が止まることなど、人間としてあり得ない。神話やおとぎ話、小説ではあり得る話だが、現実にはないはずだ。

「まあそのことはあまり気にしないでください。おれの記憶では、大公も年老いては見えませんが、側近の彼も、いくらか老けたようには見えますが、六年前とほとんど変わっていませんからね。世にままあることなのでしょう」

「……六年前？」
「それに、外見だけでは誰しも年齢は推し量れません。それが魔法師ならなおさらです」

ハツとした。

ラクウィルは紫武が魔法師であることまで知っている。六年前、という数にも引っかけかかりを感じたが、それが関係しているのだろうか。

紫武は自分が魔法師であることを明言しない。小日向にそうだったように、知られてしまえば遣って見せるが、それでもその陣を小日向に見せたことはないし、姿も見せてくれない。

「大公の『小さな太陽』さん、残念ながらおれは大公を歓迎できません。大公が王弟殿下で魔法師だから、ではありませんよ。おれは

大公が起こした事件を、未だ忌々しく思いますから」「え………?」

一瞬、なにを言われているのかわからなかった。

「ああ、あなたは別ですよ。歓迎します。ようこそ、ヴァルハラ公爵家へ」

やはり人好きしそうな微笑みをラクウィルに向けられながらも、小日向はそれに答えられず、茫然とした。

09 : 海の向こう大陸。 3 (後書き)

*小日向は公用語を理解できますが、脳内変換に少し時間がかかります。
ます。

ツェイルはディアル語をほとんど理解できません。

これ以上の混乱は要らない、と思考回路を停止させた小日向は、露台から庭へ出た紫武とサリヴァン、そして都記を追うようにしてラクウイルが立ち去ったあとは、ツェイルとふたりで絵本を睨めっこした。ツェイルとの会話はもちろんなく、それが夕食だという時間が終わっても続くと、異国に来たのだという感覚に気分が滅入った。

「さすがヴァリアス、水の質がいいね」

と言いながら、紫武が沐浴を終えて戻ってくる。一足先に湯をいただいた小日向は、用意された三部屋のうちの居間の長椅子に、埋もれるようにして座っていた。

ちなみに都記は、紫武に「ここは安全だから、好きにしていよいよと言われたとたん、姿を消している。いや、この邸内にはいるらしいのだが、夕食のあとから姿を見せていない。」

「ねえ、紫武」

「なあに？」

「紫武はここでなにやったの？」

「なにっつて、なに？」

きょとんとした紫武は、沐浴後の冷たいお茶を飲みながら、小日向の向かいの長椅子に腰かける。

小日向はツェイルと絵本を見ていたときのことを思い出して、目を細める。

「……ラクウイルさんって人が、紫武を歓迎しないって言った」

どういう意味だったのだろう。いや、そのままの意味だろうが、どうして紫武はそんなことを言われなければならないのだろう。

見た目や行動仕草は別としても、紫武は王弟だ。大公と呼ばれている貴族だ。変わった貴族ではあるが、王族でもある。ふつうなら逢うことすらできない天上の人であることくらい、小日向にもわかることだ。

それを、歓迎しない、とはっきり言えることの事態が、理解できなかった。

「あー……うん、ラクウイルはそう言うだろうね」

「え？　なんで？」

「それだけのことを、僕はやったからね」

にこ、と紫武は笑う。いったいなにをやったのだと、気になる笑みだ。

「ラクウイルさんに嫌われてるの？」

「そうだね。ああまであからさまなのは珍しいことらしいから、もしかしたら恨まれてもいるかもしれないな」

「恨みまで？」

穏やかではない言葉に、小日向は顔を引き攣らせる。紫武は飄々としているが、だからこそ、持っている過去を恐ろしく感じた。

「なに、やったの」

「兄上を殺し損ねてここを家出先にしたただだよ」

さらりと明かされた。

思わず、「え？」と訊き返してしまう。

「兄上を殺し損ねて、腹が立ったから国を出奔したの。それでヴァリアスに来て、ちよつと長く逗留させてもらったのだけれど、出奔した理由は言っただけだから、面倒を起こしたんだよ」

「……ちよつと、待って？」

「なに？」

「兄弟喧嘩の延長線上で、この国に迷惑かけたわけ？」

つまりはそういうことか、と問えば、紫武は考える素ぶりを見せた。

「そつだね」

あつさり返ってきた言葉に、思わず魔法を発動させかけた。植物の成長を促す魔法であるから、木材を利用して作られている長椅子の脚から枝を生やすことくらいはできる魔法だ。

首を絞めてやる。

「物騒なことはしないの、こひな」

と、手刀で魔法はぶった切られた。こんなことをできるのも紫武が魔法師だからで、それもかなり強い魔法師だからであろうが、それでも腹は立つ。

「異国を巻き込んでまでぶつう喧嘩するっ？」

「それ、ちよつと訂正。喧嘩じゃなくて、殺し合いね」

「どつちでも同じだよ!」

どれだけ大きな喧嘩をすれば、紫武は満足するのか。いや、満足するとしたら、それはあの能天気王を殺したときだろうか。

「わたし、ここにいられない……帰る」

「それは無理だと思っよ?」

「なんで。帰りたい」

「兄上が殺しにくるから、やめておいたほうがいいよ。ここは安全だから、その心配はないけれどね」

瞬間的に耳を疑う。

「お兄さんが、なに?」

「殺しにくるよ」

「……誰を?」

「僕と、こひな」

絶句する。

一方的な兄弟喧嘩ではなかったのか、と云うことさえできない。

「兄上はね、ちょーっと、頭がおかしいんだよ」

それはあなたもだよ、と思うが、言えない。

「こひなはなにか勘違いしているみたいだけれど……僕が兄上を殺したいと思うのは、兄上が僕を殺そうとするからだよ?」

けっきょくは兄弟喧嘩だろう。しかし、命がけの喧嘩だ。

「六年くらい前はまだ兄上も王太子だったから、もう必死でね。王と魔法師、なんて立場になったら僕を殺せなくなるから」

「……紫武」

「なあに？」

「なんで殺し合いなんて、する必要があるの？」

兄弟で喧嘩なら、当たり前のことだろうからとくに思うこともない。派手な喧嘩だなあとは思うが、それだけだ。

しかしなぜ殺し合いになるのだ、と小日向には疑問だ。

「兄弟っていうのはね、美しいものではないんだよ、こひな」

「美しいとか、そういうことじゃなくて……だって、兄弟だよ？」

それに、と小日向は拉致されたときのオリアレムの姿を思い出す。紫武と同じ顔なのに、持っている色は違っていて、けれどもその表情は紫武よりも豊かで、そしてなにより紫武を愛する兄そのものだった。能天気な王で、弟に全力で殺されそうになっているのに飄々としていて、狂気などどこにもなかった。

オリアレムが紫武を殺そうとする理由がわからない。

「兄弟でも殺し合いはするよ。このヴァリアスだって、先帝が実弟を殺しているらしいからね」

それでも、と思う。

「お兄さんは、紫武を殺そうとなんて……」

「今のところは、ね。この六年、僕は兄上の命令に逆らっていないから、それで気をよくしていたしね」

さつきも、六年、と言っていたが、気になる数だ。

「六年前、なにがあつたの？」

「だから、国を出奔したんだよ」

「なんで」

「兄上の暗殺に失敗して」

「そうじゃなくて、どうしてそうなったの？」

問うと、紫武は不気味に微笑んだ。背にいやな汗が流れる、うすら寒い笑みだ。

「兄上を殺すのに、どうしたもこうしたもないよ」

「え……」

「明日にはもう戴冠式だというときに、毘にはめられた僕も僕だけれどね。だから殺り返してやろうとしたら、その瞬間に僕は魔法師の誓約に縛られた。おかげで死にかけたよ。サリエが助けてくれなかったら、たぶん僕は死んでいただろうね」

その告白に、小日向は息を呑む。

「死に、かけた……の？」

「そう。だから国を出奔した。それしか方法がなかったから」

では、今ここに紫武がいるのは、こうして小日向が生きていられるのは、死にかけていた紫武をサリヴァンが救ってくれたからだ。

なんて壮大な兄弟喧嘩だろう。

その末がこれなら、紫武とオリアレムが兄弟として今も生きているこの現実には奇跡ではなかるうか。

「どうしてそこまで……なんで、殺し合いなんか」

「兄上が僕を殺そうとする。だから僕は兄上を殺したい。ほかに理由なんてないよ」

「おかしいと思わないの？　なんでお兄さんは紫武を殺そうとするの」

「僕が魔法師だから」

「王は誓約に護られるじゃないか。魔法師だって、誓約に護られるでしょ」

「こひな、違うよ。誓約に護られるんじゃない。誓約に、縛られるの」

「どっちにしたって、命を奪い合う必要はないでしょ？　無意味だって、考えなくたってわかるじゃないの」

王族の事情など、小日向にはわからない。わがごとく思っても、あまりにも遠い存在で考えることすらできない。きつといるいろいろな事情があるのだろうと、そう思いはしても、想像を遥かに超えたものに考えは及ばないものだ。

けれども、それでもわかることはある。

誓約に護られるふたりが、命を奪い合おうとするのは、無意味だということだ。喧嘩ならまだいい。周りに迷惑をかけても、まだ可愛いほうだろう。しかし、殺し合いは違う。周りへの迷惑は、多大な害になる。要らぬ血が流れるということ、罪もない命が潰えるということだ。

古き魔法師と久遠の王が交わした誓約は、無駄な争いを避けるためのものなのに。

「無意味だから、殺し合うんだよ」

「……意味わかんないよ」

まさか本気の殺し合いを、なんの意味もなくしているわけではな
いだろう。言いたくないのか、それとも隠しておきたいことなのか、
小日向には紫武の考えていることなど到底知り得ないが、酷薄な笑
みはなんとも言えない恐ろしさを感じる。

「とにかく、兄上をどうにかするまで、こひなはここにいなければ
ならないからね。ディアルに戻ろうなんて、今は考えないほうがいい。
まあ、戻る手段があればの話だけどね」

帰りたい。そう思ったのは、紫武のこの性格のせいだ。途中にな
ってしまっている研究も気にはなるが、それよりも紫武が周りに及
ぼす迷惑のほうが心配なのだ。

「……いつになったら帰られるの」
「そうだねえ……サリエを手伝ってから片づけるから、少し時間がか
かるね」

「お兄さんを殺すの？」

問うた小日向に、紫武は笑みを深める。誓約がある限り殺せない
くせに、という小日向の腹を、まるで見透かしているかのようだった。

朝、柔らかい寝台から起きて、見渡した景色がいつもと違うことに気づいたとき、小日向は思いつきりため息をついてしまった。

帰りたい。けれども帰れない。紫武に帰る気がないから、巻き込まれて小日向はここヴァリアス帝国に留まらなくてはならない。

いっそひとり帰ろうかとも考えたが、小日向は空間移動などという高度な魔法は使えないし、ろくに家から出たこともなければ街からも出たことがなかったので、大陸から大陸に移動する手段がまず思い浮かばない。海路であることはわかるのだが、なんの船に乗れば帰国できるのかわからないのだ。たとえ船がわかって帰国できたとしても、邸は王都の外れにあり、港から王都までの陸路すらわからないときている。

「だ、だめだ、わたし……ひとり旅もできないなんて」

今さらだが、落ち込む。研究以外にもっと勉強することがあったではないかと気づいたところで、あとの祭りだ。自分ひとりではなにもできないのだ、とさらに気づいてしまえば、その落ち込みも半端ない。

なんてことだと己れの情けなさにふらつきながら寝台を離れ、適当に着替えて寝室を出ると、居間であるそこには食事が用意されていた。

「おはようございます、こひなさま」
「都記さん……おはようございます」

用意、というか配膳をしてくれていたのは都記だ。朗らかな笑みに、見知らぬ土地へきて落ち込んだ小日向の心は、少しだけ安堵する。

「洗面所はこちらです。ひどい顔ですよ」

「う……ちゃんと眠ったつもりなだけだなあ」

「緊張されましたか？」

「するよ、もちろん。わたし、街から出たことなかったのに、いきなり国外に出たんだよ？」

「それもそうでしたね」

うつかりしていました、ととぼけた都記に、げんなりと肩が落ちる。

案内してもらった洗面所で顔を洗ってからすっきりさせると、用意してもらった朝食をいただいた。昨夜の夕食もそうだが、小日向の食事情を考慮してくれているようで、見た目は少し違っていても食べ易い。もともと食文化は似ているのだ、と都記に教えてもらった。

「ディアルはヴァリアスから派生した国、のようなものですからね。言語も、習得にはそれほど難しくありませんでしょう？」

「まあ、確かに……覚え易くはあったかな」

「街並みも特出して変わったところはありませんから、このあとはお出かけになられたらどうですか？」

「うーん……紫武は？」

出かける、となると、どうしても紫武が気になる小日向である。

昔からそうなので、これはもう癖だ。

「紫武さまでしたら、今朝早くからサリエ殿下と出かけられました」

そうか、サリエと出かけたのか。

と、理解しかけて顔が引き攣る。

「殿下？」

紫武もそう呼ばれていたが、都記は紫武をそう呼ばない。

「ああ、お聞きになりませんでしたか。ヴァルハラ公爵は、ヴァリアス帝国の皇弟殿下であらせられます」

思わず、うわあ、と顔が歪む。

わたしはなんてとんでもない人の邸にお邪魔しているのだろう。

そもそも紫武も、どうしてそういう大事なことを教えてくれないのか。

紫武とサリエの繋がりは国と国だろうかとも思ったが、まさか互いの立場が同じだという繋がりがったとは予想外だ。サリエがただの貴族ではないだろうことは秀团的に理解できていたが、その正体が皇弟であれば頷ける。

「……帰りたい」

どうかわたしを平穏な研究一途な生活に戻して、と切に願う。薬草や研究道具でまみれた部屋が恋しい。

「帰れますか？」

どうしてそこでそれを訊くかな、とイラッとした。

「どうせひとりで帰れないよっ」

ああすればいい、こうすればいい、ということは考えられても、出足のものがない。ほとんど手ぶらで国境を越えた小日向には、路銀をまったく持っていないのだ。都記がまとめてくれた荷物には数日分の着替えしか入ってなかった。

「帰るには惜しいと思いますがね、わたしは」

含みのある都記の言葉に、ぴくりと眉が不機嫌に歪む。

ああ、せっかく美味しかった朝食の余韻を味わえない。朝からこんなことを考えているなんて、気分も滅入る。

「お兄さんに……殺されるから？」

問えば、都記は少しだけ驚いたような顔をした。

「紫武さまから聞きましたか」

「ヴァリアスに来た理由と、六年前のこととかいうものなら、少しね」

「そうですね……いえ、わたしが言いたかったことは、そのことではないのですがね」

都記は苦笑する。その意味もわからなくて、小日向の気分は下降の一途を辿った。

「六年前っていったら、わたしが紫武に拾われた頃なんだけど……そのちよっと前ってことだね。紫武が、お兄さんを殺し損ねたっ

ていうのは」

「ええ」

「死にかけたって、紫武は言った」

「わたしは捕まっていたので、お助けすることができませんでした。今でも悔しいですよ」

「……捕まっていた？」

そうか、と閃く。

都記は紫武の従者だ。いつから一緒にいるのかは知らないが、六年前にはすでにそばにいて、その状況下にいたのである。紫武とオリアレムの関係を訊ねた小日向に言葉を濁したのは、その状況下にあったからこそ、口にはできないなにかがあるのだろう。

「……都記さん、今なら教えてくれる？」

「なんですか？」

「どうして紫武とお兄さんは、殺し合いなんかするの？」

朝から重い話題だ。けれども気になる。無意味な殺し合いだと紫武は理解していたから、それならなぜ今も続いているのかと、気になるのも仕方ないと思っただけ。

小日向は紫武をオリアレムに殺されたくないし、紫武にオリアレムを殺して欲しくない。無意味だからこそ、そんな争いはやめて欲しい。

「紫武さまにお訊ねください。それが答えです」

このときも、都記はその言葉を濁し、紫武中心で世界を回らせた。いや、紫武を想うからこそ、なにも言えないだけかもしれない。

「紫武は、無意味だから殺し合っつて、言ったよ」

「ではそうなのでしょう」

「無意味な殺し合いなんて、本当にあると思ってるの？」

「紫武さまとオリアレムさまが、そうでしょう？」

「そういう意味じゃない。殺し合いに、意味がないわけがないって、そういうことだよ」

ただ人を殺してみたかった、というのも、一つの意味だ。殺したかったから殺した、という意味が存在する。

だが紫武は、無意味だと言いながらそこに、義務のようなものを潜ませている。殺したいのではなく、殺さなければならぬという義務、いや責任だろうか。

「……こひなさま」

ふと都記が、小さく息を吐いてから、その困ったような笑みを小日向に向けた。

「とりあえず死んでおいたほうがいい人間はいますでしょうか？」

以前にも聞いた言葉だ。オリアレムがそれに該当するのだと、紫武も言っていた。

「わたしは怨恨から、オリアレムさまに対してそう思っていますが、紫武さまは違います」

「前にも聞いた」

「わたしのそれと、紫武さまのそれは、まったく意味が異なります。わたしの怨恨に、紫武さまは関係ありません」

「都記さん個人の問題だから？」

紫武を中心に世界を回す人の言うことだ。自分の想いは紫武と関

係のないことだと言っても、特に違和感はない。個人が所有する独自の気持ちだとも言いたいのだろう。

都記から紫武のことを訊き出すのは、やはり得策ではないようだ。

「……もういい」

「こひなさま？」

「紫武も都記さんも、隠しごとばかり……わたしには、隠せるものもないのに」

小日向のすべてを知っているくせに、一方的だ。そんなのはずい。ずっと一緒にいるのに、まるで信じられていないようで悲しい。口にできないちゃんとした理由があるなら、その理由だけでも教えにくれたら、小日向はそれだけで満足できる。それすらもおしえてくれないなんて、なんて寂しいことだ。

小日向は座っていた椅子を離れると、露台のほうへ足を向けた。

窓を開けて、外の空気を中へ入れる。そのままずりりと外へ出てしまつと、後ろから「こひなさまっ」と珍しく都記が慌てた声が聞こえたが、無視して露台に出て、さらに露台からも下りて地面に足をつけた。

縁に溢れた邸内は、植物を愛する小日向の心を、少しだけ落ち着かせてくれる。不思議なのは、護られている、というのが縁から伝わってくることだ。

「こひな？」

と、名を呼ばれて振り返る。森のようになっている庭の奥から、ツェイルがこちらに向かってきていた。その腰には剣が提げられていて、可愛いのにやはり男の子にしか見えない。これで歳上だといふのは詐欺だよなと、小日向は思う。

「おはよう、ツェイル」

「おはよう」

簡単な単語なら昨日のうちに覚えてしまったツェイルの口から、するりと流暢なディアル語が紡がれて、少し驚いた。しかし、やはり単語しか覚えていないせいか、それ以上の言葉はなく、ゆっくりと小日向のところまで来る。

「こひな」

また呼ばれたと思ったら、見上げてきたツェイルの手のひらが、小日向の頬を撫でた。ツェイルのその顔に表情はないが、さらさらと撫でてくるぬくもりからは、心配が伝わってくる。どうやらひどく情けない顔になっているようだ。

小日向は俯き、逢ってまもないツェイルの優しさを噛みしめた。

12 : 大陸の力。2 (前書き)

*「」はディアル語、「」は大陸の公用語となっています。

ツェイルと歩いた。

手を繋いで、引つ張られているようなものだったけれども、その中を歩いた。

最初は静かだった道も、進むにつれて賑やかになり、今ではあちこちで公用語が飛び交っている。

ラヴァウニという街だと教えてくれたのは、ツェイルが小日向を連れて邸の外へ出てすぐ、慌てて追いかけてきた騎士だ。

「ユグドと申します。ノフィアラさま、でよろしいですか？」

この騎士は、小日向、と発音できないようだった。

「さま、とつけられるほど偉くないので、そんなに畏まらないでください」

「お客さまにそのような失礼はできかねます。お許してください」

律義な騎士は、その傍らに一匹、猫にしては大きく、犬にしては猫の顔をした獣を連れていて、そちらはバルサという名だと教えてくれた。

「猫……ですよね？」

「山猫です」

「……大きくないですか？」

「精霊ですから」

「せいれい……って、精霊っ？」

街の中で見られる生きものではない、と驚いて、改めてバルサという猫の精霊を見つめる。なあう、と鳴いた精霊は、どう見ても猫なのだが、大きさが猫ではない。

「街では見かけませんからね……と、姫？」

歩きながら話をしていたので、ユグドという騎士が追いついてもツエイルの足は止まることなく、進行形で小日向を引っ張っている。そのツエイルの足が止まったかと思ったら、ユグドの袖を引っ張って露店を指差した。

「……貨幣をお持ちでないのですね」

と、ユグドに問われて、なぜかツエイルは首を傾げる。

ああ、と小日向は気づいた。自分にとって当たり前言葉は、しかしツエイルには非日常の言葉だ。ユグドはとても流暢にディアル語を遣っている。ツエイルにわかるわけがない。

それをユグドに伝えた。

「ノフィアラさまの前で公用語を遣うわけにはいきません」

「え？」

なぜそんなことに、と目が丸くなる。

「わたし、べつに公用語が理解できないわけじゃないですよ？」

「ヴァリアスでは、ディアルの言語は教育の過程で教わります。そ

れが貴族であればなおのこと、あらゆる言語の習得が必須となるのです」

客が来たら客に合わせた言語を遣い、不自由なく快適に過ごしてもらうのは当然のことだと、ユグドは教えてくれた。

「姫が遣えないのは……」

ふう、とユグドは一息入れる。

「覚える気がなかったからだそうですね」

思わず視線がツイエルに移る。未だユグドの隊服の袖を引っ張って、小首を傾げていた。

「……買ってあげてください」

「すみませんがそうさせていただけます」

言葉の理解とは大切だ。身ぶり手ぶりでもどうにかなるものがあるが、困ることも多い。苦手でもとりあえずは習得していてよかったと、小日向は実感する。

ツイエルはユグドに露店の、甘そうな匂いを漂わせた焼き菓子を買ってもらい、小袋に入った一口大のそれを一つ、小日向に寄こしてきた。

「くれるの？」

「こくん、と頷く。ありがとう、と礼を言って受け取ると、じっと見つめられた。今すぐ食べなければならぬらしい。」

「いただきます」

にこ、と笑って一口で頬張る。サクツとした食感のあと、とろりと甘い汁が口の中に広がった。

「おいひい……」

「くらんめる」

「ん？」

「くらんめる」

「クランメル？」

どうやらクランメルという焼き菓子らしい。小日向の手を取るところころと手のひらにぱいにクランメルをくれた。こんなにはっぱい、と思ったが、二つめにもすぐ手が伸びるほど、美味しい。

三つめを食べるまで小日向の様子を見ていたツェイルは、今度はユグドに振り返り、小日向と同じように手のひらにクランメルを転がした。ユグドはそれに小さく笑いながら礼を言い、バルサにも、と頼んでいる。ツェイルは屈んで、いくつかバルサにもあげていた。

「美味しいですね、このお菓子」

ぱくん、とふつとに食べているユグドにそう言うと、ユグドは仄かに笑った。

「これに合うお茶もありますよ」

「なんていうお茶ですか？」

「このクランメルは、もともとお茶になる前のもので作られていますから、クラン茶と言います」

「へえ……」

食文化の発展はどこも似たようなものだ。お茶になるもので作られる料理というのは、ディアル国にもある。

「せっかくだすからご馳走しましょう。姫、移動しませんか」

蹲ってバルサと一緒に食べていたツェイルにそう声をかけて、ユグドは先のほうに見える広場を指差す。言葉は理解していないが仕事は理解したツェイルは、頷くと立ち上がり、再び小日向の手を取って歩き出した。

広場まで行く道中で、ユグドはご馳走すると言ったお茶をやはり露店で買っていた。

「もう食べたんですか」

ふたり分のお茶を持ったユグドに思わずそう言ったら、もちろん、と返された。小日向の手のひらにはまだいっぱいある。

「ゆっくりなさってください」

そう言われて、広場に隅にあつた長椅子に、小日向はツェイルと並んで腰かけた。お茶を渡されて、水分に誘われて口に含むと、こちらは少し苦みのある、けれども不快にはならない味が口に広がる。なるほど、焼き菓子とは相性がよさそうだ。

お茶を傍らに置いて、焼き菓子を一つずつ、ゆっくり咀嚼する。なんだか穏やかな時間だなあと思っていると、同じようにツェイルも、ゆっくりと焼き菓子を咀嚼し、広場を歩き買う人々を眺めていた。

「そら」
「……ん？」
「そら」

ツエイルが空を指差し、ディアル語で「そら」と言う。

「くも」

「……うん」

「とり」

「鳥だね」

「いえ」

「家というより店かな」

「猫」

「いや、バルサは精霊だって言っていたよ？」

「ていれ？」

「精霊」

「……ていれい」

「惜しいな。精霊、せいれい」

「せいれい」

ツエイルは耳がいいと思う。

いくつかディアル語で単語のやり取りをした。ユグドは傍らに控えながら、ときおり口を挟みつつ、バルサを撫でていた。

「そろそろ昼食です。邸に戻りましょうか」

「あ、そうですね。ツエイル、帰ろうか」

太陽の光りも強くなってきた頃、ツエイルが憶えた単語も増えたので、ユグドにその声をかけられて椅子を立つ。手を繋いで歩いていたので、帰りもそうすべきかと小日向はツエイルに手を差し伸べ

ただが、ツェイルはその手をじっと見つめるだけだった。

「どうしたの？」

「ここにいる」

「え？」

ふるふると首を左右に振ったツェイルに、小日向は戸惑う。ユグドが痛ましそうな顔をして、ツェイルの前に屈んだ。

「姫、帰りましょう」

「ユート、ことば、しらない」

なにを言っているかわからない、とツェイルはさらに首を左右に振る。さすがのユグドも、このときは公用語を口にした。

『帰りましょう、姫。殿下も姫と同じ気持ちです。わかるでしょう』

ツェイルに表情はない。だからなにを考えているのか、小日向には理解しようがない。けれども、なにかあるのだろうというのは、そういう場面をいくつも見ているせいか、把握することができた。

ユグドの言葉に納得したのかどうかわからないが、ツェイルは椅子を立つと小日向の手を取り、また引つ張って、邸のほうへと歩き始めた。

「ツェイル……？」

言葉がわかれば、話を聞いてあげられるのに。いや、小日向のほうは公用語をどうにか扱えるので、なにがどうしたのか訊くことはできるだろう。出逢ったばかりだが、訊いてもいいだろうか。

『ツェイル、なにか、あつたの?』

公用語で、その後ろ姿に話しかけると、紐で緩くまとめられているだけの髪が大きく揺れ、驚いた顔をしたツェイルが振り向いた。

『話せるのか』

え、と思う。

『話せるけど……え? 知らなかった?』

『ディアル語しか話せないから、公用語は遣うなと……なんだ、騙された』

いや、騙されたというか、必須である習得言語を覚える気もなく生活していたのなら、習得を強要されたのではなからうか。

『どれくらい話せる?』

『日常会話には困らない、程度かな? 専門用語になると、わからない言葉が多いかもしれぬ』

『けっこう話せるのか……なんだ、苦勞したのに』

もしかして、ここで小日向が公用語を遣ったら、ツェイルにディアル語を習得させようとした人たちの思惑を潰してしまうことになるのでは、と違ってユグドを振り返ったら、手のひらで目許を覆い隠して頂垂れたユグドがいた。

「あ……えと、ごめんなさい?」

「いえ……お気になさらず」

目論見を潰してしまつたようである。しかし、ツェイルの様子が気になつたのだから、許して欲しいところだ。

『礼儀を欠いて、申し訳ない。わたしはディアル語が得意ではないんだ。許してくれるだろうか』

『ああ、気にしないで。礼儀を欠いているのはこっちだから』

おもに紫武が、と言うと、喋り口調がちょっとぶっきら棒なツェイルはほつとしていた。

『こひなはいい子だ』

『そんな……失礼なことをしたのは紫武のほうだし』

なんの連絡もなく邸への滞在を強要した紫武だ。あの穏やかそうな顔をしたサリヴァンだって、最初のうちは戸惑つて紫武を帰そうとしていたくらいである。それなのに気を遣われるのは、本当に申し訳ない。

『しのか……しのは、自由だな』

『自由過ぎて迷惑だけど』

『楽しいだろう』

『まったく』

あの生きものは自由が過ぎる。どうやったらあれだけ迷惑な生きものになれるのか、小日向には不思議だ。

はあ、とため息をつけば、ツェイルが仄かに笑んだ。初めて見る笑顔だ。

ちよつと、ほつとした。もともと表情に乏しいのだろうが、それでもやはり、笑えない事情をツェイルは抱えているのだろう。

『ツェイル、なにか、あった？』

『え……？』

『いや、わたしなんか、聞いていいものじゃないのはわかってるけど、聞くだけならできるから』

一瞬だけ呆けたツェイルは、しかし次には先ほどと同じように淡く微笑む。

『こひなは、いい子だ』

ぼんぼんと、頭まで撫でられた。小日向より華奢なツェイルにそうされるのは、なんだか照れくさいというよりこそばゆい。少しだけ恥ずかしい。

『子どもが、国を離れているんだ』

『子ども？』

『五つになる』

あ、と思い出した。そういえばツェイルは女の子で、あのサリヴァンの奥さんで、一児の母なのだ。

『いろいろと、ごたごたして……このままだと、子どもの身が危険で……だから、逃げてもらったんだ』

『逃げてって……じゃあ』

『しばらく帰らない。いつ呼び戻せるかもわからない。すぐにどうにかすると、サリヴァンさまはおっしゃってくれたけれど……』

しゅん、とツェイルは肩を落とし、俯く。さらりと流れた淡い金の髪で、その顔は隠された。

『わたしも、行きたかった……でも、サリヴァンさまのそばも、離れたくなくて……どうしたらいいのか、わからないんだ』

つまりは、親子三人、一緒にいたいのだろう。小日向はまだ結婚していないし、その予定もないので、子どものことや旦那のことは考えられないけれども、その寂しさはなんとなくわかる。

紫武や都記と離れ離れになることがあったら、自分はもうどうだろうと。

寂しいし、悲しいに決まっている。

『わたしも……今は、紫武や都記さんと一緒だから、いいけど……離れるのは、いやだな』

迷惑だなんだと思いつつも、小日向は紫武が嫌いなのわけではない。むしろ紫武がいなければ、小日向は生きてもいけない。

だからけっきょく、紫武がなにをしようとなにを考えようと、なにをしてくれようと、小日向は受け入れて理解しようとするだけだ。その結果呆れたり、怒ったりするわけだが、そういう自分が嫌いだはない。

『寂しいね、ツェイル……』

寂しいと、口にすることができれば、いくらかでも心は救われる。それがただの同情でなくても、だって寂しいのだ。悲しいのだ。どうしたらいいのかわからないのだ。吐き出して、なにが悪いのだ。

『……うん、わたしは、寂しい』

ふらつと、ツェイルが小日向に倒れかかってくる。柔らかく倒れ込んできたツェイルを受け止めると、肩口に擦り寄せられた。

可愛い仕草だな、と思った。

寂しいとき、人肌が恋しくなるのは小日向も同じだったから、苦笑してツェイルの背をぼんぽんと叩く。足許で、なあう、と鳴いたバルサが、こちらを心配していた。

おまえにもわかるんだね、と小日向は目を細めた。

紫武が帰ってきた。

ちよつど夕食をいただいたあとのことで、小日向はツェイルに文字を教え、発音を教え、簡単な文章が並ぶ絵本をツェイルがゆっくりと話せるようになっていたときだ。

「あれ……サリヴァン殿下は？」

「僕よりサリエのこと気にするって、ひどくない？ 先におかえりって言うって熱烈に出迎えてくれてもいいでしょ」

「おかえり」

平淡に迎えたら、笑顔を張りつけていた紫武の顔が引き攣った。

「……こひな、可愛いね」

「ありがとう。で、サリヴァン殿下は？」

「なんかここに來てからのこひなって、僕に冷たい気がする……」

べつに冷たくしているわけではない。紫武が迷惑な生きものだと痛感してしまったから、それだけのことだ。まあそれでも、紫武なくして今の小日向は存在しないので、今ここでそれらを口にする必要はない。

それに、昨夜のことだってある。小日向はまだ納得できていないのだ。冷たい態度になってしまつのも仕方ない。

「はああ……サリエのことは、殿下って呼ぶなら、サリエ殿下。サリヴァンって呼ぶなら、サリヴァンさま。その呼称が妥当だよ」
「は？」

「サリエの、サリヴァンっていう名は、愛称だからね。それで呼ぶことを許されたんなら、サリヴァンさまって呼べばいいよ」
「……ふうん？」

なぜその話をされているのか不明であったが、サリヴァンのことをどう呼べばいいのか困っていたのは事実なので、そうなのか、と頷いておく。

「紫武のことも、大公閣下って呼んだほうがいい？」

「なんで？」

「だって、大公閣下なんでしょ？」

つい先日まで知らなかったけれども、紫武もサリヴァンと同じく、王弟だ。殿下、或いは大公、大公閣下と呼ばれる地位にある。

「紫武でいいよ。大公とか閣下とか、僕は呼ばれたくないからね」

「でも貴族で、王弟でしょ」

「兄上殺してくるねっ」

「待て！」

紫武の前でオリアレムのことをちょっとでも話題に出すと危険だ、とつくづく思う。遊びに行くようなノリよりも、もっと軽い調子で暗殺に行こうとする。どういった思考回路の繋がりがあるのか、と疲れたため息が出る。

「ええと……サリヴァンさまは、どうしたの？」

「まだ城にいるけど……なんでそんなにサリエを気にするの？ 僕、

嫉妬に狂っちゃうよ？」

「後半は意味わかんないけど……ツェイルがすごい心配してるから。でも、そっか、まだ城なんだ」

夕飯の片づけを手伝っているツェイルの、その寂しそうな後ろ姿を思い出すと、肩が落ちる。

少し前まではサリヴァンが邸にいてくれる時間も長かったが、息子に危険が及ぶ可能性が浮上してからは、その時間も短くなっていったらしい。小日向と紫武が来たときは、ちょうど息子を隣国へ逃がした日で、サリヴァンが邸にいたのは偶然だったそうだ。日数にすると、ここ二か月ほど、ツェイルはサリヴァンとすれ違いの日々が続いているとのことだ。

今は息子もそばになく、夫のサリヴァンもそばにないので、ツェイルはひどく寂しそうで、悲しそうだ。話を聞いたあとでは、ツェイルの表情が乏しいだけに、無理をしているというよりも、この気持ちはどうしたらいいのかわからない、というのがありありと伝わってくる。

「……ツェイルと仲よくなつたみたいだね」

「そうなって欲しかったんでしょ？」

「まあね。サリエの近くにいる人間は信用できるから」

「なにそれ」

「そのままの意味。さて、僕も夕食をいただくかな。都記、お願いできる？」

外で夕食を摂ってこなかったらしい紫武は、都記に脱いだ上着を渡すと食事を頼み、長椅子に腰かけた。

「……サリヴァンさまのなにを手伝ってるの？」

「いろいろ、かな」

「あんまりいい顔されないんじゃないの」

「うん……僕はこの国で、いわゆる皇弟派だからね。そういう意味ではあまりいい顔はされないけど、大公っていう地位はそれなりに役に立つからね」

「……皇弟派？」

それはなに、と首を傾げると、つまりはサリヴァンの味方だよ、と教えられた。

「子どものことは聞いた？」

「ツェイルに少し……危険があるって」

「ディアルみたいに後継がもう決まっていれば別なんだけど、ヴァリアスの皇帝には皇女ひとりしかない。けれどサリエには、公子がいる。そのことでいろいろ問題があつてね」

「ええと……簡単に言つと？」

国の政なんて、小日向には無縁のものだ。紫武の言っていることは、よくわからない。なにが問題になるのかも、首を傾げるばかりだ。

「後継がひとりだと不安だ、っていうのはわかる？」

「うん。なにかつたとき、とか……まあでも、いいことばかりでもないと思うけど」

紫武という参考事例が目の前にいると、理解し易いかもしれない。

「ヴァリアスで女帝っていうのは、珍しくはないんだ。だから、皇女は後継になれる。そこに問題はない」

「うん、わかる」

「けれど、じゃあ皇女の婿は？」

「え？」

「つまりそういこと」

「……すみません、わかりません」

それはあまりにも簡単過ぎる説明だ。というかいろいろ端折っているし割愛までされている。わかるわけがない。

「んーとねえ……皇女の婚約者に、公子を、と望む声があるわけ」「公子っていうのは、ツェイルの子ども……息子さんのことだよね？」

「そう。その公子を、皇女の婚約者にした連中と、したくない連中がいるわけ。わかる？」

「……それが問題？」

「大問題。皇女の婚約者にした連中は、半数は皇弟派。そのまた半数も皇弟派でね。したくない連中っていうのは、もちろん反皇弟派なの」

「え……ちょっと待って。勢力が三つ？」

「だから大問題」

「どういこと？」

ツェイルとサリヴァンの息子、つまり公子を皇女の婚約者にした派閥と、したくない派閥があるというのはわかる。だが、婚約者にしたいという派閥が、さらに二分されているのは意味がわからない。

「僕は皇弟派ね。それも、公子を皇女の婚約者にしたくないほうの」「その意味が、よくわからないんだけど？」

「僕はサリエの味方だ。だから、サリエが望むほうにつく。ということは何？」

「ええと……サリヴァンさまは、公子を婚約者にしたくない？」

「正解」

「そういうことは……」

サリヴァンは、息子を皇女の婚約者にしたくない、或いはするつもりがない。

けれども、それを望む声がある。

だがそれでは、反皇弟派という派閥の存在意義が不明だ。

「反皇弟派っていうのは、昔から、というか数年前から存在しているね。そのままの派閥で、サリエを気に喰わないと思っっている連中だよ」

「じゃあ、サリヴァンさまは反皇弟派とは違う想いで、公子を皇女の婚約者にしたくないってこと？」

「そういうこと」

ふむ、なるほど。そういうわけで三つの勢力があるわけだ。

「自分が皇弟なのに、反皇弟派と同調するわけもないしね……ふんふん、なるほど」

「本当にわかる？」

「なんとなく。だって紫武だって、どうしてもお兄さんがいやなんでしょ？ それと同じようなものだよ。たとえるならサリヴァンさまがお兄さんで、反皇弟派は紫武、ってところかな」

悪い譬えになるが、まあそういうことだろうと小日向が解釈すると、ふと紫武が目を細めた。

「サリエは兄上とは違うよ」

その声は、どこか冷え冷えとしていて。

「サリエと兄上を引き合いに出さないで」

それは、オリアレムを庇うというよりも、オリアレムを憎悪して、その汚れをサリヴァンに被らせたくないという、嫌悪だ。

「……ご、ごめん」

ハチャメチャな発言をするでもなく、その行動を起こそうとするでもない紫武に、少しだけ驚かせられる。こんなふうには、静かに怒ることもできるらしい。

「紫武さま、お食事の用意が整いましたよ」

紫武の珍しい姿に驚いているうちに、都記が食事を運んできてくれたので、少しだけ気まづくなっていた空気が薄れる。

紫武は都記にパツと微笑んで礼を言い、長椅子を離れて設置されている机に移動した。

「さっきの説明でだいたいわかったと思うけれど、公子が危ないのは、反皇弟派のせいね。わかる？」

「……うん」

「今のところ大きな動きはないのだけれど、まあ時間の問題だね。」

公子はもう五つだし、皇女は二つになるしね」

「……まだ若いのに、大変なことになってるね」

「若いから、若いうちに摘み取りたいとか、考える連中はいるんだよ。僕のとときもそうだったからね」

「紫武のとときも？」

食事を始めた紫武が、口をもぐもぐとさせながら、昔はいろいろ

あつたんだよ、と教えてくれる。その「いろいろ」というのが、おそらくはオリアレムとのことなのだろうけれども。

「僕の場合は、兄上自らがそういう行動を取ったから、臣下が動くことはなかったけれど。むしろ兄上の邪魔になると考えていたみたいだし」

「……紫武も、そういう派閥に？」

「まあね。魔法師の誓約に縛られるようになってからは、そういうこともなくなっただけれど。今でも僕が気に喰わない連中っていうのは、存在すると思うよ」

「……そう、なんだ」

国は、というよりも、王族や皇族は、面倒だ。つくづくそう思う。

「ねえ、紫武」

「なあに？」

「もう一回訊くけど……どうしてお兄さんを殺そうとするの？」

「兄上が僕を殺そうとするから」

にこりと、紫武は微笑む。

さも、なにも悪いことなどない、と言うかのように。

「なんの意味があるの？」

「意味なんてない」

「無意味な殺し合いって、おかしいと思わないの？」

「どこがおかしいの？」

「それは……」

「殺しには確かに、それなりに理由があると思うよ。けれど、理由はあるても、そこに意味なんてあったことある？」

「え……」

「たとえば強盗。金目当てで、その人を殺した。さて、どこに意味がある？」

不意に、その「意味」というものを突きつけられて、答えられない自分に小日向は愕然とする。

「ね？ 意味なんて、ないでしょう？」

にっこりと、紫武は艶やかに笑った。

「殺す必要はなかった。殺さなくても、金は奪えた。それなのに、殺した。その意味はなに？」

「……こ、殺されそうに、なった、から……とか」

「そう。そういう意味では、僕も兄上を殺したいと思う。だって、殺そうとしてくるんだよ？ 僕が、魔法師っていうだけだね」

オリアレムが紫武を殺そうとするのは、紫武が魔法師だから。

紫武がオリアレムを殺そうとするのは、オリアレムが紫武を殺そうとするから。

その殺し合いには、意味がない。なぜなら、紫武は魔法師で、オリアレムは国王だ。魔法師と王は、古の誓約に護られる。それゆえに、殺し合いは成立しない。

互いに殺されることも、互いに殺すこともできないこの関係は、どうにも手の打ちようがない。あるとしたら、それはどちらか一方が、諦めることだけだ。けれども、諦める気が互いにない。

なんて無意味なのだろう。

「やめなよ、紫武」

いつまでも続けていたって、どうしようもないじゃないかと、小

日向は思っ。

「やめるって、なにを？」

「お兄さんを、殺そうとしないで」

「……こひなは、兄上を庇うわけ」

「違う」

そうじゃない、と小日向は首を左右に振る。

そうじゃない。そういうことじゃない。無意味だから、もうやめて欲しいだけだ。こんなことはやめて、平和に、平穩に、ただ笑っているだけでいい生活を、手にしてもいいと思うのだ。

「……無理だよ」

食事の手を休めた紫武が、俯いて口を歪ませた。

「もう無理……生きている限り、僕は兄上に命を狙われる。僕は命を護らなければならない。だから、無理」

「お兄さんに諦めてもらってよ」

「それも無理、かな。兄上にとって……オリアレムにとって、僕っていう魔法師は、最大の脅威だからね」

「……脅威？」

なんのことだ。魔法師が脅威になんて、なるわけがない。王も魔法師も、互いのことに関しては誓約に護られているのだ。

「あのね、こひな……古き魔法師と久遠の王が交わした誓約っていうのは、縛るものであって、護るものではないんだよ」

そういえば、昨夜もそんなことは聞いた。けれども、小日向は同

じことだとやはり思う。

「だからなに」

「誓約が、互いの了承の下に、交わされたものだと思っているの？」

「互いの……合意ってこと？」

「神からの厳罰だよ」

え、と小日向は瞠目する。

「げん、ばつ……って」

「始まりは久遠の王。古き魔法師は、仲間を護るために、その代表となった者。久遠の王によって、たくさんの魔法師が命を失ったから」

「……なにそれ」

聞いた話と違う。いや、書物に記されている話と違う。

古き魔法師と久遠の王が交わした誓約は、無駄な争いを避けるためのもの、である。

小日向の解釈が間違っているのだろうか。

「争いは憎しみしか生み出さない。それなのに、久遠の王と古き魔法師は争い続けた。久遠の王が一方的に、ではあるけれど。だから神が誓約を取りつけたんだよ。いい加減にしろ、ってね」

「……そんな話、知らない」

「だろうね。もうずっと、数え切れないくらい昔の話だから。知っている人なんて、いないと思うよ」

「なんで、紫武は知ってるの」

俯いていた紫武が、その姿勢のまま、小日向を振り向いて微笑む。

「なんでだろうね」

誤魔化しているようではなく、本当に、どうしてそんなことを知っているのだろうという、純粹な疑問を持った瞳をしていた。

14 : 大陸の力 4 (前書き)

* 「」はディアル語、『』は大陸の公用語になっています。

外の気配が明るくなってきたのを感じて、小日向は眠れなかったことに長くため息をついた。

一睡もできなかったなんて、いつ以来だろう。紫武に拾われたばかりの頃以来ではないだろうか。

そんなことを思いながら寝台を離れ、さっぱりとするために着替えてすぐ洗面所で顔を洗う。鏡に映った自分は、昨日よりもひどい顔をしていた。

「わたし、なんでこんなに疲れてるんだろう」

知らなかったことをたくさん教えられたから、だろうか。都記にいろいろ教えてもらっていたときさえ、こんなに疲れたことはないのだけれども、そう思ってしまう。

「これはまた……一段とひどいお顔の色ですね」

小日向が洗面所を使っている間に、都記が朝食の用意をしてくれていた。小日向の顔を見るなり、朝の挨拶を飛ばして顔色のことを言い、それからふつうに「おはようございます」と頭を下げられる。

「おはよう……」

「……朝食のあと、また眠られたほうがよさそうですね」

「許されるなら」

「だいじょうぶですよ。特に用事があるわけでも……いえ、そういえば今朝、ツェイルさまが気にされていましたね」
「ツェイル？」

朝食の席についてから、ツェイルの昨日の姿を思い出した。
ツェイルの寂しそうな背中へ、眠る挨拶をしたあととも変わらなかった。サリヴァンが帰ってこなかったからだ。

「サリヴァンさまは……帰ってきた？」

「夜更けに帰られたようですが、今朝早く紫武さまと」

「また行っちゃったのか……」

また紫武も出かけてしまった、ということだ。紫武が出かけるのはまったくかまわないのだが、これでは遊びにきたというよりも、仕事しにきたみたいだ。

「ツェイルの様子はどんなだった？」

「昨日と変わらず」

「……そっか」

寂しいよね、と思う。なにか力になれたらいいのだけでも、小日向は子どもの代わりになることなどできないし、サリヴァンにもなれない。

今日も今日とて美味しい食事で腹を満たしたあと、小日向は寝台ではなく長椅子に埋もれて、はあと息をついた。

なにをしにここに来たのだろう。

なんのために、ここにいるのだろう。

ここで、わたしになにができるというのだろう。

帰ることはできないし、紫武の考えを変えることはできないし、ツェイルのためにできることもない、とできないことだらけだ。

「ガーナムさんとアクセルは元気かなあ……………」

国を離れてから、まだ三日も経ってない。それが嘘のように感じるのは、知った内容が濃かったからだだろうか。

ガーナム、アクセルは元気だろうか。置いてきてしまった植物たちは元気だろうか。

考えながら、うつうつとしていたときだ。

「こひな、こひな」

と呼ぶ声と、身体を揺すられる感覚に、意識が浮上する。

「……………ツェイル？」

目を擦りながら見ると、ちょこんと前に、ツェイルが屈んで小日向の膝に両手を置いていた。

『起こしてごめん。わたし、ここにいていい？』

まだツェイルはディアル語を流暢に喋れないので、ここは公用語だ。寝ぼけた頭でどうにか言語を変換して、うん、と頷く。

『眠っていていい。ここにいさせてくれたらいいから』

『うん……………ごめん、眠い』

昨夜眠れなかったせいか、眠気がひどい。ツェイルが隣に腰かけたのを感じ取ったあとは、転寝どころから熟睡だった。一度、都記

に無理やり起こされて、ツェイルと一緒に昼食を摂りはしたものの、そのあとも眠ってしまったくらいで、気づくと午後も中頃になっていた。

「ね、寝過ぎた……」

と、さすがに夕暮れを迎えそうになっている外の気配に、顔が引き攣る。小日向が眠っていたせいか、ずっとそばにいたらしいツェイルも眠っていたので静かだったのも、眠り過ぎた原因だろう。初めての異国、初めての外泊というのは、小日向に意外な疲労を抱え込ませていたらしい。

「ああ、漸く起きられましたね」

という都記の声は、呆れているというよりも、安堵していた。

「ごめんなさい、寝過ぎました」

「いいえ。ツェイルさまのほうも、このところはよく眠られていなかったようで、リリさんが一緒に眠ってくれてよかったですと安堵しておられましたよ」

「え……ツェイルが？」

表情に乏しいせいか、そういう、体調のことも小日向には把握できなかったのだが、やはり話を聞いたあとでは、眠れていなかったということも聞くとわかる気がする。

眠れるわけもないか、と思った。

まだ眠っているツェイルは、小日向に寄りかかって膝を抱え、丸くなっている。歳上にも、一児の母にも見えないツェイルは、このときも少年のようであったけれども、寂しさや悲しさは拭えられない。

なにもできない小日向だけでも、こつやってツェイルを眠らせ
てあげるとは、できたらしい。

「おふたりとも、お疲れですね」

「……っぼいね」

「休まれてください。いつそすべてを忘れる勢いで」

くす、と笑いながら言った都記に、肩を竦める。

「ここに来てから、疲れることばかりだったように思うんだけど」
「ええ。ですから、今日はゆっくり休まれてください。おやつはい
かがですか？ 街で、クランメルという焼き菓子を試食したのですが、
美味しかったので真似て作ってみました」

「クランメル！ うん、あれ美味しいね。ツェイルと一緒に食べた
よ。あ、ユグドさんっていう騎士と、バルサっていう精霊も一緒に
食べた。都記さん、やっぱり作れたね」

料理上手な都記のそれは魅力的だ。

起こすのは忍びないが、ツェイルにも一緒に食べて欲しくて、肩
を揺する。なかなか起きなかったけれども、それはつまり熟睡して
くれたということ、少しそれを嬉しく思いながら、小日向はツェ
イルと一緒に、都記が作ってくれたクランメルもどきを食べた。

その日、紫武は帰ってこなかった。

その次の日も、そのまた次の日も、紫武は帰ってこなくて。

同じようにサリヴァンも帰ってこないから、ツェイルとずっと一
緒にいた。ディアル語を勉強したり、本を読んだり、片刃の剣士で
もあるらしいツェイルに剣を教えてもらったり、植物に詳しい小日
向が逆にそれらをいろいろ教えたり、そんなふうにあたりで過ごし

た。

ふたりとも、よく眠れる日々ではなかったけれども、押し迫る感情を、どうにかできたわけでもなかったけれども。ただ一緒にいることで、気を紛らわせて、微笑んだ。

「ミムの芽、スールの葉、リックの根……薬になる植物が多いね、こっ」

「姉、妹、やく……やくす？」

「ん？」

「こひな、一緒」

「薬師？ へえ……こっちにも薬師っているんだね」

「あまり、いない。メルエイラ、特殊」

「めるえいら……ああ、あのメルエイラ？ 聞いたことある。皇の剣、だつたかな。歴史の本で読んだよ」

「もういない」

「え？」

「メルエイラ、滅ぶ。皇の剣、違う」

ツェイルの語彙が増えた頃、とりあえず通じる程度にはなっていた。それくらい、ふたりで過ごしていた。

「ツェイルは、メルエイラの人？」

「昔。今、違う」

「そっか……悲しい？」

「いい。メルエイラ、滅ぶ。自然」

「……寂しいね」

「サリヴァンさま、護る。メルエイラ、喜ぶ。いい」

そのときだけ、ツェイルは幸せそうに笑ったから、小日向も笑った。

「わたしも護れたら、いいんだけどね」

「こひな？」

「うん。わたし、なににもできないから。紫武を護れるわけじゃないし、逆に護られてるし……わたしってなんだろうって、思うようになった」

少し寂しいな、と肩を竦めると、ツェイルにぼんぼんと頭を撫でられた。

「いい子。こひな、いい子」

「はは、そうでもないよ」

「いい子」

よしよし、とまるで宥められるかのように、慰めるかのように、ツェイルに撫でられ続ける。

少しだけ、切なくなつて、涙が浮かんだ。

そのときだ。

急にツェイルが、屈んでいた庭のその場所から、立ち上がる。

「ツェイル？」

どうしたのだろうと思って、小日向も追いかけて立ち上がる。

「なにか、くる」

「え？」

数日前から、なぜかツェイルは邸内でも帯剣するようになっていて、今日も腰に銀色の剣を帯びていたが、その柄を握ることはなか

った。それなのに、今は剣の柄を握り、探るように周りを見渡す。

「ツェイル？」

呼びかけるが、ツェイルは周りを警戒することに集中している。しかし。

「上っ！」

握っていた剣が鞘から抜かれるのと、その声が響いたのは同時だった。

15 : 大陸の力 5 (前書き)

残酷描写があります。
ご注意ください。

「うえっ！」

というツエイルの大きな声を聞いて、小日向はハッと見上げ、そして瞠目する。

黒ずくめの人間が、鈍く光る剣を振りかざしながら、空から落ちてくるところだった。

『下がれ、こひな！』

ツエイルの言葉を頭が変換させきる前に、どん、とツエイルに押されて木陰に転がる。

体勢を整えたときには、剣が混じり合う音が耳を突いた。

ぎくり、とした。

ぎよっ、とした。

「ツエイル……っ」

黒ずくめの人間が降りおろした剣を、ツエイルが受け止めているいや、往なしてすでに二合めに入っている。

ヴァルハラ家の邸内であるのに、襲撃されているのだと気づいたときには、ツエイルと黒ずくめの人間は戦闘状態にあった。

「な、なんで……どうして？」

紫武は言っていた。「ここは安全だ、と。」

「お兄さんが、来たの……？」

黒づくめの男は剣を握っている。

けれどもその背には、魔法師が背負う紋章が、あった。

狙いは確実に、紫武だろう。

王は魔法師を傷つけられない。魔法師は王を傷つけられない。だが、魔法師は魔法師を傷つけることができる。また王も、王族を傷つけることができる。

「紫武を……、え？」

ハッとした。

紫武は、王族だ。

魔法師と王の誓約は、紫武にどんな効力をもたらしているのか。

「こひな！」

大きな声にわれに返ったとき、小日向は目の前に振り上げられた剣を見た。

殺される。

そう慄いたのは一瞬で、思ったときには身が竦んで動けない。愕然と、振り下ろされる剣を見ていた。

それでも、恐怖は小日向に瞼を閉じさせて。

「こひな……っ」

真っ暗な視界で、ツエイルの声を近くに感じた。

「にげる……こひな……いくっ」

なぜツエイルの声があんなに近くで聞こえるのだろうか、目を上げて見てみたら。

「……ツエイル」

ぼた、ぼた、と頬に落ちてくるのは、赤い雫。

「はやく……こひなっ」

なんてことだ、と小日向は瞠目した。

「ツエイル！」

思考に気を取られて、状況を疎かにしてしまっていたせいで、さうらに出てきた襲撃者に小日向は狙われていた。それに気づいたツエイルが、身を呈して庇ってくれたのだ。

ざっくりと、両刃の剣が、ツエイルの左肩に突き刺さっている。

「ツエイル！」

「いい……にげる、こひな、はやく！」

動揺する小日向に怒鳴りつけたツエイルは、母国語である公用語ではなく、わざわざディアル語を使っている。そんな気遣いまでさせているのに、小日向の足は竦んで動かない。

「ツェイル……でも」

声が震える。

身体が震える。

どうすればいいのだろうと、気持ち混乱する。

そうしているうちに、ツェイルは傷つけられた肩をもともせず、黒ずくめの魔法師を剣で押し返した。

全身で呼吸するツェイルが剣を構え直すと、黒ずくめの魔法師は足許に陣を浮かばせる。

詠唱しようとしているのを見て、大型の魔法を発動させる気だと気づいたとき、急にぴんと空気が張り詰めた。

黒ずくめの魔法師の、詠唱が止まる。

とたん。

ぱんつ、と。

破裂した音がした。

「こひなっ」

剣を投げ捨てたツェイルに、なにが起こったのか見せまいとするように、抱きしめられて視界を塞がれる。

だから小日向はそれを見なかった。

見えなかった。

けれども、音は聞こえる。

続けざまに、なにかが破裂したような音を、数度聞いた。

「よくも……よくも僕の小日向を、狙ってくれたな」

紫武の声だ。

「紫武が来てくれた。」

そこに紫武がいる。

「しのぶ……っ」

もうだいたいじょうぶだ。紫武が来てくれたのだから、もう、もう怖い思いはしなくていい。

そう安心した小日向は、しかしまた数度、なにかが破裂したような音を聞く。ツェイルの腕も、小日向を強く抱きしめて離れない。

「ツェイル、もうだいたいじょうぶ、紫武がいる」

「だめ……まだ、だめ」

「けど……っ」

ツェイルはひどい怪我をしている。傷つけられた左肩からは血が溢れ、服をべつとりとさせている。早く手当てしなければ、大変だ。

「ツェイル……っ…ツェイル」

ぎゅっと抱きしめてくるツェイルは離れない。その間も、ツェイルの肩からは血が流れ続けている。

小日向の焦燥感が強まって、恐慌状態に陥りかけてから漸く、ふっとツェイルは離れていった。

「ツェイル！」

危険が去ったのもあるだろう。崩れるように、ツェイルはそのまま後ろに倒れ込む。追いかけて腕を伸ばしたところで、風が吹いた。ふわりと、皇族の清楚な衣装に身を包んだサリヴァンが、その両腕にツェイルを受け入れていた。

「サ、サリヴァンさま」

「今は触れてくれるな」

小日向を見ることがなく言うと、サリヴァンは血まみれのツェイルを抱き上げる。走り去っていくのと、紫武が近づいてくるのは同時だった。

「紫武……っ……ツェイルが」

「無事？」

「わたしより、ツェイルが！」

「うん、わかってる。だから、無事？」

恐慌状態の小日向を、目の前で屈んだ紫武は心配そうな顔で覗き込んでくる。そつと頬を撫でられて、それが紫武のぬくもりだと安堵すると、涙が溢れた。

「紫武……っ」

「うん、怖かったね」

強い力で引き寄せられる。ツェイルがそうしてくれたように、紫武にもぎゅっと抱きしめられて、もつと涙が溢れた。

「わ、わた、し……っ……なにも、ツェイル、に……っ……ツェイ、ルに」

「ごめん。僕が、油断したせいだ」

「ツェイル、血が……っ……怪我、して」

「ごめん……僕が悪いんだ。本当に、ごめん」
「うう……っ……しの、しのぶう」

どうすればいいのだろう。

どうしたらいいのだろう。

ツェイルが傷を負ったのは、小日向を庇ったせいだ。

小日向が動けなかったから、一瞬でも考えごとをしてしまったから、だからツェイルに傷を負わせてしまった。

めいっばいの罪悪に、小日向は後悔した。

後悔を感じていることにすら、後悔した。

悔しくて悲しくて、どうしたらいいのかわからなくて、小日向は紫武に抱きしめられて泣き続けた。

16 : 大陸の力 5 追記 (前書き)

ツエイル視点です。

痛いのは、いつも一瞬。

悲しいのや寂しいのは、長引くけれど。

痛いのはいつも一瞬で、あとは我慢すればやり過ごせる。

だからツェイルは、ズキズキと痛んでいた左肩の傷を、すぐに忘れた。

その声を、聞くまでは。

「ツェイ……っ」

自分を呼ぶ声に、薄目を開ける。ぼんやりとした視界には、きらきらと光る銀糸があった。そうして徐々に、その輪郭がはっきりとしてくる。それでも周りはまだぼんやりとしていて、見えるのはそれだけだ。

「……サリヴァンさま」

「！ ツェイっ」

聞き取れないほどの掠れた自分の声に、しかしサリヴァンは気づく。

「ツェイ、ツェイ、もうだいじょうぶだ、おれがいるから」

「……サリヴァンさま」

「だいじょうぶだ、おれがいる、おれがそばにいるから」

ツェイルに「だいじょうぶだ」と言いながら、とてもつらそうなサリヴァンに、ツェイルは歯噛みする。わたしのほうこそだいじょうぶだから、と手を伸ばそうとして、左腕が動かないことに気づいた。

ああ、そういえば邸が襲撃されて、その狙いが小日向にあって、護ろうとしたのだった。

それで肩を、剣で刺される、などという失態を犯したのだ。

「こひな、は……？」

無事だろうか。

あんなに怯えていた。

あんなに驚いていた。

だいじょうぶだろうか。

「しのがいる」

「しの、も……きて、くれた？」

「ああ。だから今は自分のことだけを考えてくれ。頼む、ツェイ」

ゆつくりと、優しく、サリヴァンは頬を撫でてくれる。その心地よさに、ツェイルはほっと息をついた。

「ツェイ……ツェイ」

泣きそうな顔になっていたサリヴァンは、ツェイルがほっと息をつくとさらに顔を歪めて、ツェイルの胸に顔を埋めてくる。動く右手は、サリヴァンの左手に絡め取られた。

「おまえが傷つくなんて……っ いやだ、ツエイ。おれをひとりにするな、ツエイ、ツエイ」

肩の怪我は、今は腕を動かさそうにないけれども、痛みもなくだ
いじょうぶだ。それなのに、サリヴァンはひどく、悲しんでいる。

その悲しみが、痛い。

「だい、じょうぶ……わたし、へいき……こひな、ぶじなら、だ
いじょうぶ」

「おれにはおまえしかいないんだ……っ」

絡め取られている右手に、サリヴァンの震えが伝わってくる。

ひどく悲しませてしまったことには申し訳なさを感じるが、小日
向を護れたのだから後悔はない。

ツエイは幾度も、だいじょうぶ、と繰り返し、サリヴァンに幾
度も「ツエイ」と呼ばれながら、そばにいるサリヴァンのぬくもりに
久しぶりの安眠を得た。

16 : 大陸の力。 5 追記。(後書き)

ツエイルを書きたかっただけです。
すみません。

ツェイルの怪我が、出血のわりに傷は深くなく、受身がよかったことで早く治ると聞いたとたん、小日向は再び泣いた。

「そんなに泣いたら目がとけちゃうよ」

という、紫武の子供じみた慰めを受けて、漸く嗚咽も治まった頃、ツェイルが眠る部屋に入れてもらえた。寝台にはツェイルと、ツェイルを護るように並んで眠っているサリヴァンがいて、一瞬だが足が躊躇う。それでもツェイルが気になってそばに寄り、その顔を覗き込めば、まだ蒼褪めているものの寝息は安らかで、サリヴァンのぬくもりを得て安堵しているように見えた。

「本当に、もうだいじょうぶ？」

治療に手を貸してくれた都記にそう訊ねると、笑顔で頷いてくれる。さらに確認するように紫武を見ても、だいじょうぶだよと言われた。

「……よかった」

状況はよくないが、状態はよさそうで、ほっと息をつく。

なにか手伝えることはないかと、治療を担当した医師に訊くと、薬師も揃っているからだいじょうぶだと返された。

「わ、わたしも薬師です。魔法を付与させた薬、作れます」

「ああいえ、ツェイルさまはちよつと……薬には弱いので」

「え……」

「妻でない……メルエイラの薬師でない、ツェイルさまのお身体に合う薬は調合できないんですよ」

医師の妻はメルエイラ家の出身で、しかもツェイルの姉だという。薬に弱いツェイルは、姉の調合した薬以外を受けつけることができないのだそうだ。

それを聞いて、自分はますます役立たずだと、小日向は落ち込む。

「わたし、なににもできない……」

できることがあると思つて、魔法薬師になつた。けれども、それすらもここでは無意味だ。

こんなにできないことが多いだなんて、初めてだ。

「そんなに落ち込むな。ツェイまで落ち込む」

しょぼくしていたら、いつのまにか起きていたサリヴァンに、そう言われた。

今は触れてくれるな、と言われたことを思い出してびくつくくと、紫武に肩を抱かれる。

「じ……じめん、なさい……わたしの、せいで」

「謝るな」

「でもっ」

「謝るな。ツェイは、できることをやっただけだ」

「あれは魔法師だった。わたしを狙ってた。わたしが……わたしが、ツイールを巻き込んだ」
「違う」

小日向の言葉をすべて否定するサリヴァンに、止まっていた涙が溢れる。

どうしてこんなに、優しいのだろう。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

「だから、謝るな。きみは悪くない。悪いとしたら、しのだ。しのがきみを巻き込んだ」

「でも、今回はわたしが」

「きみを護れないしのが悪い」

サリヴァンが、睨むように紫武を見据える。振り向くと紫武は苦笑していて、肩を竦めてみせた。

「そうだね……僕が、悪い。こひなは僕が護らないといけないのに、ツイールに護ってもらっちゃったからね」

「紫武……」

「ねえ、こひな。ちょっとだけ、無理をしてもいいかな」

「え……?」

「本当にちょっとだけ……痛いかもしれない。我慢してくれる?」

なんのことだろう、と首を傾げると、ふっと紫武のぬくもりが離れていく。代わりに、都記の手のひらが小日向の肩に置かれた。

「しの? なにをする気だ」

寝台に横になっているツェイルに近づいた紫武が、怪訝そうにしたサリヴァンにつこりと微笑みかける。

「魔法が、効けばいいなと思って」

そう言った紫武の周りが、白く光る陣に突然と囲まれる。

「しのっ？」

「失われた古き魔法……僕なら、使えるから」

「……、まさか」

紫武がなにをしようとしているのか、サリヴァンにはわかつたらしい。だが、小日向にはわからない。

「いったいなにが起きようとしているのだろう。」

「いや、なにを起こそうとしているのだろう。」

「できるだけ痛まないようにするから、許してね、こひな」

紫武に許しを乞われた、そのとたん。

どん、と。

「うあ……っ」

胸に、ひどく重い痛みが走った。

痛みのあまりよろめいたら、都記に支えられる。立っていられなくなる、床に崩折れた身体を腕に抱かれた。

「な、に……っ……これ」

「もう少しだけ、我慢して。ごめんね、こひな」

紫武の声が遠い。けれども、どうしてだろう、頭には響いてくる。息苦しくなってくると短い呼吸が繰り返され、視界がぼやけてくる。

いつまでこの苦しさが続くのだろうと、思ったとき、唐突にそれらは去っていった。

「こひな」

肩で息をしながら見た先には、泣きそうな顔をしている紫武がいる。

「ごめんね、痛かったね、もうだいじょうぶだから、ごめんね」

「しの、ぶ……?」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ、ごめんね」

腕は、気づくと都記から紫武に代わっていて、抱きしめてくるぬくもりが強かった。

「しのぶ……いまの」

今のあれは、いつたいなんだっただろう。

そう訊きたかったのに、泣き疲れていた身体は、急激な痛みに耐えたことでさらに疲れたのか、意識が遠のいていく。

「きみに、もう二度と、あの痛みを感じさせなくなかったのに……
ごめんね、こひな」

最後に聞こえた言葉は、意味が、わからなかった。

18 : 大陸の力 7 (前書き)

紫武視点です。

倒れた小日向を両腕にきつく抱いて、紫武は深く息をつく。ずきずきとする胸は、これは小日向の痛みだ。

「しの、だいじょうぶか」

サリヴァンの案じる声に、顔を上げてにこりと微笑む。怪訝そうな顔をしたサリヴァンは、しかしそれ以上の言葉もなく、ほつと息をついていた。

「サリエにも魔法をかけてあげようか？ だいぶ疲れてるでしょ」

「おれはいい。それより早くその子を休ませてやれ」

「言われなくても。都記、頼んでいいかな」

案じていたのはサリヴァンだけでなく、都記も心配そうな顔で控えている。小日向を頼むと、駆け寄ってきてくれた。

「紫武さまは……」

「僕は平気。こひなを眠らせてあげて」

「御意」

きつく腕に抱いていた小日向を都記の腕に移すと、都記はすぐに小日向を部屋に運んでくれる。

紫武はふつと息をついて、背を伸ばした。

「失われた魔法を使うのは、久しぶりだったなあ」

「……失われた、というのは、あんた以外に遣えない、ということか？」

ふふ、と笑う。

「僕しか遣えない、なんて……みんなが遣おうとしないから、そのうち遣える魔法師がいなくなって、けっきょく僕だけが憶えていたというだけのことだよ」

「治癒の力は大陸中を探してもそういない。稀な力だ」

「遣おうと思えば遣える力なんだけれど。でも、そうだね……素質があっても遣えない力かもしれない」

「なぜ？」

「寿命が縮むからだよ」

躊躇うことなく答えたら、サリヴァンはハッと、驚いたように目を見開いた。

「僕ら魔法師は、自然のものを借りて自分の力にできるわけだから、自然という力がなければ意味を成さない。天恵も似たものだろう？

風を操れるなら、風という自然の力を借りる。水を操れるなら、水という自然の力を借りる。それと同じように、治癒は、自分の中にある自然治癒という力を借りる。つまり、生命力を糧に治癒の力は働くんだよ」

「……だから、寿命が？」

「そう、削られる。人間には限界というものがあって、無限にその力が溢れてくるわけではないからね」

肩を竦めてその説明をすると、サリヴァンは眉間に皺を寄せ、深

々とため息をついた。

「話に聞くと稀な力である所以がわかる」

「まあサリエなら、どうやらなにかの器になっているようだし、わかると思うけれど」

ちらりと見えるサリヴァンのそれを口にしたら、眉間の皺がさらに増えた。そうしてふっと俯き、拳を握る。

「おれは長くないのか」

「……僕にはそこまで見えない。けれど……あまり無茶はしないほうがいいよ」

紫武が言えることはそれだけだ。

サリヴァンには天恵がある。紫武が魔法を遣えるように、サリヴァンは天恵を遣える。初めて逢ったときから不思議な天恵を持っているとサリヴァンに対して思っていたが、数年逢わずにいたらそれが少し変わっていた。不思議というよりも、なんだか奇妙で、強くて、できることなら触れたくないような、そんな力に変化している気がしてならない。

なにかあったのだろう、というのわかるのだが、どうしたらそうなるのか、紫武には皆目見当がつかない。

「なにかあったの？ いや、あったんだね」

「いろいろと」

「それだけで済ませないでよ」

「いろいろあり過ぎて、どう説明すればいいのかわからない。ただ……」

「ただ？」

「ツイイに出逢ったから……おれは変わったんだと思う」

それは、紫武が小日向に出逢えたから変わったことと、同じだ。

「そっか」

同じだね、と微笑むと、サリヴァンは顔を上げて苦笑を見せた。

「あんたも、変わったからな。変われない奴はいないんだと、思うよ」

「そう思わなければできないことではあるけれど。まあ僕は、変わりたいというよりも、変えなければなにも始まらないって……少ないとも、サリエに出逢ってそう思ったからね。だからこひなにも……小日向にも出逢えた」

唯一無二の、存在に。

出逢えたその喜び。

その、至福。

サリヴァンという友に出逢えなかったら、唯一無二の存在にも、出逢えなかっただろう。

「あの子には、あれ以上落ち込んで欲しくない。ツイイがとても気にしている。だいじょうぶなのか？」

「少し休めば身体は回復するし、僕がいるからね」

「そういえば……なぜあんたの力に、あの子は引き摺られたんだ？」

ああそれは、と紫武は小日向を拾った当初のことを説明する。そういう事情があったから、と言えば、サリヴァンは「本当にあんたは変わったな」と感心していた。

「殺さなかっただけでも進歩だというのに……」

「僕、そんなに誰かを殺しそうな顔、してたかな？」
「ああ」

即答されてしまった衝撃は、かなり痛い。けれども、遠慮なく言ってくれるサリヴァンの心は、嬉しかった。

「……僕がどれだけきみに救われたか、きみはわからないんだろうな」

「ん？」

「なんでもない。ねえサリエ」

「なんだ」

「ごめんね」

「……、なにが？」

きよとんとしたサリヴァンに、もう忘れちゃったのか、と苦笑がこぼれる。

「ツェイルに怪我させて、ごめんね」

「ああ……あんたのせいではあるが、責めるつもりはない。こちらの警備も甘かったからな」

紫武のせいだ、と言いながら、責めないサリヴァンの心に、いつもは痛まない胸が痛む。きっとこれは小日向だけの痛みではなく、自分自身の痛みでもあるのだろう。

自分にまだ心があると知って、嬉しく思う。

「これからどうしたらいいかな」

「どうもしない」

「え、しないの？」

「ユート経由でツアインにこれは知られただろうから、ツアインが

勝手に動く。それに……自由気儘に動くのは、ツアインだけではないからな」

ツアイン、というのは、ツェイルの兄だという、紫武に恨みを持つてしまった男のことだろうけれども、意味的にはサリヴァンがなにを言っているのか、紫武にはわからない。

「きみの部下は、もしかしてとんでもなく、自由なのかな？」

「宿舍を覗いて見る。おれ抜きで、報復計画が立てられているぞ。完璧なまでに」

「うわ……」

羨ましいほど慕われているようだが、しかしそれはそれで少し、身動きが取れなくて不便そうだ。

「おかげでおれの出番が少ない……だからおれも勝手にやる」

「ええ？ いや、それは拙いんじゃないかな。だってサリエ、皇弟じゃないの」

「しのも王弟だろうが」

「いや僕は小国の王弟で、サリエみたいな危険っていうのは兄上くらいだから……まあ、今回はその僕のせいではあるけれど」

それほど重要視していなかった、というのが実のところ紫武の本音である。少し逃げていたほうがいいかな、と思って、サリヴァンのところへ来た。突発的な思いつきは、いつだってその程度でしかない。それが今回はツェイルに怪我をさせるといって、最悪な結果をもたらした。

楽観視してられない、逃げるだけでは駄目か、と漸く理解したのは、小日向が狙われてツェイルに怪我を負わせてしまったからだ。

「おれはおれで、報復する。あんたには悪いが」

「悪くはないよ。あれは兄上の手先であって、僕は関係ないからね。けれど……あまり応援する気にはなれないな」

「本来の狙いはあの子だぞ」

「いい狙いではあるけれどね……」

思い出すと腸が煮え燥りかえる。ふつつつと、怒りが込み上げてくる。けれども抑えなければ、小日向を泣かせてしまいそうで、怖い。

「本当に、変わったな」

「え、そう？」

「絶望を知った笑みと、その怯えた目……あのときは見られなかったものだ」

改めて言われると、若かったがゆえの浅はかな衝動が、恥ずかしくてならない。

「僕は……こひなと、ずっと一緒にいたいから」

「なら、逆に訊く。あんたはどうするつもりだ？ このまま逃げ続けるのか？ ここに居続けることはかまわないが、ここにいるより、祖国のほうに、より気楽だと思っぞ」

たとえ兄オリアレムと折り合いが悪くとも、ヴァリアス帝国に居続けるより、ディアル国のほうが安心して暮らしていける。

それは紫武もわかっていることだ。

六年前、浅はかなことをして、この国に、サリヴァンに迷惑をかけるければ、それでも逃げ続けていられただろうけれども。

だがそれを否定したら、小日向のことも否定することになる。

だから、その可能性は、考えない。

「どうしようかな……僕は、あまり関わりたくないだね、本当のところは」

「国王と？」

「諦めてくれないから」

紫武はもう諦めたのに。

オリアレムは諦めてくれない。

「どうしたらいいと思う？」

「おれに訊くな」

「わからないから訊いているのに」

「あの子が答えただろう」

そう、言われて。

紫武は顔から感情をそぎ落とす。

「兄上を殺すなって、こひなは言う」

「なら、そうすればいい」

「受身になれっていうの？ 兄上は僕を殺そうとして……今回だつて、兄上の手の者がツェイルに怪我をさせたのに」

失態だ。ことを甘く見ていた紫武の、責任だ。それなのに責めてくれないから、どうすればいいのかわからなくなる。

「しの」

「……なに」

「なんのために、封じていた魔法を解放させたんだ」

「え……」

「あれだけ嫌っていた魔法を、なぜ解放する気になった」

「……それは」

「護りたいからじゃないのか」

そうだ。

紫武は、護りたい。

小日向を。

小日向との生活を。

だから、魔法を遣う。

以前よりも、もっと気楽に、遣えるようになった。

「おれはツエイを護りたいから……ツエイのそばにいたいから、国主の天恵を認めた」

変わったのは、変わったのは、唯一無二の存在に出逢えたから。サリヴァンに対して、同じだね、と言ったのは自分ではないか。

「護りたいなら、護れるだけの力を使えばいい。それだけのことに、なんの迷いがある？」

「迷い？ 僕に迷いなんて」

小日向を護るためなら、なんだってする。迷いなんてない。

「しの、排除するだけがすべてではないぞ」

「排除しなければ、護れない」

「あの子の気持ちを考える。護るとは、相手の気持ちを汲まなければ、できることではないんだ」

なんて、難しいことを言う。

紫武は頭を抱えた。

「兄上が邪魔するんだ。僕は魔法師であることを諦めたのに、あの人は……っ」

取り戻したかったのだろうと、今なら思う。

そのときまでは、紫武は魔法師ではなかったし、オリアレムは王ではなかったから。

だが紫武は魔法師で、オリアレムは王だった。ただの兄弟では、いられなくなった。

紫武の、オリアレムの、過去の記憶がそうさせた。

「……しの、振り回されるな」

「振り回される？ 僕が？ なにに？」

「しのは、しのだ」

「……そんなのはわかってるよ」

けれども、どうしようもない。

この記憶は消せない。忘れられない。

ともすれば怒りにも似た苛立ちを抑えられなくなりそんな感覚に、紫武は拳を強く握ると、サリヴァンに背を向けた。

「しの」

「わかってる。頭を冷やしてから、こひなのところに戻るよ」

自分のことで感情を持て余すなんて、どれくらい久しぶりのことだろう。いつも小日向のことばかりだったのに、今は自分に振り回されている。

ああ、振り回されている。

これが大陸の力だ。

小さな島国にはない、大陸の、寛容で大きな力。

だから気づかされる。

いかに己が、小さな存在であるか。

自嘲を口許に浮かべながら、紫武は部屋を出た。

ツェイルの怪我は、翌日には起きて歩けるくらいにまで回復していた。熱が出たのは昨夜のうちだけだったそうで、朝にはもうすっかり顔色も戻って、痛みも薄れ引き攣るような違和感くらいしか残らなかったらしい。

「じゃあ、もうだいじょうぶ？」

「へいき」

「本当に？」

「へいき」

平然と立って歩いているツェイルを見て小日向は驚いたが、飄々としている姿を見ればさすがに疑心暗鬼にはならない。

紫武の魔法が効いたのだろう。

そう思うと、安堵した。

だが、なによりもツェイルを癒したのは、やはりサリヴァンだ。

「サリヴァンさま、ずっと、そば、いてくれた」

嬉しそうに淡く微笑むツェイルは、可愛らしかった。

『ツェイ？ ツェイ、どこに行った。戻っておいで、ツェイ』

ツェイルはサリヴァンに呼ばれると、周りの空気にパッと花を咲

かせる。表情はあまり変わらないのに、空気は素直だ。

サリヴァンに駆け寄っていくツェイルの姿を見送って、小日向はさらにほっと、息をついた。

「元気になって、よかった……」

「こひなはそれほど元気じゃないだろ。寝台に戻りなさい」

「え？」

後ろから声をかけられて、吃驚して振り向いたら、寝起きの紫武が不機嫌そうな顔で立っていた。

「紫武……おはよう」

「おはよう、じゃない。部屋に戻るよ」

「えっ……ちょ、紫武」

朝の挨拶も適当に、紫武にがつちりと手首を掴まれると、強い力で引つ張られた。急性さに躓きながら、強引な紫武に引つ張られて、部屋に戻されてしまう。

「まったく……自分の不調にも気づかないなんて」

「わたし、べつに」

「このところ眠れてなかったんだって？ 都記から聞いたよ。今日は僕もいるから、休みなさい」

「……紫武、今日はあるの？」

「いるよ。サリエがいただろう」

珍しくいると思ったら、サリヴァンが出かけていないからだ。そういえばサリヴァンと一緒にどこかに出かけていたので、サリヴァンがいるなら紫武もいることになる。

「都記、朝食をお願い。果物は柔らかいものにしてくれる？ 無理なら摩り下ろしたのでいいから」

部屋に入るなり、紫武は小日向を寝台に放り投げ、控えていた都記に朝食を頼む。呆然とそれを見ていたら、上着を脱ぎなさい、と言われた。

「え、なんで」

「休むから」

「休むって……え？ ここ、紫武の寝室……」

「それがどうかした？」

どうかしたもなにも、と小日向は困惑する。今まで、一度だって寝室が一緒になったことなど、ないのだ。

「や、休めっていうなら、わたし、自分の部屋に」

「いいから、ここにいて」

「でも」

「離れると僕がしんどいの」

「しんどい？」

なにが、と首を傾げたら、いつまで経っても上着を脱がない小日向に焦れた紫武が寝台に上がってきて、小日向の上着を脱がせにかかった。

「ちょー！ し、しのぶ、なにをするのー！」

「この下は寝間着でしょ。寝苦しくなるんだから、脱ぎなさい」

「や、やめてよー！」

まかりなりにも、生物学的上は女である小日向だ。恥ずかしい。

だが、紫武は強かだ。

小日向の弱点である後ろ首を掴むと、くすぐったさに身を抜いた反動を使って、すばんと上着を脱がせてしまう。

「ぎゃーっ!」

「あのね……女の子なんだからせめて、きゃー、にしよっよ」

「なにするんだよ! もう! 紫武のばか!」

「はいはい。それだけ叫べるなら、そろそろ回復してきたかな」

「わたしは元気だよ!」

上着を剥ぎ取られて、少し肌寒くなった身体を己で抱きしめる。

ぎゃあぎゃあ騒いだ小日向を紫武は呆れて見ていたけれども、その瞳は温かくて優しくかった。

「ほら、おいで」

寒いでしょ、と伸ばされた両腕に、小日向は首を左右に振る。そうでなくても気恥しい思いをしたのに、さらに紫武の両腕に飛び込むなど、もうそんな歳でもないのだが。

「いいからおいで」

「ここでもやはり紫武は強かだ。」

「うわあ!」

「だから……きゃあ、とかにしよっよ」

叫ぶならさあ、という声が、耳許を掠める。いつもより近い声に、背筋がぞわりとした。

「ち、近づ」

「ん？」

声が近い。吐息が近い。距離が近い。すぐ後ろに紫武がいる。紫武に後ろから抱きしめられている。

こんなに紫武が近いのは、どれくらいぶりだろう。

「やっぱり、ちょっと身体が冷たいね……動くのしんどかったんじゃないの？」

「え……え？」

「自覚なし、か……さすがは僕の魔法」

「魔法？」

なんのことだ、と首を傾げたとき、紫武の手のひらが、とんと左胸を包んだ。

「へ、あ……っ？」

いやちょっと、と叫びそうになる。

そこは、確かに貧しいけれども、きちんとした形のものがあるわけ、決して平らなわけではないのだ。

「し、し、しの、なに、なに……っ」

紫武がおかしくなった。そう思わずにはおれない状況に、小日向はドキドキしながら息を詰め、目に涙を浮かべる。

「そう、動かないで。力をあげるから」

「え、え、え……っ？」

「だいじょうぶ。僕がそばにいるから」

吹きかけられるように、耳許に囁かれたあと、小日向の左胸を包む紫武の手のひらが蒼白く光り、紫武の魔法陣が浮かび上がった。

「しの……っ?」

「うん、だいじょうぶ。昨日のうちに大半は回復していたから、これは最後の仕上げ。僕の力をあげる」

紫武がなにを言っているのかわからない。

わからないけれども、されている行為は、恥ずかしくてならないものだ。

「やだ…っ…しの」

離して、と抗うけれども。

「だめ」

前に回っている腕は、胸を包む手のひらは、背にした紫武は、離れていってくれない。

それどころか、強い力で引き留められている。紫武に触れられているところすべてから、引力のようなものすら感じる。

左胸に、ふわりとぬくもりを感じたとき。

「ひゃあ……っ」

きゅっと、力を込められて。

貧しくとも形ある胸に、紫武の指が喰い込む。押されるなんとも

いえない感覚に、小日向は咽喉を引き攣らせ、後ろ頭を紫武に押しつけてきつく瞼を閉じた。

「だめだよ、こひな。逃げちゃだめ。こひなは僕のものなんだから」
「し、しの、ぶ……っ」
「いい子にして」

囁かれる言葉が、小日向の耳をくすぐる。

すつと首を撫でられた感触にハッと目を開けたら、肌蹴た胸元から紫武の手のひらが侵入していて、寝間着の留め具を次々外していた。肌着も、めくられてしまった。

あっというまに、素肌が露わになる。
その羞恥に、真っ赤になった。

「なに……っなに、しの、なににして」
「確かめるの」
「た、たしかめ……？」
「こひなを」

意味がわからなかった。

いや、わからなくていい。

とにかく恥ずかしくて、どうすれば紫武が今の行為をやめてくれるのか、それだけで頭がいっぱいになった。

「憶えておいで、こひな」

左胸を包んでいた手のひらがふつと離れる。なんとか引っかかっていた寝間着や肌着は、それで完全に肌蹴ってしまった。

「や……っ」

すぐに戻った手のひらは、今度は直に、小日向のそれを包む。直接感じる紫武の手のひらに、もう頭は混乱しっ放しだった。

「見て、こひな」

見られるわけがない。

顔を逸らし、目をきつく瞑る。けれども、紫武は「見る」と強要してくる。

「これが、僕の命だよ」

それまでずっと小日向の左胸に浮かびあがっていた紫武の魔法陣が、紫武が手のひらに力を込め続けると同じ速度で、ぐぐぐっと小日向の胸に浸透していく。

「うう、う……っ」

「苦しい？ ごめんね。ちょっと、苦しいかもしれないね」

浸み込んでいく。包まれる。温かな風が、温かな水が、優しさが、身体の中に入ってくる。

その感覚は苦しくも、切ない。

「本当は服の上からでもいいんだけど……こうやって、印をつけなくたっていいんだけど……こひなが可愛いから、いけないんだよ」

「うー……っ」

「ぶるぶるだね、こひな」

くすりと笑った声に、もう羞恥が限界になって、涙が溢れる。

「やだ…っ…や、しの」

「もう少しだけ、味あわせて」

そろりと動いた手のひらが、小日向の神経を焼き切らせた。

20 : 昔話をしようか。2 (前書き)

紫武視点です。

くたりとなった小日向に、いとしさと切なさど、ほんの僅かな笑いが込み上げる。せつかくなので小日向の可愛らしいものを味わっていたら、こんこん、という扉を叩く音がわざとらしく響いた。

「都記……」

邪魔された。

そう思った紫武だったが、朝食を運んでくれた都記に止められなければ、危うかった。

「まだ、早いのでは？」

それは茶化すような言い方ではなく、案じていた。

「まあ、ね……あれくらいで倒れるようなら、もう少し時間が必要かもしれないな」

腕の中でくつたりとしている小日向を抱き直し、寝間着を着せ直してやる。寝台に座り直すと、小日向を横向きに抱き、大きくて柔らかな枕に背を預けた。

「小日向さまに魔法をかけて、もう六年ですか……」

「ああ……やっぱり、難しいね」

涙を流しながら眠る小日向の頬を撫で、その涙を拭いながら、紫武は悲しみにも似た笑みを浮かべる。

「どつしたら、こひなとずっと一緒にいられるのかな……こんな力を持っていたって、なんの役にも立たないよ」

「紫武さまはそのお力で、小日向さまを護っておられます」

「そうかな？ 本当に僕は、こひなを護れている？」

「ええ、確かに」

都記の言うことはいつだって当てにならない。紫武を中心にものを考えるから、それを知っているから、訊いても無駄だ。

それでも、肯定されると嬉しいものだ。

「ねえ、都記」

「はい、紫武さま」

「僕は……こひなを愛しているようだよ」

「……、それはよかったです」

「いいの？」

「もちろんです」

「本心から？」

「ええ」

都記の笑みに、疑いを持ってしまつのも仕方ない。それでも、肯定されると、やはり嬉しいものだ。

「この子を僕のものにしてよかった……今、すごく、生きていてよかったと、思つよ」

ほつつと安堵すれば、都記も安堵したように微笑む。

「紫武さまがそう思われるようになってくださって、わたしはとても嬉しいです」

「僕が幸せだと、都記は嬉しいのかい？」

「当然でしょう。どれだけ一緒にいるとお思いですか」

紫武は都記と、それはもう小さな頃から、ずっと一緒だ。この関係も、ずっと長く、続いている。

その年月を思うと、ふと、笑ったらいいのか泣いたらいいのか、わからなくなる。

「きみを僕から解放してあげたい」

そう言えば、都記は苦笑した。

「わたしが勝手にそばにいただけですが」

「僕は、それをよしとしている。同じことだよ」

「いいえ、わたしの勝手ですよ。どうしても、わたしはあなたのそばを離れられません。気になさらないでください」

都記はのんびりと、寝台の横に置いた机に朝食を並べていく。その手つきは優しく、柔らかく、楽しそうだ。

「……都記」

「はい？」

「必ず、兄上を殺すから」

ふと手を止めた都記は、しかしすぐに動きを取り戻し、茶器を紫武に差し出してくる。

「お気持ちだけで、充分ですよ」

いつも見ている、柔らかな笑み。

茶器を受け取って、紫武はまっすぐとその双眸を見つめた。

自分が持っている片方の、濃紺の瞳を両方に宿した、稀代の魔法師を。

「僕は兄上を殺す」

「……意味のないことだと、小日向さまに言われたのでは？」

「僕にとっては、意味のないことだよ。けれど、僕以外には、意味がある」

互いにじつと目を逸らさず見続けて、ふと空気が割れたのは、腕の中にいた小日向が身動きしたからだった。

「う、ん……」

「……こひな？」

もうそろそろ目を覚ますだろうか。枯渴した力を補っただけであるから、満たされれば目を覚ますのも当然だ。だが、少し待ってみてもそれ以上の反応はない。

くす、と紫武は笑った。

「朝食にしようかな」

「そうしてください」

小日向の眠りを妨げないように腕から解放して、寝台を下りた。

こんこん、と扉が叩かれたのは、朝食を摂り終えたあとのことだ。

都記が応対に出て、小さく開かれていた扉が大きく開かれると、サリヴァンが入ってきた。

「おはよう、サリエ」

「ああ、おはよう。調子は？」

「見たとおり。そっちは？」

「歩き始めた」

肩を竦めたサリヴァンが、「今はよそうか？」と眠る小日向を見て言ったので、名残惜しいが紫武は小日向のそばを離れ、サリヴァンを隣室に促した。

「ツエイルが歩き始めたなら、そばにいてあげたほうがよくないかな」

「あんと少し話があるだけだ。すぐに戻る」

「そう。まあ、座って話そうか」

サリヴァンを長椅子に促して、紫武は向かいの椅子に腰かける。都記が気をきかせてお茶を用意してくれた。それに口をつけながら、「話って？」とサリヴァンの言葉を待つ。

「話といっても、とくに話すことはないんだが……伝えておくことはあるからな」

「伝えておくこと？」

「……聞くか？」

「そこまで言って、聞かないなんて選択はあるのかな」

肩を竦めて笑うと、サリヴァンは少しだけ、言いにくそうな顔をした。

「……使者が来た」
「使者っていうと……」

どこから、と言おうとした口が、言葉を発することなく閉じる。サリヴァンが言いにくそうな顔をした理由がわかった。とたんに紫武は、目を据わらせる。

「そう……兄上が、来るんだね」
「……ああ」

頷いたサリヴァンはため息をつき、埋もれるように椅子に沈むと天上を仰ぐ。

「おそらく、昨日のことと関係はなく、来るだろう。あんたの様子を伺いに、な。どうする？」
「その使者は、いつ来たの？」
「朝方、到着したらしい。おれのところには、ついさっきだ」
「兄上が来るのはいつ？」
「明日の夕方には、到着する予定だ」

随分と早いな、と思うのと、やっぱりね、と思うのは、同時だった。

紫武は口許に手のひらを当て、少しだけ考える。

「ねえサリエ、僕らの滞在は非公式だけれど公式的なものだよね」
「んん」

「僕らがここにいることは、皇帝陛下……きみの兄上も知っていることだよ」

「翌日には伝えてあった」
「きみの兄上は口が堅いほうかな」

「女性以外になら」
「……、なにそれ」

ちよつと真面目に考えていたのに、かくんと肩の力が抜けてしま
う。

「博愛主義と言えば聞こえはいいが、ようは人間好きなんだ。しか
も年齢層に際限がない。その中で、女性と子どもには特に甘い人だ」
「え……それ、皇サマとしてはどうかと」
「そついう人だから仕方ない」

生来のものを直せるか、とサリヴァンはため息をつく。なるほど、
苦労させられているようだ。

「んー……それなら、質問の方向を変えよう」
「ん？」

「サリエが捜していたものの中に、ディアルは最初から含まれてい
たのかな」

「今回は……いや、考えてもいかなかったな。ディアルとの友好は続
いていると兄上もおっしゃっていたから、襲撃がなければこれから
も考えなかっただろう」

「これからも、ということとは、ディアルは帝国の射程圏内に入つて
しまったということ？」

「帝国というより、メルエイラだな」
「メルエイラ……？」

それは、としばし考える。

かつて帝国の剣とか皇の剣とかなんとか謳われていた、没落貴族
のメルエイラ家のことだろうか。

「かなり久しぶりに聞いた家名だな……なんでメルエイラ？」
「ツエイはメルエイラ家の天恵者だ」

瞬間的に、紫武は黙した。ついでに瞠目する。

「……もしかして僕、ものすごい敵を作ってない？」

「ツアインはメルエイラ家の当主だからな」

うわ、と心で悲鳴を上げ、息を詰め、限界がきて吐き出す。

「そういうことは早く言ってよー……」

わが兄に殺される前に、サリヴァンの妻の兄に殺されそうだ。

「六年前、失踪したあんたを捜索にきた魔法師の小隊がいたのは、憶えているか？」

「うん？ うん、憶えているよ」

「彼らはツエイを襲撃した。あんたを見つけるために。道理は今でもわからないが、ツエイがいればあんたを見つけ出すのも容易だとしても吹き込んだ、こちらの貴族に利用されて」

「僕もその道理はわからないな……そういえばあの小隊、ディアルに帰ったら壊滅していたけれど」

「ツアインが始末したようだが……やはり帰国が叶わなかったか」

もう決定打だ、と思った。先にサリヴァンの妻の兄に殺される。

「申し訳ないことをしたとは思うが、謝罪はしないぞ。六年前の当時、おれの立場は今よりも微妙だったんだ。前にも言ったが、本当に余裕がない状態だった」

「いや、きみを非道だとかなんとか、罵ったり責めたりする気はな

いよ。あれは僕の責任だし、捜索隊を派遣したのはディアルというよりも、一部貴族の勝手な行動だったからね。兄上は書面で確認してから動くこうと思っていたようだし」

だからかまわない、と紫武は首を振る。

そもそも、六年前のことは、実を言うとそれほど鮮明に憶えているわけではない。ただひたすら兄を殺したくて、殺したくて、それだけで頭がいっぱいだった。それで死にかけて、サリヴァンに助けられて、手当てを受けて回復した頃から、漸く記憶がはつきりとし始めた。怪我の療養をしていた間に起きたことは、動くこともままならなかったのも、そのほとんどをサリヴァンに任せていた状態でもある。憶えていないというよりも、偏に「わからない」だけと言えるかもしれない。

思考回路も危うかった六年前、サリヴァンが下した判断を、今さら紫武が識別しても意味はない。むしろサリヴァンの判断は、最良なのだ。

「兄上が先かメルエイラが先か……とりあえず僕は兄上を早々に片づけたほうがよさそうだね。国と国の均衡が崩れる前に」

「国交は良好だぞ」

「外面はいいからね、うちの王さま」

肩を竦めて微笑むと、サリヴァンは怪訝そうな顔をした。

「おれは未だに逢ってないからな……」

「……顔だけは、僕にそっくりだよ。忌々しいほどにね」

「おれも兄上とはそっくりだと常々言われる。昔は気にならなかったが、今は最悪だと思っ」

「はは、僕と同じだね」

そういえば、サリヴァンの兄だというヴァリアス帝国皇帝サライは、言われてみれば確かにサリヴァンと双子のように似ていた。それは紫武が兄と瓜二つであることと、同じように。

「サリエは……兄上を殺したいとか、思ったことはないの？」

「……、ないな」

「その間はなに？」

「殺したいとは思わないが、激しい憎悪ならあるな、と」
「憎悪？」

「兄上に対してではない。おれは血縁に乏しいからな」

ヴァリアス帝国の先帝は、実弟をその手に向け、弑している。さらに数年前、先帝の妹であった元皇妹も亡くなり、その娘もなんらかの事件を起こして罰せられている。帝国の皇族は、実は少ないのが現状だ。

「なにを憎んで、なにを恨んでいるの？」

問うと、サリヴァンは皮肉げに、唇を歪めた。

「己れの血、天恵、地位」

「え……？」

「ふとした瞬間に、激しい憎悪が押し寄せる」

それは、自分が嫌い、ということと、同義語ではないだろうか。いや、だからといって自分が好きだと言って欲しいわけではないが、そういう考えを持っているというのは意外だった。

「サリエ……自分を否定したらいけないよ」

「わかっている。振り返れば必ず誰かがいて、愛してくれていた。」

ひとりではなかった。だがそれでも……この天恵さえなければと、思うことはあるんだ」

それはどうしようもないのだと、サリヴァンは苦笑した。

その気持ちがよくわかるのは、たぶん、紫武も同じように考えられるからだろう。

「サリエ」

「ん？」

「僕はきみが好きだよ。きみを慕う者たちと同じように。だから、自分をあまり否定しないでね」

「……しのも、な」

ふっと淡く笑んだサリヴァンに、紫武も微笑み返した。

21 : 昔話をしようか。3 (前書き)

紫武視点です。

兄をどう片づけよう。

そればかりを考えながら、サリヴァンが立ち去った部屋でひとり、お茶を飲む。甘いセイ茶は少し咽喉にくるが、舌触りは心地いい。

「よくも姫を傷つけてくれましたね」

そう言われたことに、紫武は特に驚きもせず、視線を向けた。

都記は出ているので、ここに来る者はサリヴァン以外にはない。来るとしたら彼だろうなと思っていたら、その通りだった。

「責任は取るよ、ラクウィル・ダンガード」

紫武は茶器を卓に置くと、嘘くさい笑みを張りつけた侍従を見やっつて、向かいの椅子へと促す。

しかし侍従、サリヴァンやツエイルの侍従長であるラクウィル・ダンガードは、それを拒絶してその場から動かない。

「どう責任を取ってくれるんですかね」

「サリエが言った通り、サリエを混ぜないで報復計画が立てられているみたいだね。標的は僕に定まったのかな」

「おれはあなたを歓迎していませんからね。六年前のこと、忘れたわけではないでしょう」

「忘れるわけがない。だって僕は、サリエに助けられて、それまで

の僕から変わったんだから」

にこ、と微笑むと、とたんに冷気が全身を襲う。逃げたくなるような冷気だ。

「……気になっていたのだけれど、きみはなに者なのかな」

「ご存知でしょう。サリヴァンの侍従ですよ」

「異形の天恵術師？ それとも異形の死神？ それは本当にきみなのかな」

「外の噂なんて、おれは知りませんよ」

「……本当のようだね」

怖いな、と素直に思う。

なにかに対してあまり恐怖心は抱かない紫武だが、生存本能が目の前の侍従を拒絶して、逃げようとしているのがわかる。けれども、逃げられない。逃げられないように、この侍従は冷気を発している。

さてどうしよう、と思ったときだ。

「紫武さまー！」

と、都記が戻って来た。

ただならぬ冷気に、なにかを察したのだろう。そのなにかを、紫武が小日向に感じて、戻って来てくれたに違いない。

ほっとすると同時に、危険も感じた。だから、都記には下手に動かないよう目で促す。

「……おわかりかと思いますが」

都記をちらりと視界に入れたラクウィルが、不気味なほど笑みを

深めて、口を開いた。

「おれは、ツアインほど素直ではありません。わりと捻くれています。なので、なにをするかわかりませんよ」

動くな、ということらしい。

サリヴァンもとんでもないものを飼い慣らしているなど、紫武はそっと息をつく。

「僕を、どうしたいのかな」

「できることならディアルの王サマの前に引き摺って行きたいですよ。しませんけどね」

「なぜ？」

「サリヴァンがあなたを護ろうとしているのに、どうしてサリヴァンを護るおれがあなたを害さなければならぬんですか」

言っていることは正しいのに、それならその冷気はなんだというのか。

「おれは怒っているだけです。サリヴァンがもつとも大切にしている、命よりも貴い姫を、あなたは傷つけたんですから」

直接、紫武が手を出して傷つけたわけではないが、ラクウィル的にはそう変換される事態だったらしい。

小日向とツエイルを襲撃した輩は始末したが、ふたりほど逃がしてしまっている。今さらながらそのことが悔やまれて仕方ない。

「六年前もそうでしたが、いつになったらあなたは動き出すんですか」

「……僕が気後れしている？」

「動くならさっさとしてくださいって言ってるんです。おれはサリヴァンほど甘くありませんし、ましてツアインほど素直でもありません。限度というものを持って行動しています」
「……兄のことは早々に片づけるつもりだよ。サリエにもそれは伝えなければ」

ああ、なんて冷氣だ。身震いがする。笑っているのに笑っていない感情が、とても不気味だ。

「明日には兄が到着する。だから、ケリはつけるよ」

「自国でやってください」

「そのつもりだったのに、あっちから来たんだ。仕方ないだろう」

「サリヴァンを巻き込むんですか」

「巻き込むつもりはないよ。僕はサリエに力をもらいに来ただけだもの」

はあ、と紫武は息を吐き出す。

「僕は、あんまり強くないからね」

例えばこの、目の前の侍従長のように。

例えばこの、ひたすら心配してくれる側近のように。

例えばあの、真っ直ぐないとい子のように。

紫武は強くない。

サリヴァンのような柔らかさも優しさも、持っていない。あの強かさに、ハッとさせられてばかりだ。

「強いとか弱いとか、それ以前の問題だと思っんですけどね」

「自分を投げ出したくなるときもあるでしょ」

「……あなたもなにを考えて行動しているのか、よくわからない人

ですねえ」

紫武と同じように、ラクウィルがため息をつく。終始笑顔だった顔は、どうしたものかなあと、少し呆れていた。

「おれが言いたいのは、兄弟喧嘩はほかでやれ、ということですよ」「そう言うけれどね、僕はそんなつもりないんだよ。喧嘩なんてして意味ある？ あっちは王陛下、僕は魔法師、喧嘩の仕様がなくなる。殺し合いになるんだよ」

「それをほかでやって欲しいんですけどね。まあでも、うちのサリヴァンは拾い癖がひどいですから？ なにを拾ってこようがもう驚きませんけどね？ さすがに王さまは拾って欲しくないなっていうおれの気持ち、わかってくれませんかね」

「こちらもこちらでなにか苦労しているらしい。

ふん、と唇を歪めたラクウィルは、随分と不服そうだ。

ラクウィルのその態度で、紫武はなんとなく、ぴんとくるものがあつた。

「……やっぱり戻りたいんだろうね」

「戻る？」

「あの頃の……平和で穏やかだった頃の、関係に」

「それはあなたと王さまの話ですか？」

「いいや、と紫武は首を左右に振る。

「誓約に縛られる以前の関係だよ」

「……久遠の王と古き魔法師の誓約、でしたか」

「六年前のことだって、そもそもはそれが始まりだからね。だから

僕はこの地に、聖王の膝許に戻されたわけだし」

「……、ちょっと待ってください。聖王の膝許に、戻された？ 戻されたってどういう意味ですか」

どうもこうもない。

あれ、と紫武は首を傾げた。

「サリエから聞いてないの？」

「サリヴァンは今も六年前も、あなたを匿うことについて一言も語りません。言い訳もしないんですよ」

ああだからか、と思う。

だからラクウィルは、ツェイルが傷つけられたことを、まるで自分のことのように怒っているのだ。サリヴァンが、妻を傷つけられともなお、紫武のことを語ろうとしないから。

「六年前、僕はどこでサリエに拾われたと思う？」

「そこからして、知らないんですよ。サリヴァンは口にしません」

「僕が倒れていた場所は、『天王廟』と呼ばれているらしいよ」

「『天王廟』……皇城のど真ん中ですか？ どうしてそんなところに……いえ、それ以前にどうやってそこへ」

「悪いけれど、経緯はわからない。気づいたらそこにいたからね。」

サリエに初めて逢った場所もそこだよ。だから、誓約を与えた神にも、そこで逢ったわけだけれど」

あれは驚きだったなあと、今でも思う。

ディアル・アナクラム国の王と魔法師に誓約を与えた神が、実在しているとも思っていなかったのに、疑う前に理解せざるを得なかった。むしろ、大怪我で頭が朦朧としていたから、疑っている余裕がなかったのかもしれない。それでも、聖王と呼ばれる神の存在は、

確かにあった。証拠があるのか、と言われても、見ればわかるし
か言いようのない、鮮明な存在感だ。疑う余地はないと言える。

「……そういえばあなた、治癒の魔法が遣えましたね」

「べつに僕だけに限られた魔法ではないけれど。都記も遣えるから
ね。今では遣える魔法師が少なくなった、と言ったほうが正しいと
思うよ」

ラクウイルの顔が、僅かに歪む。考えるような素ぶりのそれは、
ラクウイルから漸く嘘くさい笑みを取り除いていた。

「猊下の眷属ですか、あなた」

「……眷属？」

「いえ、言ってしまうえばわが国の皇族は聖王の眷属、属国のディア
ルの王弟であるあなたもそうだと言えます。ですが、それは大きな
枠組みの中での話でもあるんです。聖王の恩恵を皇族や王族は享受
できる」

「んー……うん、わかるね、それ。ディアルの王族は確かに、恩恵
にあやかっているよ」

小さな島国であるのに、戦争もなく飢餓もなく、天災も少ない。
それは王族が地を護っているからだと言われていた。

「その中で、サリヴァンは今代聖王レイシエント・アレイル猊下の
眷属なんです。あなたもそうですかと、おれは訊きたいのですが」
「よくわからないけれど……うん？ うん、あの雰囲気だと、僕を
仕方なく眷属にした、という感じだったかな」

六年前のことはそれほど鮮明には憶えていないが、意識が少しあ
ったときの雰囲気くらいならわかる。沈黙する聖王に、サリヴァン

がひたすら話しかけていたときがあるのだ。そのとき、ラクウィルが言う「眷属」という言葉が出ていたと思う。

「はああ……そおゆうことですかあ」

と、ラクウィルが勝手に納得した。

「どういうこと？」

ラクウィルは自己完結させたが、紫武にはさっぱりだ。

「あなたは猊下の眷属のようです」

「王族でもあるからね」

「いえ、そうでなく。どうやら猊下はサリヴァンに説得されてそうしたようですが、個人的に眷属となった可能性があります」

「……うん、意味がわからない」

「ではお訊ねします。あなたのその右目、いつからその色ですか？」

瞬間的に、紫武は黙った。

答えられないわけではないが、まさかここでそれを指摘されるとは思わなかったのだ。

「あのお嬢さんも……『小さな太陽』さんもあなたと同じ色でしたが、彼女のあれは生来のものですね。おそらく片親が南方の国の出身なんでしょう。南方は黄色味の強い瞳を持つ者が多いと聞きます。それに、これといった力も感じませんからね。ですが……あなたにその説明は通用しませんでしょう。よく見れば、あなたと彼女の色には、僅かながら差異がありますからね」

よく観察している男だ、と思った。

色の違いなど、本当に僅かではないのに、そこまで気づけるとは大した観察眼だ。

つきたくないのに、はあ、と息がこぼれる。

「……ご推察通り、と言おうかな」

べつに隠しているわけではないので、そう答えておく。隠しているのではなく、誰も触れたがらないことなので、喋らないでいただけなのだ。

「僕の右目は、六年前に色が変わった。眼球に傷がついたとかで、視力を失ってね。それで聖王猯下が、なにをどうやったのか治してくれた。その日から、僕はこの色を持ったんだよ」

「猯下からものすごいものをもらいましたね、あなた」
「べつに僕は治してもらわなくてもよかったんだけどね。それを言う前に、サリエが話をつけてしまっていたから。それまで見えなかったのに、いきなり見えるようになっていて吃驚したよ。色も変わっているから、なおさらね」

六年前の大怪我は、さまざまな身体機能を激しく損傷させた。力が己れに返ってくるというのは、まさにあれのことだ。もっともひどい損傷は内臓だったと思う。かろうじて心臓が動いていた状態であつたらしいので、出血も相当なものだっただろう。よく脳が破壊されなかったものだ。いやむしろ、よく生き延びたな、と紫武は思う。あれは死んでもおかしくはない状態だった。

「その様子ですと、帰国するまでおれたちの前に現われなかったのは、本当に怪我のせいだったようですね」

「それもサリエに聞いてないの？ 僕、本気でくたばっていたのだ

けれど」

「帰国するときまで面会が叶いませんでしたので、王族によくある気儘かなと」

「違うよ」

疑われ続けていたのか、と思うと心外だ。それだけのことをしたのだという自覚はあるが、それでもちよつとくらい、信じて欲しいと思う。

「ほとんど眠りっぱなしで、ちゃんとした記憶はないけれどね。三月くらい身体が動かなくて不自由したっていう記憶はあるよ」

「よっぽどですね。なにやったんですか」

「兄上の暗殺に失敗しただけ」

「……やっぱり兄弟喧嘩ですか」

いい加減にしてくださいよ、というラクウイルの顔が、なんだか小日向のそういう呆れた眼差しに似ている。

どうして同じような反応をするかなあと、紫武としては疑問だ。

「今回あなたが猊下のお膝許に戻されたのは、魔法師としてではなく眷属として、なんですかねえ」

「今回は戻されてないよ。自分の足でここまで来たんだから」

「サリヴァンは猊下の眷属です。そこに来たということは、ほとんど同義ですよ」

あああ、とラクウイルはいやそうな顔をする。

「おれも猊下の眷属にしてもらいたいですねえ。そうすればこの状況をもつときちんと把握できますのに」

「いや、僕も状況は理解してないよ？ 最初は本当に遊びに来ただ

「けだったからね」

「あなたの話を聞いて整理していくと、ここにオリヴァンがいないのは当然かと思うわけですよ。ついでに、オリヴァンをここから連れ出すことになった原因も、こういうことがあるから急性さを増したんでしょかね、と」

「オリヴァン、ていうのは……」

「サリヴァンの御子です。そっくりですよ」

「いやだなあ、とラクウィルはさらにいやそうな顔をして、深々と息をつく。どうも納得できないでいるようだ。紫武が納得できないのは、殺し合いを兄弟喧嘩と変換されることなのだが、それはいくら説明しても理解してもらえないので、もう仕方ない。」

「ああそうです。言いたいこととお訊きしたいことがもう一つずつあるのですが、いいですか？」

「そう問われていやだと答えられるだろうか。」

「なんなりと」

「先にお訊ねします。サリヴァンに、言いましたか？」

「ん？ なにを？」

「長くないだろう、とか」

「少し考えて、そういえば言ったな、と思い出す。古の魔法を見せたときの、寿命の話だ。」

「言った、ね」

「なら、言わせてもらいます。余計なこと口にしないでください。姫が聞いていたらどうする気だったんですか。姫は強いですけど、それは腕っ節だけなんですよ。サリヴァンがいないと、大変なこと

になるんです。もちろんサリヴァンも、姫がいないと大変なことになるますけどね」

もつとも言いたかったことを、ラクウィルはここで漸く口にしたのではないだろうか。

この部屋に來た瞬間と比べて、かなり強い冷気が発せられている。

「……サリエを心配しての、ことだったんだけどね」

「それはわかります。おれはあなたを好きにはなれませんが、サリヴァンを想ってくれている気持ちを疑う気はありません。ただ、もしサリヴァンと姫になにかしたら、おれは迷うことなくあなたを殺すでしょう」

殺す、と口にした瞬間の、なんと冷たい瞳。

それまで黙っていた都記が、ぎしり、と動こうとして、ラクウィルのその瞳に射られる。

「おれの力がわかりますよね、稀代の魔法師さん」

「……紫武さまは殺させません」

「ならあなたも殺して差し上げます」

ラクウィルはゆっくりと、視線を紫武に戻した。

「そういうことですから、王さまとケリをつけるなら、さっさとしてくださいね」

最後に浮かべた笑みは、それはもう嘘くさくて、紫武は寒気を感じた。

本当に、サリヴァンはとんでもない狂犬を飼い慣らしているものだ。

ふと目が覚めて、ここはどこだろう、と一瞬だけ考える。すぐにツイイルのことを思い出して、小日向は勢いよく起き上がった。

「ツイイル……っ」

なにがどうなって、自分は寝台の上にいるのだろう。

「ええと、ええと……」

どこまでなら憶えているのか、と記憶を浚って、ハッと、紫武に胸を触られたところまで思い出し、瞬間的に頭が沸騰する。

なにをされているのだ、自分は。

いくら平らに近くても、それなりに育っているものを触られて。

ぐっつと押されて。

ぎゅっつとされて。

「っっっっっっっっ」

なんてことだ。

恥ずかしさのあまり穴に埋もれてみても、たぶんこの気持ちはどっつにもない。

けれども。

いやとは思わない自分がいて。
ただただ恥ずかしいだけの自分がいて。

ふと。

意識を失う前に聞いた、紫武の言葉と声を思い出した。

“憶えておいで、こひな”

“これが、僕の命だよ”

紫武は、それはもう優しい声で、そう言っていた。思い出すと恥ずかしいだけの紫武の声は、小日向に安堵を与える。

それでも。

「しのぶの、いのち……？」

それはどういう意味なのか。

思わず平らに近い自分の胸を見下ろして、首を傾げる。紫武が触れていたのは、本当に真上だ。いや、余計なところも含まれてはいるが、半ばその真上だろう。

薬学を身につけるうえで憶えた人体の構造で、そこには頭に続く重要な内臓器官があることを、小日向は学習している。血流を促す器官がそこにはあるはずだ。

飛び過ぎた考えだろうか。

「……まさか、ね」

そんなことがあるわけない。

そう考えをまとめて、小日向はこの寝室の本来の使い主の姿を捜した。部屋のどこにも、紫武の姿はない。

耳を澄ませると、隣の部屋から僅かな声が聞こえた。

「誰かいるのかな」

都記あたりと話でもしているのだろうか、小日向は寝台を下りて隣室への扉に足を向けた。

入っていいかな、ととりあえず先に隣室の気配を探る。

「おれは怒っているだけです。サリヴァンがもつとも大切にしている、命よりも貴い姫を、あなたは傷つけたんですから」

聞こえた声は、紫武を歓迎しないと云った、侍従だとかいう人のものだった。

なぜラクウィルが紫武のところに。

歓迎しないと云っていたが、やはりツイエルを傷つけたことは彼の不快を増増させ、腹に据えかねたのだろうか。

ぼそぼそと聞こえる声を、小日向は扉に耳をぴったりとつけて聞いた。

「六年前もそうでしたが、いつになったらあなたは動き出すんですか」

「……僕が気後れしている？」

「動くならさっさとしてくださいって云ってるんです。おれはサリヴァンほど甘くありませんし、ましてツアインほど素直でもありません。限度というものを持って行動しています」

「……兄のことは早々に片づけるつもりだよ。サリエにもそれは伝えなければ」

なんだか剣呑な雰囲気だ。

紫武はだいじょうぶだろうか。

そう案じて、部屋に入るか考えあぐねたとき。

「明日には兄が到着する」

という、紫武の言葉を聞いた。

オリアレムが、明日には、到着する。

なんだって、と小日向は瞠目した。

半ば逃げるような形でヴァリアス帝国に来て、オリアレムに殺されるから帰らないほうがいいと言われて、まさかと思っていたら昨日の襲撃だ。紫武の言っていることは本当かもしれないと、そう信じかけていた小日向にとって、この頃合いでオリアレムが来るというのは、紫武の言葉を信じる決定打になる。

どうしよう、と思った。

紫武は、兄弟喧嘩ではなく、殺し合いだと言っていた。他国に来てまでそれは続けられるものらしいと、襲撃されて理解した。

オリアレムは本当に、紫武を殺したいと思っっているのだろうか。心から心配そうな顔して、紫武を想った言葉を並べる彼が、本当にそんなふうには紫武を見ているのだろうか。

わからない。

オリアレムの気持ちも、紫武の気持ちも、小日向にはわからない。彼らは本気で、殺し合いを始めるのだろうか。

兄弟なのに、意味のない殺し合いを、するのだろうか。

「大公の『小さな太陽』さん」

いつのまにか頭を抱えて座り込んでいた小日向は、はっきりと聞

こえた声に驚いて顔を上げた。
ラクウィルが目の前にいる。

「いったいいつのまに現われたのだ。いや、紫武と話していたのではないのか。」

「ど、して……え？ 紫武と、話して」

「終わりました」

「あ……そ、そうなの」

「大公の『小さな太陽』さん」

「……その、『小さな太陽』っていうのは、なんですか？」

「おれはあなたの名を呼べません。ああいえ、呼べるには呼べますが、謂わば予防線のようなもので、気にしないでください」

「はあ……」

なんだろう、この人は。微笑んでいるのに怖いと思うのは目が笑っていないからだとしても、明らかな力の差が小日向を圧迫している。小日向が座り込んでいて、ラクウィルが立っているから、そういった視覚効果もあるのかもしれない。

小日向が感じているものを察したのか、ラクウィルはふと、膝を折って身を屈めた。

「姫の怪我は大公の責任なので、あなたは気にしないでくださいね。それが言いたかったんです」

あ、と小日向は拳を握る。

「ツェイルの怪我は……わたしを、庇ったからで」

「確かに、姫はあなたを庇ったでしょう。当たり前です」

「……わたしのせいだ」

「いいえ、それは違います。おれが肯定したのは、姫のその行動ですよ」

「行動……?」

「ご存知の通り、うちの姫は剣を扱えましてね。半端なく強い剣士なんですよ」

それは、確かに知っている。たまに腰に剣を下げているし、小日向も少しだけ剣を教わった。嗜み、というのは扱いに随分と慣れた手つきだったように思う。

「ついでにうちの姫は騎士でもあるので、誰かを護ることは当たり前です。だから、言ってあげてください。ごめんなさい、ではなく、ありがとう、と」

「……ありがとう?」

「ええ」

にこ、とラクウィルは人好きする笑みを浮かべた。

「もう気に病まないでくださいね」

それでは、と言ったラクウィルが立ち上がり、身を翻す。部屋を出ていき、ぱたん、と扉が閉められた。

「……ありがとう、か。そういえば、言ってなかったな」

ごめんなさいばかりで、助けてくれたことにありがとうの一言もなかった。大事なのはその感謝の気持ちであるのに、自分のことばかり気を取られ過ぎていた。

逢ったら、ありがとうと伝えよう。

それから。

「ああもうラクウィル怖っ」

「ぎゃん！」

「ん？」

背にしていた隣室への扉がいきなり開いて、「こん」と小日向の後頭部に直撃した。それだけでなく、その弾みで、べちん、と顔面を床に打ちつけた。

「なにしているの、こひな」

紫武だ。

「まずは心配してくれてもいいんじゃないのっ？」

「うん？」

「痛かったんだけど！」

後頭部と鼻先が痛い、とどちらもさすりながら訴えたら、紫武はきよとんと首を傾げやがった。

「いきなり扉開けないでよね！」

「今の小気味のいい音は、もしかしてこひな？」

「もしかしなくてもわたしだよ！」

「あらら……痛かったねえ」

おおよしよし、と頭を撫でられるが、今さら遅い。しかし、紫武を拒絶しても無駄だ。

「ああもうそんな可愛いむくれ方しちゃって……可愛いなあ」

「触るな撫でるな抱きつくな！」

「可愛いこひな、やっと目を覚ましたね。怖い思いをした僕を抱きしめて温めてよ」

「ぎゃーっ…！」

ぎゅっ、と抱きしめられて、それが苦しくて訴えても、紫武にその声は届かなかった。

紫武の抱擁から逃れて、なぜか肩で息をしながら、小日向は紫武との距離を一定に保ちつつ、その満面笑顔を睨んだ。いつもの紫武なのだが、どこかなにか違う気がしてならない。

「……………紫武？」

「なあに、こひな？」

にこにこと笑う紫武は、小日向が距離を保っているのをわかっているのか、笑ってはばかりで近づいてはこない。抱きつくとも小日向が暴れるからそうしているようにも見えるが、笑っている中でもその目だけは素直な感情を表わしているように思う。

だいじょうぶだろうか、と思いながら、小日向は口を開いた。

「紫武……………お兄さん、来るの？」

紫武の笑みが固まった。しかしそれも一瞬で、すぐに苦笑に似た笑みを浮かべる。

「ああ、聞こえた？ うん、来るよ」

なにごともしなかったかのようだ、さりと、紫武は肯定する。

「どうするの？」

「べつに……どうもしないよ」
「え？」

いつものように殺し合いだという兄弟喧嘩でもするのかと、そういう返事がくるのかと思っただが、予想が外れた。

「ねえ、こひな。昔話をしようか」

「……昔話？」

「とても大きくて、とても小さな、争いの話」

「む、矛盾してる……というか、戦争の話？」

「そうだね。一对一の戦争かな、あれは」

思い出に浸り、しかし尻いだ淡い微笑を浮かべた紫武は、ゆっくりと小日向との距離を伸ばし、窓辺の椅子に座った。

「昔、とても大きくて、とても小さな戦争があった。きっかけは些細なことだったかな。うん、単純な理由だったと思う」

「単純？ だから、大きくて小さな戦争？」

「そう。一方は、命を大切にする者だった。他方は、命を犠牲にする者だった。だから衝突して、戦争になったの」

「……それ、どっちが悪いの？」

「さあ？ どちらだろうね。僕にはわからないな。こひなはどっちだと思う？」

その質問を返されるとは思っていなくて、小日向は慌ててわが身を振り返り、考えてみる。

「え……えっと、命を犠牲にするほう、かな」

「それはどうして？」

「だって、誰かひとりの命を犠牲にしてまで、わたしは生き延びた

いなんて思わないよ」

「じゃあ、こひなは命を大切にしようの味方だ」

「そうなる……かな。でも、解釈の仕方では、味方じゃないかも。誰かを犠牲にするのはいやだけど、助かる命がたくさんあるなら、わたしはわたしの命を差し出すよ」

ああ、矛盾しているかもしれない。これは意外にも難しいことかもしれない。

自分の考えに、そう思った。

「僕はどちらが正しいか、悪いか、それはわからないけれど、思うことはあるよ。どちらにも信念があって、譲れなかったんだなって」「ああ、うん、譲れないものがあるんだろうなって、わたしも思う」「そのことにね、気づくのが遅れたんだよ」「え？」

「命を大切にする者も、命を犠牲にする者も、互いを理解しようとしなかったんだ。譲れないものは、譲れないから」

それはつまり、と小日向は眉間に皺を寄せ、考える。

「互いに意地っ張りで、強情だったってこと？」

「可愛く言えばそうだね」

「それで戦争？」

「そう。一対一の、大きくて小さな戦争。理解し合えれば、起こらなかっただろう戦争……とても無意味で、虚しい戦争だった」

まるで自身が経験してきたかのように語る紫武に、小日向は首を傾げた。

紫武が語る戦争の話は、国史にはもちろんないものだ。そもそも祖国では、ここ数百年ほど戦争などしていないし、それより以前の

戦争となると世界規模になる。紫武が語る戦争の話は、祖国のものではないのだろうか。

「その話、いつのことなの？」

問うと、ちらりと視線を寄越した紫武は、淡く笑んだ。

「僕が生きたことのある時代の話」

「紫武が……？」

「いつだったかな……今よりもつと魔法が魔法らしくあつた時代だったと思うよ。数字では表わせられないな」

まさか、還暦だ、という年齢は、本当なのだろうか。いや、還暦の年齢だったとしても、それは数十年単位のことだ。数字では表わせられないほど昔なら、還暦なわけがない。もっと年齢を重ねていることになる。

どづいつことだろう。

紫武は、なにを語ろうとしているのだろう。

「そんなに昔？」

「そう、生きたことのある時代だからね」

「生きたことのある……え？ 生きた？」

生きた、というのは過去形だ。過去に、生きていたということになる。

「前世の話、とか……？」

そういうことだろうかと問えば、紫武は「そうかな」とあっさり

答えた。

「記憶があるのっ?」

驚いてそう問えば、やはりあっさりと、紫武は「あるよ」と答える。

「だから僕は、魔法師なんだよ」

「だから?」

「そう、だから。記憶があるから、僕は魔法師になった。なるしかなかった。例えば僕に昔の記憶がなければ、僕は今頃ここにはいない」

「え……」

「こひなを助けることも、できなかった」

「……わたし?」

「僕が魔法師にならなければ、僕は大切なものに出逢うこともできなかった。だから僕は、すべてを否定するつもりはない。ただ、悲しいと思うことは、虚しいと思うことは、許して欲しいと思うよ」

淡く笑む紫武の心がわからない。ただ、それは悲しそうな笑みで、胸が締めつけられる。

「なにがあつたの?」

小日向は、悲しみながら笑む紫武の横顔に問う。

「なんで、そんな昔のこと……どうして、憶えているからって」
「僕は命を犠牲にする魔法師で、オリアレムが命を大切にする王だったから」

瞬間、小日向は瞠目する。まさかここで、オリアレムの名が出てくるとは思わなかった。

「それ、どういう……」

「僕らの殺し合いは、その記憶があるから、起こっているんだよ」

「お兄さんにも……昔の記憶があるの？」

「そう。互いに理解し合えない愚か者たち……それが僕とオリアレムだ」

紫武が、自嘲気味に笑った。その顔を小日向に向けた。

なぜだろう、背筋がゾツとした。

「お兄さんが、命を大切に……紫武は、大切にしなかった、の？」

「僕はその頃、道具だったからね」

「道具……？」

「ああ、今も道具に近いかな。だからオリアレム……兄上は、躍起になるんだよ」

今まで、オリアレムの気持ちなどわかりようもなかった小日向だったが、紫武のこの話を聞いて、なんとなくオリアレムの考えていることが、わかったような気がした。

止めたいのだ、オリアレムは。

命を粗末にする、犠牲にする紫武を、オリアレムは大切にしたいと思っっている。

だが紫武は、それを受け入れようとしなない。

「どうして……どうして？ 今は、互いに信念をわかって、譲り合えばいいってわかっているのに、どうして」

「どうして兄上を殺したいと思うのか？」

「だって今ならわかり合えるでしょう？ 紫武は道具じゃない」

「僕は魔法師なんだよ、こひな」

「だからなに？ その信念を譲れないから？ 理解し合う必要があるって、もうわかってるでしょう？」

「こひな」

そうじゃないんだよ、と。

それはわかっているんだよ、と。

紫武が、苦笑する。

「なんのために、久遠の王と古き魔法師の誓約があると思う？ 無意味だというのは、もう、わかっている。僕と兄上が争ったところで、どちらか互いを傷つけられない。僕は今の在り方を否定する気はないよ」

誓約があるから、今の状態が続いている。それは小日向にだってわかる。昔とは違う、それもわかる。紫武が言いたいことはわかるのに、なぜだろう、解釈できない。

「もちろん今よりもっと若かった頃は随分と悩んだよ？ 自暴自棄になったり、過去の記憶に囚われてみたり、いろいろ無茶やって、けっきょく諦めて……でもね、許せないことが一つだけ、あるんだよ」

「許せない……こと？」

「僕の母が東の生まれだと、以前教えたよね？」

いきなり話が飛んで、少々戸惑う。その話を思い出すのに、少しかかった。

「えと……ガーンナムさんのところで言ってた、あれ？」

正解、と言わんばかりにニッと笑った紫武が、その視線をちらりと、小日向の背後に向ける。振り向くと、珍しく不安そうな顔をした都記がいた。

「紫武さま……それは」

「黙って、都記。僕は昔話を、している」

都記のなにを戒めたのか、紫武に牽制されると、都記は俯いてしまふ。

「……都記さんが、なに？」

「どうして僕の髪や瞳が、都記と同じだと思っ？」

「それは……都記さんも、紫武と同じ東の……」

自分で言っつて、ハッと気づく。まさか、もしや、と疑念が脳裏を過る。

「わかった？」

問われて、無意味に口が開閉する。

「……うそ」

「嘘なものか。いつ気づくのかと思ったら、言っつまで気づかないなんて、なんだか、こひならしいね」

くすくすと、遊び心に笑う紫武に、小日向は息を呑む。

「都記は僕の兄だよ。父親は違っつけどね」

23 : 昔話をしようか。5 (後書き)

だいぶ更新が遅くなっております。

申し訳ありません。

それでもおつき合いしてくださっている皆さま、本当にありがとうございます。
ございます。

都記を、兄だと言った。父親が違つと、言った。

それは本当なのかと、思わず都記を凝視してしまう。俯いていた都記は、小日向の視線に気づくと顔を上げ、苦笑した。

「本当ですよ」

否定しなかった。都記は、紫武を異父弟だと、言っている。

「え……じゃあ、お兄さんは？」

「オリアレムさまとは一滴たりとも血の繋がりはありません」

「……ちよつと待って。えと？」

「わたしの父は、母が城に召し上げられる前に死んでいます。入城した母は、オリアレムさまの父である先王との間に、紫武さまを授かったのですよ」

「都記さんと紫武は兄弟、お兄さんと紫武も兄弟、そういうこと？」

「はい、そうなります」

なんと複雑な構図だろう。

「都記さん、紫武のお兄……兄さんだっただ」

「兄、と呼ばれるほどのことはしていませんがね」

「紫武に敬語なの？」

「紫武さまは王弟殿下であられます。対してわたしは一介の魔法師、

立場が違います」

「兄弟なのに？」

「兄弟でも、違うものは違うのです」

血の繋がりのある弟に対して言葉に気を遣うのは、気持ち的に複雑ではないのだろうか。小日向はそう思ったが、都記の性格的に言えば、立場というものを優先させそうだ。

「それで……紫武が許せないことと、都記さんと兄弟だっていうのは、なんの関係があるの？」

「あんまり驚いてないね？」

「かなり驚いてるよ。でもまあ、なんとなく髪の色とか瞳の色で、郷里が同じならなにかしらの関係はあると思っていたし……納得した部分大きいかも」

「僕と都記は髪と瞳の色しか、似ている個所がないからね」

「お兄さんとは顔、そっくりなのにね」

「ああ都記、オリアLEM殺しに行くからちょっとつき合って？」

「えっ？ まだそういうこと言うの？ しかも都記さん巻き添え？」

話の流れ的に言わないと思ったことを口にされて、思わず吃驚したら、紫武はにんまりと笑った。

「忘れてるね、こひな。僕はオリアLEMを殺したいと、常々思っているんだよ？」

「あー……そうだった。無意味だってわかってるのにね」

「無意味だから、意味がある。無意味という意味がね」

「え？」

ふわりと微笑んだ紫武に、窓からの陽光が差し込み、影を作った。それは少しだけ小日向に不気味さを思わせ、ゾツとしたなにかを感

じさせる。

聞いてはならない、そんな気がした。けれども。

聞かなければならない、そう思った。

「僕は、都記の母を殺したオリアレムを許さない」

ああ、聞くべきではなかった。

だが、聞かなければならないことだ。もうなにも知らないでは、
いられない。

「お兄さんが……都記さんの、お母さんを？ それって、紫武のお母さんでも」

「僕の母じゃない」

「え？ 兄弟じゃ……」

「あの人は、僕を息子だと思ってなかった」

そう言った瞬間、紫武の瞳に僅かな悲しみが滲み、しかしすぐにそれは微笑みにかき消された。とても胸に突き刺さる、だが見せよ
うとしない感情だった。

「僕を産んだ母ではあるけれど……死ぬまであの人は、僕を息子だと認識しなかった。だから、あの人は僕の母じゃない。都記の母だ」

「紫武……」

「悲しくないとは言わない。寂しくないとは言わない。けれど、どうしようもないことだ。あの人は父に、そしてオリアレムに、世界を奪われてしまったからね」

「……世界を？」

「僕の比ではない悲しみと寂しさが、あの人にはあった」

紫武の視線が、ふっと、窓の向こうに投げられる。なにかを見ているのではなく、眺めているような穏やかな双眸で、過去のことを思い出しているようだ。

「あの人の民族はとても稀少だね。古き魔法師の一族、とも呼ばれている。それくらいに、その民族には例外なく全員に魔法師の力があつた」

「え……それって」

「ああわかる？ 偉いね、こひな。調べたんだ」

紫武や都記の外見的特徴のある民族について、小日向は調べたことがある。出身が東の地、と聞いていたので、それはすぐに調べることができた。もつとも、詳細はわからない。紫武が言ったように、稀少な民族だったからだ。

「魔法師が多いっていうことと、外見的特徴……髪が黒っぽい青で、瞳もそうだっていうことくらいしか、わからなかったけど」

「充分。そもそも、それくらいしか人の目にわかる特徴はない。調べようと思つても、それが限界だろうね」

「ほかに特徴が？」

「本人に訊くといい」

紫武がちらりと視線で促したのは、もちろん都記だ。

「都記さん」

「……調べるほどのことでもないのですが、そうですね……わたしも知りませんでしたから、特徴というか、見分ける方法になるのでしょうか」

「見分ける？」

「例外なく全員に魔法師の力があるわたしの民族は、古き魔法を遣

えるのです」

古き魔法。

瞬間的に、小日向は瞠目した。それは今や、遣える者がいないとされる、古代魔法のことではないのか。

「すごく、難しくて、禁忌だって、言われてるんじゃない……」

「そうだよ」

さらりと、紫武が肯定する。

「それを遣えるの？」

「遣える。だから父は……都記の母を攫って僕を生ませたんだ」

ぎくりとする。

それは言うまでもなく、考えるまでもなく、非道なことだとわかる。紫武が母親を、母と思わないようにしている理由が、それだけで理解できる。

「なんで……どうして、そんなこと」

「古き魔法を手にしたかった、とか、そんなところだろうね。けれど罰当たりなことをしたんだから、当然、父は病に倒れたよ。もちろん都記の母は心を病んだわけだから、そうならないほうがおかしい」

くす、と紫武が笑う。それは小日向に恐怖を感じさせる笑い方だった。

「そういうわけだから、僕は都記の母に、母を求めてはいない。無理やり僕を産ませられたんだから、可哀想な人だよ。もっと可哀想

なのは……僕に魔法師の記憶があつたことかな」

「……記憶が、あつたからって」

「僕は父が望んだように、王族にして魔法師だった。しかも古き魔法を遣える魔法師だ。これのどこが、可哀想なことではないと言える？」

望んで産まれてきたのではないのだと、紫武は言っている。祝福を受けたことなどないと、言っている。

なんて悲しいことだろうと、小日向は唇を噛んだ。

まさかあの紫武が、能天気で陽気な紫武が、心の奥底でそんな悲しみを抱えていたなんて、知らなかった。

「あの人が僕を殺そうとしたのも領ける……なんたって、無理やり、だからね。ほんと、あの人は可哀想だよ」

己れの母でもある人を、可哀想、と口にする紫武のほうが、可哀想だった。はつきりと悲しむこともできず、寂しいと口にもできず、ただじつと、己れへの理不尽を享受しているなんて、どれだけつらいことだろう。

「お母さん、は……」

小日向にも、母と呼べる人はいただろう。けれどその記憶はない。だから悲しいとも思わない。悲しいと思う前に、紫武や都記がいてくれた。だから悲しみも寂しさもない。けれども紫武には、母親の記憶がある。

小日向を振り向いた紫武は、笑っていなかった。

「オリアレムが殺したんだよ」

ひどく冷たい感情がそこにあった。

「僕を殺そうとしていたあの人を、オリアLEMが、殺したんだ。黙って僕を殺させておけばよかったのに、オリアLEMがそれを邪魔した」

それが小日向の言うところの「兄弟喧嘩」の始まりだと、紫武は言った。

オリアLEMはただ、弟を護りたかったただけだろうに。命を投げ出した紫武を、また命を犠牲にするなと怒っただけだろうに。

「どっして……っ」

どうしてここまで、この兄弟はねじれてしまったのだろう。いや、すれ違ってしまっているのだろう。

都記の母を護りたかった紫武。

紫武を護りたかったオリアLEM。

互いに、護りたいものが違って、衝突してしまった。

それは過去、久遠の王と古き魔法師が、衝突してしまったときのようじ。

「僕は都記の母を殺したオリアLEMを許すことなんてできない。殺されて然るべきは、僕のほうだったんだからね」

けっきょく紫武は、自分が生きているそのことが、許せないのかもしれない。

けれども。

それは、小日向を否定することに、なる。

「わたしを……拾ってくれたのは、どうして」

無表情だった紫武が、ふと、柔らかな笑みを浮かべた。

「僕みたいに、生きながら死んでいるようなきみが、許せなかった」「え……？」

「僕みたいに生きて欲しくなかった。そんな目をして欲しくなかった。絶望したような世界を、見ていて欲しくなかった。だからきつと、これは僕の願望だ」

許せなかった、という言葉に心臓を鷲掴みにされたような気分だったが、あとから続いた言葉は、とても優しくかった。

「僕の命をきみにあげたい。そう、思ったんだよ」

「紫武の、いのち……？」

「僕自身要らないと思っている命なら、僕みたいに生きて欲しくないと考えた子に、あげてもいいだろう？」

それは、小日向に出逢ってから、生まれた願望。紫武はそう言うて、よりいっそう朗らかに微笑んだ。

「きみは僕の命だよ、こひな」

いとしい、とその瞳が語る。

それはまるで、命を投げ出した人とは、思えない双眸だった。

24 : 昔話をしようか。6 (後書き)

停滞していて申し訳ありません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702m/>

眠らないきみへ。

2012年1月10日03時50分発行